



報會園南

號一十第

日十月二十年二十正大

校學女等高菽
會園南

The improvement of a young lady's conduct requires a healthy body and a well trained mind. She ought to be trained to bear any Kind of effort and to be always ready to do her duty whenever called upon, as she goes out into the world

C. C. Kuba.

目次

△表紙▽

一、南園館より……………(石版二度刷)……………

△口繪▽

一、しげり(南園館裏東)……………三葉 久志あや子……………

△巻頭▽

一、感 謝……………

△教の園▽

一、藤山本縣内務部長の講話要項……………二
二、人格修養の意義及び方法について池上岩太郎……………六
三、女子体育雜感……………守田 茂作……………一
一、選讓について……………柳原 良助……………一四

△文の園▽

一、作 文……………一七
二、詩……………八三

一、童 話……………八九
一、和 歌……………九二

△由縁の園▽

一、子……………永井 光子……………九七
一、おのゝき……………同 人……………九七
一、東宮行啓……………池田 キヨ……………九八
一、秋ふかみ行く……………椿 マス子……………九八
一、朝鮮だより……………福岡 サト……………九九
一、臺灣より……………野田 キヨ……………九九
一、奈良だより……………佐々木たみ子……………一〇〇
一、東京だより……………永井 光子……………一〇一
一、旅行だより……………木原みどり……………一〇二
一、朝鮮だより……………松本 咲子……………一〇二
一、シンガポールだより……………山口屋シナ……………一〇二

△本校記事▽

一、學級日誌より……………會報部委員……………一〇三
一、學科受持…………………………一一一
一、生徒數及級監…………………………一一一

△秋の園▽

一、學年末庭球大會…………………………一二五
一、第一學期庭球大會…………………………一二五
一、卒業生送別會…………………………一二五
一、圖書展覽會…………………………一二六
一、運動會…………………………一二六

△會員名簿▽

一、特別名譽會員…………………………一二九
一、名譽會員…………………………一二九
一、特別會員…………………………一二九
一、舊特別會員…………………………一三〇
一、校外會員…………………………一三一
一、在校會員…………………………一五四

△吊 詞▽

一、亡き會員の靈に…………………………一六四
一、大石さんの死について…………………………一六五

△後 記▽

一、編輯だより…………………………一六六

△本會記事▽

一、震災義捐金…………………………一二二
一、母 姉 會…………………………一二二
一、菊花會…………………………一二二
一、篤志者芳名…………………………一二三
一、同窓會主催大音樂會…………………………一二四
一、第十回同窓會…………………………一二四
一、庭球大會二件…………………………一二四
一、第七回運動會…………………………一二五
一、南園會役員…………………………一二六
一、同窓會基金趣意書…………………………一二七
一、同 規 則…………………………一二八
一、同窓會寄附芳名…………………………一二八
一、同窓會基金現在高…………………………一二八
一、南園會基金現在高…………………………一二八
一、會 告…………………………一二九
一、本校開校十周年記念南園文庫…………………………一二〇
一、南園文庫寄附芳名…………………………一二〇

報 會 園 南

號 一 十 第

日 十 月 二 十 年 二 十 正 大

校 學 女 等 高 萩 立 縣 口 山

會 園 南

春雨や蓬をのぼす草の道
 錢湯で上野の花の噂かな
 吸殻のころげて涼し橋の上
 人まれの團扇をつかう小猿かな
 明月や座頭の妻の泣く夜かな
 行く秋やさてく人を泣かせたり
 いかめしき音や霞の檜笠かな
 山を越す人に別れて枯野かな

芭蕉 子規 采類 越人 芭蕉 蕪村

仰いで天を望めば北斗閃き、伏して地を開けば落葉聲淋し、秋まさに閑なるか。歩を阿武川に運びて思案の糸を繰り、杖を菊が濱にひきて默想の時を刻む。靜に我腕を我胸に置けよ、我が尊き心臓の旋律を聞かむ。

地裂けて熱湯迷れる日、天落ちて萬象を燒くの時、人の心の亂れは如何、大自然の斧鉞は何をか教わつらむ、我は又何をか學び得し、いかであはぬ身の幸のみ我事さやせむ。鳥聲なく草木凄悲の野に立てよ、我心に咽びぞあらむ光ぞあらむ。

わかしと思ふ人、若かれと祈る人、そはなごて容貌体容かのみいはむ。蘇秦の錐を學ばずとも、車胤の螢をめでずとも、人さし生れ出でし身の、人さし生きてこそよけれ、限りなきつさめ、はてしなき道、跬歩も積まば千里に至らむ。尊き私の靈を知らばや。

由緒正しき南園に育まれし身の幸を思ひつゝ、我學び舎の日に月に、永久に榮ゆれと清き祈り、胡馬越鳥のならばはあれど、我等も亦感謝の涙もて迎へたり流れて止まぬ月日の速さ、多い共につさめむのみ。

(大正一二、一一、七、みつば生)

藤山本縣内務部長講話

(大正十二年三月二十二日 巡視の際)
於萩高等女學校講堂

私は只今校長先生から紹介していただいた、内務部長の藤山であります。本日當校を視察に來まして何か話をしてくれよこのことではありますが、從來教育方面には多く關係を以て居りませぬ。殊に女子に對して參考となる様な話は、經驗上からいつても、知識上からいつても、不可能の事と思ひますが、折角皆さんと會ひ得たのでありますから、一言御話を申し上げます。

當校には當校の方針があり、校風があります。其の方針校風主義いふ様なものは、長き本校の歴史によりて確立され、縣當局に於ても之を是認して居ります。皆さんは、此の主義方針によりて教養されて居ることでありますから、私の説が其の主義方針に反して居る時は、廣き世間には此の如き意見をもつて居る人もあるとして聽いて置いて下さい。内務部長の話したことを盾にして、學校の主義方針に反した態度に出ることは、大なる誤であります。幸にして私の説と本校の主義方針に何等衝突する處がらいとすれば、將來一層此の點に留意して下さい。

私が皆さんに希ひたいのは、極めて古く、又極めて平凡な事であります。それは「諸嬢が一人残らず良妻賢母となれ」といふことであります。

今日の所謂新しい女は、此の如き古き言葉を用ふるは、大なる時代錯誤ありといふかも知れませんが、私は單に古いから、平凡だから、といふ事によつて其の價值は決定されるものでないと思ひます。

古いものといへば太陽ほど古いものはありません。我國の建國は二千五百有餘年、随分古いものでありますが地球の古さは比較になりません。そして太陽は其の地球の幾千倍古いかも知れませんが、これ程古いものがあるませうか。此の古い太陽は毎日東から出で、西に入り、風雲寒暑の日も皆同じことを繰返して居ます。これ程平凡なものがありませうか。古い點に於ても、平凡な點に於ても太陽に勝るものは無いが、有難い點に於ても亦太陽に勝るものはありません。

奇抜なることを望むならば、太陽が西より出で東に入る程奇抜な事はありません。併し其の結果は吾等の死であり、絶滅であります。古きが故に、平凡なるが故に悪いとは斷定されません。要は其の内容實質の如何によるのであります。

私が今話した良妻賢母主義も、太陽程古く、太陽程平凡ではありませんが、現在の新しき女の主張するものに比ぶれば平凡であります。併し平凡なるが故に時代錯誤として一笑に附し去るのは早計であります。私は皆さんに「良妻賢母たれ」と強ひて、決して悔ゆるものでありません。

若しも「我等は弱き女なり。良妻賢母の兩方面を要求することは負擔が重きに過ぎて何れも成功し難いことになるから、願くは一つにせよ。この事ならば、私は「良妻たるよりも寧ろ賢母たれ」と要求します。男子が如何に偉そうな事を申すとも、子供を生み、子供を教養することは女子に及びません。或點は絶対に不可能であります。

勿論學校に於ては、多くの場合男子に依りて教育されて居ますけれども、家庭に歸れば殆ど母の手に教育され學校に入るまで六七年の間は、全然母によりて教養されるといつても差支ありません。

皆さんが良人として仰ぐ人は、多くは年齒も長じ、生活も激しい。従つて皆さんが良妻として男子を教養し、

匡正することは困難であるかも知れぬが、皆さんが教養する子女は年も少く、経験も乏しいから、皆さんの好む通りにされ易い。

日本を脊負つて立つ次代の國民を教養するのは、母として絶大の義務であつて、又唯一の特権であります。若し皆さんが次代の國民を教養し得ずれば、國家の前途は實に寒心に堪へません。我帝國の前途は、皆さんの肩に掛つて居るといつても過言ではありません。絶對的の立場に於て十分なる覺悟を持たれんことを要望いたします。

時勢は駭々乎として進歩します。今日皆さんが新しき知識、新しき科學として教育されつ、ある事柄は、やがて皆さんが人の妻となり母となる時代に於ては最早古き科學とあるのであります。今日現在の知識の最上級の程度に於て教育を受けつ、ありまして、學校を出て五年たち、十年たつた後は、一層進歩して今日の最上級の知識は最劣等にはあらずとも、最上級ではありません。故に將來修養を怠る時は、社會の落伍者となります。皆さんは單なる一個人ではありません。次代の國民を教養すべき大責任があります。其の際古き知識のみにては、時代の要求する立派な人を作り出す事は出来ません。

現在の家庭主婦の状態はさうです。尋常科一二年の生徒ならば、母は讀方算術の指導をなし得るでせうか、四年五年六年の生徒は最早満足に指導され得ない状態にあります。教育は社會の進運に伴ひ進歩します。皆さんが家庭の人となりて子女を教養し得ずれば、學校の教育は家庭に於て破壊される譯であります。學校教育の効果を持續し向上せしむるは主婦の責任であります。家庭に於て學校教育が破壊せらるゝとすれば、實に残念なことであります。學校教育はさうまでも確保しなければなりません。

母は子女が今何を學習しつ、あるかが不明であつて、子女を教養することは出来ない。新時代の人には常に新しき知識を修得して、子女を教養する事が出来なければなりません。皆さんは今後とも出来るだけ時間を割き、方法を講じて、新しき知識を修得する事が大切であります。

學校を卒業すると同時に、學問を怠る様になるといふのは今日の狀態であります。次代の國民をつくるためには主婦の知識が如何に必要であるかに氣付いた時、學校を卒業したる後も決して修養を怠つてはならないといふことを今から申しておきます。

一面道德の方面に於ては最古き道德を守らなければなりません。女の最も重んずべきは愛であつて、最も守るべきは貞操であります。此の徳目は新しき女から見れば甚だ古く、又笑うべきものであるかも知れませんが、女から愛と貞操を取り去つたならば、女にあらずして牝であります。私は女と牝とは大なる差があるものだと思います。

女の生命は愛であります。尊ぶべきは貞操であります。新しき女が如何に巧妙なる論法にて説き立てても、女より愛と貞操を取去ることは出来ません。私は愛と貞操は女の生命であるといふ事を斷言して憚りません。一面新しき知識を修得すると共に、愛と貞操を女の生命としなくてはなりません。

以上を約言すれば、

知識の方面に於ては最も新しき女たれ。

道德の方面に於ては最も古き女たれ。

出来得べくんば良妻にして賢母たれ。

若し兩者不可能とすれば良妻を捨つるも賢母たれ。といふことを申上げて置きます。(終り)

人格修養の意義及方法について

特別會員 池上岩太郎

私は前號に於て、人格修養の根本義として人生觀を確立すべきことを説き、おほエネルギー不滅の信念の下に人生觀を立て、見たいといふことを述べましたが、本號では之に關聯して、人格修養の意義や方法の一端を述べて見たいと思ひます。

教育の目的は人格完成にあり。といつてもよい。親が子を教育し、教師が兒童生徒を教育するにしても、又自分が勉強をするにしても、何れも其の人格を修養して立派なものにしようとするのが主目的であると思ひます。それで之に關する考を簡単に述べて見たいと思ひます。

人格とはどんなことか

人格といふ語は普通に「人の人たる所以」とか、「人たるの資格」とかいふが、これには種々の意味がある。哲學上、法律上、神學上、心理學上、倫理學上、皆それ／＼異なつた意味を持つて居ます。

哲學上でいふ人格とは人間が人間として有して居る所の實在、即ち人間の本體をさすのである。人は神様から其の形に似せて造られたものであつて、實在の神の影象であるといふ人もある。また宇宙間の萬物の最單元たる單子といふものがある。宇宙が活動力を有する如く此の單子も活動力を有する。そして一個の單子は全宇宙の映寫したる鏡の如きもので即ち小宇宙である。吾人の精神は其の單子中の最優れたる働を有するもの、集合であつて、理性の働を有し、完全無缺に進まんとして居るものである、こいつて居るものもある。又宇宙間の森羅萬象は最元々素の力なるものから出來て居る。人間は其の力の表顯の最も向上優越せるものであつて、自觀によつて直ちに其の宇宙全一の大心靈に繋がるものであるといふ人もある。

法律上でいふ人格とは、法律によつて與へられたる權利能力を有つて居る主體をさしていふのである。例へば選舉權を有する者、所有權を有する者等の類である。これには自然人ある個人のみならず、團體、會社、組合等にも、組織によつては、法人といつて法律上の人格を有し得る定めになつて居る。

神學上では神の本性に關する議論にも用ひられる。人間が獨立し思考し行動し感するが如く、神は思考し行動し自覺的統一意識を有する完全體である。神は無限に完成せられたる人格である、こいふ様な説もあるが、しかし之は人間の人格をさすのとは趣を異にして居る。心理學上でいふ人格とは如何。吾人が常に考へたり、感じたり行動を爲したりする場合に於て、自分自身が考へたり、感じたり、行つたりして居ることを覺るであらう。自分が考へたり感じたり行つたりして居るのを、他人が考へたり感じたり行つたりして居ることは思はぬであらう。かくの如く、自分(我)がこいふ觀念を以て、考へたり感じたり行つたりする意識が、統一せられて居る状態を人格といふ。故に心理學上の人格には自分こいふ觀念即ち自覺が最も大切である。彼の嬰兒や、白痴風癪や、氣狂などは、自分が斯うして居るのだこいふ自覺を明瞭に持つて居ないから、心理學上の人格は成立しないことになる。又狐憑きなこいふものは、自分のすることを狐がする様に思つて居る。時には狐の様に思つたり、時には自分の正氣に返つたりする。かやうなものを二重人格といふ。時には三重人格などに人格が分裂するものがある。これら二重三重に意識が分裂して統一せられるのは病的である。

倫理學上でいふ人格とは、道徳の主體となるものをさすのである。道徳上の判断をしたり、道徳的の行爲を起したり、する其の責任体をいふ。精しくいへば何事か行はうとする時に、此れは行ふべきことであるか行ふべきからざることを判断し、而して之を行つた時にそれが善事であつたら賞讃を得、惡事であつたら責罰を負ふべき主體をさしていふのである。

人格修養といふ場合の人格は、主として此の倫理學上の人格をさすのである。そして其の人格は如何にして完全なるものになるかといふに、人格は品性によつて定まり、品性は意志の習慣によつて成立する。今其の大要を述

べるいかにしよう。

意志とは如何なるものか

意志とは吾人が行爲を爲す時の心の働きである。吾人は誰でも快き事を望み、快からぬことは避けようとする其の得ようを欲し、避けようを欲するの心を慾望といふ。併し其の快し不快し慾望することは、人によつて一様ではない。其の人の思想感情が優れて居れば、善い性質の愉快を求め、劣つて居れば卑しき性質の愉快を求める。中には旨いものを飲食することを最も快しとして常にこれを慾望するものもある。中には音楽を最も樂しとして追求するものがある。或は學問を無上の樂として之が爲に寢食を忘れる人もある。或は信仰に餘念なき人もあり。或は善を爲すこと最も樂しといふ人もある。此等は皆其の人の感情の如何によるのであるから、人は感情を高潔にせねば高潔な慾望は起らぬ。随つて善良な行は出来ぬことにある。

そして或る事が行ひたいと或物が求めたいと欲望が起つた時には、吾人は其の事は善いか悪いか、又出来得るか得ないかを考へねばならぬ。又同時に幾つもの慾望が起つた時は、其の何れを満足すれば宜しいかを思慮し選擇せねばならぬ。そしていよくこれが宜しい之を斯うして行はうといふことまで考へて定める。之を決意といふ。此を思慮し選擇し決意するには前以て知識の働を養ふて、思慮判断のよく出来る様にしておかねばならぬ。

かくの如くして之は善い行である、爲すべき行であるを判断し、いよく之を行はうと決意して次に之を實行するといふ段取りになる。かやうに慾望し思慮判断をし決意して實行する心の働きを意志といふ。つまり意志は行爲に關する精神作用である。

意志の習慣

吾人は何か善行を行はうとする時に、之は善事である、實行すべきことであると思つても、すぐ其れが容易く行へるものではない。意志の薄弱な人には中々實行にうつれない。世には知識判断は十分に出来て、口では偉い

ことを言つても、中々實行は出来ぬ人がある。之等は意志の弱いものが多い。實行には中々努力奮闘を要する。最初は殊に苦になる。併し初めには苦になる様な事でも、之を繰返すにつれて容易く出来る様になる。朝寝坊が早起の習慣を作らうとするに、始めは早起がよほ苦になるが、次第に容易になり、遂には努力を要せず早く起きられる様になる。又毎朝冷水擦擦をするにした人が、最初は餘程の努力を要するが、遂には朝起きるにすぐ向るの苦も感ぜずに、思はず知らずの内にモウ肌を脱いで拭くといふ様に迄なる。此等が意志の習慣といふのである。吾人の日常ありふれた仕事は大概は習慣的に行つて居るのである。習慣になると左程に心身を勞せず早くさつさと行へるのであるから、習慣はよほ重寶な精神作用である。善いとは其習慣を作るとに努むべきである。

品性

品性とは道徳上の語であつて、人がモウ思はず識らずの中にも爲すことが善事に叶つて居るといふ様に、善良なる意志の習慣を得た時は、此人は品性が善いか又は品性が出来たといふ。また善いことを爲る習慣が出来なければまだ品性が出来ぬといふ。若し悪事を爲す習慣がついて居る人は、品性が悪いとか、品性が成つて居ないといふのである。

何の努力も要せずに、思はず知らずの中に其の行ふ所が道徳に叶つて居るといふ様な習慣を得たのが理想的の品性である。これまでに於けるには餘程の努力を要する。彼の大聖至聖といはる、孔子でさへも、若い時から修養に努め力めて漸く七十歳になつて品性が出来たといつて居られる。即ち「七十にして己の欲するところにしたがひて矩を踏む」といつて居られる。此の境地が則ち理想的の品性である。我々凡人と雖も努むれば理想的のままでは行けぬにしても稍々之に近いものにはなれぬことはない。

品性ミ人格

品性と人格とは同じものを見方を異にしていつたのである。品性は人の行爲の方面即ち働きを見たので、人格とは其の人としての資格即ち價値の方面を見たのである。其の人の行爲が善ければ其の品性が善いので従つて人

としての資格即ち人格が高い。若し行爲が悪しければ品性が賤しいので従つて人格は低い。單に人の姿を見たのみでは人格の高下は分らぬ。行爲の善悪即ち品性の良否を見て初めて人格の高下が分る。例へば此の筆の價值は高いか低いかは問はれても、單に形を見たばかりでは眞のところは分らぬ。これで字を書いて見て、善く書けるか書けぬかといふ働きを見て、はじめに資格の高下が分ると同様である。則ち其の物の働きの良否によつて價值の高下が定まると同様に、品性の良否によつて人格の高下は定まるのである。

人格修養の方法

人格修養とは、人としての價值資格を向上し完成しようとして、學業を修め、徳性を養ふことである。如何にすれば人としての資格の向上が出来るかといふに、善き働が出来る様にするのが主である。即ち善き品性、道徳的の品性を造り上げることに主として人格の向上は出来るのである。

如何にすれば善き品性即ち道徳的品性が出来るか。それは意志の習慣を道徳的に作り上げるのである。善き意志の習慣を作らうと思へば如何にすべきか。

第一、感情を高潔純正にし、快活無邪氣にすることである。感情を美しくならしめて、以て高尚善良なる趣味慾望を起さしめることが必要である。

第二、知識を進め、良心を啓培して道徳的判斷のよく出来る様にすることが肝要である。良心の判斷力を以て人格の核と名ける人がある程である。

第三、善行を反覆練習して以て習慣を成らしむるまで撓まず屈せず努力すること。

その他、なほ方法上に關しては、いふべきこと多けれど、今回は大關に止むること、します。それから又其の修養の方法如何によつて、其の人格にも個性の差が出来るのであります。今は述べませぬ。とにかく子供の教育についても、自己の勉強についても、人格修養のためには善良なる意志行爲の習慣を作り成すことが最も必要であると思ひます。(終り)

女子体育雜感

特別會員 守田茂作

歐洲大戰が産んだ諸問題の中で一番大きなものは、國民体育の問題であると思ふ。各國とも競つて自國民の体位向上に力齧を入れて居る。殊に最近女子の体育問題が高潮して來て、到る處で振興策を講ずる様になつた。併しこれは決して一時の流行物ではない。眞劍に而も持續的に根氣強く實行せねばならぬ問題である。人生死よりつらい事はあるまい。吾人の幸福中の幸福は「健康でよく働ける」に如くものはない。昔から「健康は富に勝れり」「健康は人生最大の恩恵なり」「健康は幸福の母」などの箴言が残されて居るが、至極最も事と思ふ。然るに現在日本人の體質体格体力は如何。殊に日本婦人の健否活動能率は、といつたら寒心すべき點が多々あると思ふ。即ち一般に歐米人に比べて、發育が悪い。短命で死亡率が高い。殊に血氣盛りの青年處女に死亡者の割合の多い事は驚く程である。而して日本の男女に就て調査した表を見るに、男子より女子の方に多くの缺陷を持つて居ることがわかる。今種々な統計によつて國民体育殊に女子体育の覺醒を促したいと思ふ。

歐洲學生と日本學生との身長体重比較

年齢	身長		体重	
	(男)	(女)	(男)	(女)
十三年	四、八六二	四、八六二	九、五七三	九、五七三
十四年	四、八六二	四、八六二	八、八七七	八、五三三
十五年	四、八六二	四、八六二	一、〇、二七〇	一、〇、二七〇
十六年	四、八六二	四、八六二	一、〇、二七〇	一、〇、二七〇
十七年	四、八六二	四、八六二	一、〇、二七〇	一、〇、二七〇
十八年	四、八六二	四、八六二	一、〇、二七〇	一、〇、二七〇

備考 右側の數字が歐學生、左側が日本學生である。

各國女子各年齢死亡率表——これに依つて二十歳から二十五歳迄の死亡率が歐米各國に比して著しく多い事がわかる。この死亡の大多數は内臓に缺陷を有する疾病殊に肺結核で斃れるのである。

年齢	日本	英	佛	伊	獨	米
十五	六、三	三、〇	四、四	四、七	四、七	四、七
十六	七、四	三、四	四、九	五、三	五、三	五、三
十七	八、〇	三、八	五、二	五、四	五、四	五、四
十八	八、七	三、九	五、三	五、五	五、五	五、五
十九	九、二	四、〇	五、五	五、七	五、七	五、七

日本人の死亡率は一歳から十歳迄及び六十歳以上換言すれば、幼年期と老衰期に於ては他國に比して餘り大差はないが、十五歳から三十歳頃までの死亡率は實に日本が首位を占めて居るのである。又人生五十五歳は昔の事で明治十九年には死亡者平均年齢二十八歳であつて居る。明治四十年には三十一歳に短縮され、現今は人生僅か二十九歳といふ短壽命とあつて居る。其の主因は我國青年處女に死亡者が多くなつた爲である。

日本男女死亡率の比較——歐米各國の統計を見ると、男女の死亡率に大差は認められないが、日本に於ては特に婦人は男子より其の率が多い事が次の表で伺ふことが出来る。

年齢	男(人口千に付死亡者)	女(同)	差
十五—二十	六、三	八、三	二、〇
二十一—二十五	八、四	九、四	一、〇
二十五—三十	七、六	九、〇	一、四

男女死亡率にかゝる差を表はす主因は女子に結核死亡の多いが爲めである。これ女子は男子に比し、因襲的に運動しないから菌に對する抵抗力、菌を被保する力が乏しいからだと思はれる。

近時右の様を統計表なきで、國民体位の減退しつゝ、ある事がわかつたために、學校体育は勿論、家庭体育社會體育が盛んにあり、色々公衆的な設備が出来、一面衛生思想が普及して、兩者相俟つて好結果を收めつゝ、あることは眞に國家のため喜ばしい事といはねばならぬ。次に女子体育の根本に觸れた諸問題について述べて見やうと思ふ。

男子の學校で男子らしい男子を体育に於て作るに同様に、女學校に於ては女らしい女子を作らねばならぬ。体操遊技其他の諸運動によつて、充分働き得る健全な女子になる事が現在の女子として最も肝要である。併し決して男子と相ならんで劣らない活動能率を有する体力を養へといふ意味ではない。動もすれば理解の足らぬ女子は男子の如くピン／＼跳びまはつて態度まで粗野な男子の如くあるものが少くあいが、それは大間違ひである。こゝに氣を付けねばならぬのは、女子だからといつてピン／＼はねてはならぬと誤解してはならぬ。体力氣力養成のためには我を忘れてバックも跳び走高跳もやり、ランニングもやらねばならぬ。たゞ己れは精神方面で、自分は運動によつて快活な而も温雅な女らしい女子になるのだといふ自覺は何時もあければならぬ。運動に興味を持ち、運動を盛んにやればやる程一方に於て、身じまりのよい女性美があらはれて來なければならぬ。女子体育が盛んになるにつれて、世の誤解を招く點は前述の自覺なくて時と所とを考へないで粗野な態度にあるからだと思ふ。

体育即教育、体育即修身と人が言つてゐるが、無自覺なものがこれに没頭すると、何事も粗野になつて女らしい所は認められぬやうになつて來る。これは前にも述べた如く、運動をやつてゐる人々の精神の持方一つで、運動する時運動しない時とをよく考へ、運動場と教室、學校と家庭、劇場で芝居や活動を見る氣分と葬儀や客人の前に臨む氣分——其他萬事時と所とを考へて各自の女性美を發揮することに務むれば、眞のスポーツ精神に合致し世の誤解もなくある筈だと思ふ。時々餘所の女學校で聞く事だが、脚を上げることやよく跳ぶ女子に、お作法が割合に下手だといは、前述の時と所とを考へて温雅な氣分を出さないからだと思ふ。平均のよく取れる跳躍

運動の上手な人に緩なお作法の稽古の出来ぬ道理がある。

此の気分や体育運動の趣味理解によつて完全な女らしい女子が出来ものである。この完全な女子によつて作られたる家庭、これより生れ出る子女、かゝる母によつて養育される子女は、運動に趣味も理解もなき陰鬱で病弱の婦人によつて作られる家庭子女とは雲泥の差を生ずる事は火を見るよりも明かである。

出征せんとして居る武士が「妻は病床に臥し、子は飢に泣く。」の状態を見て、さうして思ひ存分戦場で働けやう。運動によつて健全な身体と快活温雅な精神を作つて「あゝたしつかり御國の爲めに……」。子供や老母は私が引受けてお世話致します。」と夫を勵まし、夫をして後顧の憂からしむる所に何とも言へぬ婦人としての尊さがあるのではあるまいか。

家庭の圓滿は一家の主婦によつて作らる。農夫が毎日野原で働くのも、内に快活温雅な主婦が居て慰めるからである。隱鬱で病弱なそして不平がましい婦人によつて作られた家庭の主人は、農工商を論ぜず、十の能率を持ちながら七の力も出せない。日本四千萬の男子の活動能率は、かゝる病弱な婦人のために妨げられて三千万の男子の能率にも及ばぬ譯となる。思つて此處に到ると國家の爲め慨嘆に堪へない。

要するに現在の婦人は現在の國民体格殊に婦人体質に目醒め、自己を健全にすると共に將來有爲の子女を作り出す覺悟が無くてはならぬと思ふ。(大正二二、一一、五)

遜讓に ついて

特別會員

柳原良助

私は先づ此夏の旅行中、私を最も強く感動させた一事實を紹介して、それによつて私の感想を述べて見よう。東京から大津まで、私共四人のグループは、五十餘りの商人風の男、乳飲兒を抱いた労働者らしい若い婦人

と、高女の徽章をつけた十五六の少女と、私とであつた。

病後の長い旅行で、尠からず疲れて居た私は、横濱の雑沓も、富士の麗姿もよそに、まぎろみつ、濱松まで運ばれたが、少女の行動は遂に私を有意識の中に導いて居た。

彼女の女は度々席を離れた。其の度に彼女の女は遜讓な態度もて、他の三人に少しの迷惑もかけまいとつとめて居た。汽車が遂に道出入する度の窓の開閉は、幾回も幾回も、私共が「又か、うるさい。」「私許りは閉ぢぬぞよ。」等思ひ勝ちな時でも、自分の讀書を置いて必ず自分で開閉して居た。斜陽の差込みを防ぐ事に迄心して、殊に同席の婦人に對しては、それは彼女の女とは比較にならないみすほらしい姿であつたが、子供のおしめを探したり、寝せ起しの手傳をしたり、自分の食料を分つたりして、心からある親切を盡して居た。私は其等の態度を見て、彼の女の總てが、謙遜で快活で、博愛心に富んだ同情ある行爲そのものであるかの如くさへ思つた。少女が與へた柔かい温い感情は、それに接する總ての人を、かうした氣分に導かないでは置かぬだらう。私の紹介する事實は單にそれだけである。

私はそこで自分に立ち歸つて見なければならぬ。私は人の爲に盡す行爲は、如何に小さくても、非常に美しいものであるといふ事は、常々思つて居た。そして人の爲に盡し得る身の幸をも考へて見た。併し私には彼の女程のわだかまりのない、美しい行動はとり得て居ない。彼の女の念頭には、人の爲め、我のためといふ區別はないだらう。なぜならば、何事にせよ、行爲が故意に形づけられる間は、そこに苦しい影がある。彼の女にはそれが無い。全く本能的であるかの如く、透徹しきつて居たからである。

彼の女が相當の家庭の女である事は、すぐ隣の一團が彼の女の父母弟妹である事、彼の女の所持品、言語、容儀によつても知られる。けれども彼の女は、自分の身柄を誇らんとする風だにない。相手人の身分によつて、決して其の態度を二三にして居ない。彼の女の目には、世の中の人皆が、同じが様に美しい、親切な人々映るだらう。

私は子供の時から、博愛とか、謙遜とかいふ事はよく聞かされ、自分も好んでそれを口にして居た。それで居て事實だけ人の爲に盡し得たか、それだけ謙遜でも得たか、私はそこに可成りの自信を持つて居る筈だつたのに、顧みて漸汗脊に流れるのを覺ゆる。彼の一少女の無言の示教は——私が病後神經の高ぶつて居たせいであるかも知れぬし、或は平素もそれ以上の純な行爲に出會して居るであらうが——私にいひ得ぬ強い感銘を與へてくれた。それは決して誇張でもなく虚飾でもない。私は負ふた子に教へられて淺瀬を渡つて見よう。

人は我の總てを人の爲に盡すといふ事は、時間的にても非常に困難な事である。それが我の終世を委ねてなれば、殆ど不可能に近からう。併し平素の吾々の行動の中には、特に努力をしなくとも、或は一舉手一投足の勞で人のために盡し得る小さい仕事はいくらもある。——それ等をあす事によつて聊かも自己を損ぜないで——それがあはれかたくな性は一面倒だ。「自分がしなくてはよい。」無駄な事だ。「わざわざさへも葬つて居る。現在自分がそれだ。彼の女の行つた事は六ヶ敷い事ではない、誰にも容易に出来る事であるが、誰もがあまりして居ないだけだ。

人は又相當の自尊心を持たねばならぬ。自分の靈の尊大を知る事はよいが、尊大振る事はよくはない。人の下駄を揃へたがために、自分の尊大が傷けられはせぬ。先を歩くのが大將で次を歩くのが家來だ。定まつては居ない。これ見よがしに尊大振るのは、徒に對者の感情を害して、自己の尊大を傷けるに過ぎぬ。自尊心とは、そんな相對的の上すべりのものではなく、自己の信念から派生したものでなければならぬ。美衣によつて、又身振りによつて得られるものではない。

私は彼の一少女の偽らざる行爲は、實に崇高なもので、又偉大なものであると思つた。そして其の得た實感の人に與へる事が出来る様になつたら、——それが自分にも氣付かないで行はれる様になつたら、私はさういふ境地に立たなければならぬ。同時に諸嬢も亦其境地に至られん事を希望する。(終り)



文の園

雨の一日

本一菊 佐方キミ子

朝からつゆの雨がしとしと、ミカなけに降つた。お爺さんとお婆さんは陰氣くささうな顔をして、ごことが大水で家が崩れたとか、人が死んだとか、色々な世間話をして居た。私、姉は裏の畠に面した座敷で裁縫をする。

時々姉はヒステリックの様に、物指を持つたま、じつと不動の姿勢をして、降る雨をきつと睨んで居た。あまりをかしいのでくすくす笑ふと、こちらをむいて、「何故つて笑ふの?」と私にくつてか、つた。「だつて? あ、はは、。其の様子がをかしいので復笑つた。」「あちらへ行つておしまひ、うるさくつて仕方がない。」ほんとうに何といふ姉さんだらう。本當のヒス

チリにあつたらさうしよう。此處に居て、復叱られる。大變。早速裁縫箱を手に持ち、縫ひかけの着物を引きづりながら、姉さんの聲の聞えないやうに、外の座敷の隅つこの所に行き、蛙の様にべたん座つた。そのとたん、裁縫箱から落ちた針が、それとも、もとからあつたのか、針が足にたつた。「あつ、いたい。」と大きな聲を上げる。姉さんが眞先に飛んで來た。「あら、さうしたの。」私は針のたつた所を手であてて居た。「ね、さうしたの。」い、ね、姉さん何でもないの。「そう、まあよかつた、頓狂な聲を出して、人がびつくりするわ。」やれ、い、いはぬばかりに、姉はほつと胸をなでおろしたやう。そして其のまゝ出て行つた。

ヒステリーの様におこつて居た姉でも、やつぱり妹はかほゆい。私は感謝しながら、じつと姉の後姿を見送つた。

通學の道すがら

本一菊 北出いくゑ

美しく磨いた靴をはいて、勢よく朝の御挨拶をすまし、飛び足で我が家を出る。

外は大勢の學生達が、三四人づつ、一固りになつて

あの廣くもない道を、話しながら、道一ばいになつて平氣な顔をして歩いて行く。あの四ツ角までは女學校の生徒も、小學校の生徒も皆一緒になつてゆきますがこゝまで来るに西と北とに分れて、いそいでクエンサンの筋を通つてゆきます。クエンサンの、悪臭に手を鼻にかけなくてはむせぶ程です。朝の冷たい風に今までの悪臭は一時に去つて、たのしい課業の事を思ひうかべて三ツ角を曲る。向ふの方からはお友達の様が近づいて来る。待つのは長いからと思つて挨拶だけをして、さつさと遅刻をせぬやうに急ぎ足で八丁筋に出るこゝまで来ると、もうオルガンの音が低く高く響いて来るのに誘はれて學校氣分に移ります。

或る夕べのさゝやみ

本一菊 進藤美穂子

さわがしかった一日も終つて、今日も靜かに暮れてゆきます。乳色に曇つた沈んだ空には、小鳥一羽見られません。たゞ時々吹く冷たい風に、ざわざわともみぢ葉をゆすります。そうしては、ささやきながらも散つてゆきました。私は何思ふこともなく窓邊に坐りました

そして段々と夕闇につ、まれてゆくあたりを見てゐました。黒ずんだ向ふの家も、丁度獄屋かのやうにすぐく聳ねて見えます。初秋とはいひながら何といふ淋しい夕でせう。

やつぱり私には遠くとも古里が懐しくなりました。そして唯々一度でもい、から歸りたいのです。美しいものもありません。きれいなものもありません。もう一度あの思出多き古里で、お父様お母様と、一緒に暮して見たいのです。一時の淋しみはしのぎます。瞬時の愛ひもしのぎます。

けれど、けれど、希望は絶えず露草のやうにふみにじられてゆきます。でももう思ひますまい。思つたこゝで返らぬ過去をみます。決して、もう一度と、そんな日は永久に歸つては來ないでせう。

冷たい風は、幾度となく私の涙をさそつてゆきました。暮れやすいみ空には、たつた星が一つあざやかに黒ずんだお山の上に、またたいて居ます。水のやうな冷さが、すべての上に垂れて、夜の沈みゆく姿は心に深く、深く、感じられます。

私の願

本一菊 原文子

私の願はただ一つであります。お母様が二十一歳の時から、神経痛で夜になればいたみ、冬になれば冷たくなられるのです。私はお母様のお足を暖く又は痛まないやうにと言ふ事は、まだ一時も、私の胸より離れた事はありません。

或時學藝會があつて、私の友達はみんなお母様の手をこり合つて、喜びいさんで行かれましたけれども、私達姉妹二人はお母様の手をもひかないで、會場に入つた時、私はお母様の病氣が早く癒へて、あんなに親子が一緒に行ければよいと、つくづく涙ぐんだ事もあります。

私は寄宿舎に入りましてから、時々お母様の御病氣の事を思ふと、俄かに歸りたくあつて、坐つても居られなくなり、つと窓にもたれて、人知れず雲の往來に心を砕いた事は一度や二度ではありません。私は何より、お母様の病氣が早く癒へて、お母様の微笑のお顔が仰ぎたいのであります。私は常に自然が私のこの願を叶へて下さればよいと、そればかりを願つてゐます

通學の道すがら

本一菊 林光子

何時もなら十日市を歸るのに、其の日はさうしたのか町に廻つた。

江向を通つて居ると、向ふから小學校の三四年生とも見える子供が、四五人連だつて歸つて來た。

通りすがいになつた時。ふと、私の心にしみこんだ言葉があつた。

私は誰に貸したか知らん、又何時かかへつて來る時があるだらうと思つて居た。

お！其の言葉、……其の子の心中はどんなであらう？、……又何時かかへつて來るだらう。

本當に人を疑はない人を信じて居る、私もあんな廣い心になつて見たいと、思はず知らず後にふりむいて其の子を見た。

子供は何も知らぬ、唯お友達と面白さうに歸つて行く。

私は今に其の子の面影が、眼前にちらついて消ぬあ

あ、した純んな心の持主に、さうか何時までも、あ

の通りの心で、清く美しく育つ様に祈つた。

私の願

本一菊 横木 房子

私は願といつても、未來將來を望むの希望ではありませぬ。只簡単な少女らしい願といつてもよいものです。その願といふのは身丈があまり高くならぬ事です。私は自分の大きくあつてゆくのが恨めしい様で、又あんなだか悲しう御座います。阿母さんよりも私の方が大分高いし、阿父さんとは同じ位です。まだまだ大きくあつてゆかうと思ひますが、思へばなさけなくなつてしまひます。どうしてこんなに身丈が高くなつてゆくのか知らず。私は時々佛前で身丈のひく、ある様に祈つたりして見ましたが、佛前の御利益があつてかなくてか、身丈はすんすん伸びてゆく様に思ひます。阿母さんと他所へ行く時も、私はいつも道の低くなつて居る方を通ります。でないに阿母さんの方が大分ひくいから、人があんなか思ひはしいだらうかと思ふが爲です。

私の身丈がひく、なつたら、私はどんな苦しい事、つらい事でも我慢し、又よろこんでつらい事、苦しい

事を引受けようと思ひます。ほんごにこの願はいつ聞き届けられるでせう。思へば頼りない事です。

通學の道すがら

本一菊 渡邊美知恵

いつものやうに我が家を出た。一二間の道路をはさんで、稻田には一面黄金の波が立ちさわいでゐた。

秋の雨がそほ／＼と降つてゐる上に、今日は時刻を誤つたのか、友達を失つて、唯一人で何となく物かなくあつてきた。

ふと、思ひ出したのは過ぎし日、關東に大震災のありしことを。此の大震災の爲、わが同胞のいかばかりにくるしんだかは、今更に私共の想像より以上にあつたにはちがいない、住むに家なく、路頭に迷ふ人が大勢あつたであらう。子を失つた親、親をなくした子供たちが親を呼び、親は子というてさがし求める其の聲は、彼方此方に幾度繰返されたかは、わからないことであらう。

さては東都に居られたお友達の身の上を思ひやり、新聞をぎで見た景色なきが、今私の胸の中にあざやかにうつり、親をたづねる子、子を呼ぶ親たちの聲が、

耳に入つて思はず知らず、同情の涙にかきくられて歩む中に、いつしか長い暇もすぎ、天神様の前まで来た。やつと或お店の時計を見て、ホット一息した。それはまだ授業までには、かなり時間があつたから。

秋の雨の降る朝

本一梅 福永 ヲメ

昨夜から降り続いた雨がまだやまぬのかざあ／＼と降つて居る。美しい絲のやうな雨なら好いの、ひびい音を立て、降りしきる。私は雨の降る日は、なんだかかなしいやうな、さびしいやうな氣がする。

あちらではかへるがぎう／＼と、こちらではからすがおはやうといふ挨拶をするのか、てんでにがあ／＼と鳴いて居る。向では櫻の葉が今にも死にさうに、眞赤な顔をして首をうなだれて居る。前の花鳥にはこの間先生にいたゞいたゆりや水仙がそろ／＼首を出しかけて居る。色づきはじめた蜜柑の樹にいかにもつめたさうに雨はなほしきりと降りしきつて居る。

夕立

本一梅 堀一靜 子

風鈴も音せず、庭の木立も動かない、悪魔のやうな

形をした、眞黒い雲がむくむくと、あわたゞしげに大空を走つて居る。今まで焼くやうに照り付けて居た、太陽も俄かに影を隠して、天地が急に暗くなつて来た。忽ちざあつと樹々の梢が騒ぎ立つて、強風が吹き巻いて来た。蟬は鳴き止み、蜘蛛はちぢこまつて、巢の眞中にぶら下つて居る。一瞬ばかりと一閃、次いでごろごろ。二つ三つ遠く鳴つて居ると思ふ中に、銀の矢を射るやうな大雨が、ほつりほつり。乾物を取り入れる、雨戸を締める、あわてふためく人間界の大騒ぎを、いたづら兒がひきかきまわすやうに、雷はいよいよ鳴りしきり。びかりびかり閃めく雷光と共に、盆を覆す様な驟雨。乾物は半濡縮めさしの雨戸から、横にふりこむ、降る、鳴る。光る。吹く。こ、暫くは天地も滅するかと思わせる。蚊帳の中に縮み込む臆病者もあれば、網をかついで小川に走る氣樂者もある。

雨や、小降となる、縁先の手拭掛、猶はたはたと窓を打ちしめつた障子の紙が、風の出入毎にぱたりと鳴る、雷は遠くに微かに聞えて、雨は全く晴れた、窓を明けると涼しい風が心地よく吹き込む。連日の晴天に、色も薄くしほれて居た草木は、此の

一雨に全く生きかへつて生々として見るから、潔きよ
いこれで人間も蘇つた蜘蛛は巢を繕い、蟬の聲は梢に
聞ゆる。表の小川にはむくむくと、きべ水が一ぱい流
れて居る。天地のすべて生れ返つた。
嗚呼夕立ほぎ勇ましいものはあるまい。

ピンポン 本一梅 田總 ヨシ

とうとう、ニブレーにあつた。ピンポンをする人は一
生懸命になつてゐるけれども、私にこつてはきちらが
勝つても、負けてもよいから、たゞ私の番が早く來れ
ばよい、私の番になつたら、きつてあの上手なHさん
を、負かしてしまひたいと、控所の椅子に腰をかけて
いろ／＼と思慮をめぐらすうちゲームと言ふ聲が聞
て來た。いよく私がブレーをさける番になつた。私は
嬉しいから、とびきり大きな聲でブレーとさげんだ。
Hさんがさつきから勝ちつゞけて、まだなか／＼負け
さうな氣色もない。相手のIさんもなか／＼上手で、
始は勝負がつかあかつたが、Hさんのおきまりの強い
球が續く内にIさんの景氣が悪くあつて、Hさんが又
勝つた。私は胸をおぎらせながら、ピンポン臺の前に

もらした。

秋の思

秋のい、日が續いた。その日の午後、ふと私は日の
斜めに當つた縁側へ寝ころんで見る氣になつて脛を枕
にして横になつた。空を眺め、日の光を仰ぎ、そして
十坪ばかりの庭土をみたが、晴れた空から吹く風も光
る様だつた。私は目がたわいもなくほそめられた。雲
はようあしげに、ふわりふわり浮遊してゐて、灰色の
庭からは雑草の芽が青い針のやうに、伸び出て居る。
かの二階に、オルガンがのどかに、眠く流れ聞えて來
る。地上のものはみんな秋に酔つてしづかに、微笑し
てゐるやうに見えた。矢張り他のものと同じやうに、
その麗かな秋の光に酔つたか、ふさめづらくも、こ
こかへ遊びに行つて見ようと思つた。

亡き兄

本一梅 上石タマコ

「嗚呼ほんとうにい、月夜だこい」彼の女は口の中で
こつと泣きながら庭に出た。直ぐ側の小池の邊には香の
い、月見草の花が淋しく輝いてゐる。そして所々に銀
色の玉を結んでゐる。池の水が少しゆらいだ、ここか

立つた。始の四五回は例の強い球で、今までの意氣込
みはこへやら、勝てるかしらこ心細かつたが、こに
かくやつてみようと思つて横球を出してみた。Hさん
は受けられなかつた。私は又横球をした。とうとうHさ
んを横球で負かしてしまつた。私は勝ちましたもの、
恥しい様な嬉しい様を何ともいへない氣がした。その
次の人も、私は負かしたが、いつも下手な私は氣まり
がわるくて、その次はわざと負けておいた。

小品 一題

本一梅 米山 立身

煙

夕日が西にかたむいた。湯殿の屋根から煙りが立つ
て居る。私は見ることもなく見て居た。ユラユラと立ち
上る煙が美しい、曲線を描いたかと思ふと、ばつと崩
れる。そして雲のやうに、むくむくとわいて出る。ふ
わりと擴がる。白絹のやうに透き通つた。綺麗に鮮
やかな色だ。まるでダンスでもしてゐる様に、又は水
草がゆらぐ様に氣持よくゆらぐ、そして中途から細い
幾筋かに分れて思ひ思ひの方面に、さまよひつゝ、夕
べのどばりの中に消れてしまふ。私はほつと、いきを

でジと虫が鳴き出した。

彼の女は何時もちうした月のい、夜には、獨り外に
出てついつとこりとしてゐるのが彼女の此の頃の常で
あつた。そして彼女はこつとして居る間は何とも云へぬ
嬉しい様な淋しい様を感に打たれるのであつた。今日
も彼女は夕食を終へると外に出た。それは去年の丁度
此の頃の事、彼女は二人とあつた兄と別れたのであつた
兄さんはこつとして居られるのだらうか。定めし草葉の
蔭から私の行く末の事を思つて下さるだらう。きつと
そうなんだらう。……………

彼の女は深い深い考に沈んだ。「兄さん私は達者で勉
強しておりますから」……………思はず彼女は呼んだ彼の
女の眼は熱い涙で一杯になつてゐた。月は彼の女の顔
に直射した、彼の女は小さい胸に両手をしかとおし當
て、……………

月は何時の間にか山の端から三間も離れてゐた。こ
こかで名も知らぬ虫が鳴いてゐる。しんとした夜には
果敢なけにすだく虫の音の外には何の音もしない。

彼の女は何事か思ひ切つた様に、「會ふ事があれば別
れる事があらねばならぬ。生きる者には死はまぬかれ

ぬのだ。彼の女は小さい胸をおしだいて今一度廣い空を仰いで家の中に入った。河の瀬音が遠く響いて来た。

規律は何故に尊重すべきか？

本二菊 石田 久子

一村一郡一縣と相寄り相助けて社會生活をなす人間社會に於て、第一に尊重すべきは規律である。かゝる生活をなす人間社會に於て、規律の自然に生れ起るのも當然の所以である。然れば人間社會を形成せる我々一箇人は規律を尊ぶべき責任を有す。その責任を一個人が尊重すれば、世は平和に進歩するであらう。若し此の世から規律の二字を取り去つたらば、世の人心の動搖は如何ばかりぞや。必ず不幸不安な聲が巷に湧いて安心云ふことは更にないのである。幸にして我々は規律制度の完備せる國に生れて、自己生命の何分の一かの一日一日を安らかに暮して行かれるのは、眞に感謝すべきである。然れ共萬物の靈長として誇る人間にして規律あるに甘んじて居てはならない。益々勵んで自己の本分を盡さねばならぬ、これに反して規律制度の不完全な國家に生を永へる國民の心は如何ば

かりぞや。果して如何？勿論衆生の心は一致せず安心も出來ずして、無秩序極るに違いない。その裏面には國力は薄弱となり進歩の見込は更にない。そして世界の國々と對照した曉には大なる遜色を表すであらう。而して一度國の一大事の生じたに假定せば、忽ち不規律の鳥合の衆は忽に亡ぶに違ひない。

これに一見類似せるは、我々日常の學校生活である社會には社會の規律ある如く、學校にも學校の規律がある。これを確守するは生徒の務である。若し學校に規律を犯す者ありと假定せば、學校全般の美を損ひ不秩序は遺憾なく暴露するのである。だから相當の學識のある生徒は規律を守り、學業に勵まなければならぬ。そして親切に教訓して下さる先生の心に副ふ様にして、規律を確守して學校の輝を放つべきである。

小春のひかり

本二菊 岡 里子

まあなんと美しい眺でせう。左も右も見上げる程の峰が聳れて、其の間を流るるを玉江川といひます。

秋になれば大半は河原となつて、磊々たる石の間を淋しい音を立て、急いで、下へへへ行きまゝ。常盤

木に交つてゐる、樅、栗、銀杏なき黄、淡黄、紅色こそ違へども秋の心を見せて、例に映つてゐます。

流れはこはれかかつた板橋や、土橋をくゞり、野を去り、うねりうねつて、末は遠く見なくなつてしまひます。流れを下れば水車の軌る音、牛の聲、或は、野良歌の聲が混じ合つて、聞ゆる。それらのすべてに小春の暖い光が流れる。右手の谷を越えて聳える、面影山の裾の畠は傾斜にして、山腹に一段々々の層をつくつてゐる。

うすだかくつまれた稲の束は蜜蜂の巢を据ゑられたそれらにも。そして其の稲束の周りに雀は、やかましく騒ぎ合ふ。道には白手拭を冠つた人が、塵多い中を一二頭の牛を一人で手綱をとつて、下へへへと靜かに下りて來るのを見る。

日記の一節

本二菊 齋藤 政子

二三日前から降る雨もやみ、謎の雲も拂はれて星は空に閃いた。私は嬉しかつた何きなしに。寢に附くと共に間もなく夢路をたどつた。

あくれば十三日そはあつかしき母校運動會だ。床を

離るゝ間もなく凄じき一發は放たれた。外に出て天を仰げば巴城の空は一點の曇も無く平和の光はやがて輝き始めた。私はガールズハイスクールへ向つた。秋風は私の頬をちぜながら左右の田畑に時々黄金の波を立てた。スクールでは晝食後三十分の後終つた。私等は一散にかけ出し明倫に行き運動會を見た。小さき子供等が紅葉の様な手を動かしながらダンスをして居た。先生の御心配は一方ではなかつたらう。午後三時頃運動會は終つた。私は家に歸り今日のあまりお天氣のよいのに氣をうばはれ又も遊びに出た。

こんきは海岸に行つた。干草には玉の様な露が未だ宿つて居た、私はこゝでしばらくローレライを歌ひ、ふみ彼方の岸を見ると四五人の子供が周圍を取まいて居る。私は何かと思つて行つて見ると今丁度一尾の魚がつれてそれを見て居た所だ。私は急に魚がつりたくなつたので其の子供にハジキをかり、餌もかりて、海につけた。少し立つて引上げて見たが何もかも、つて居ない。

又海水にしたした。こんきは何やら重くなつたと、見ればもであつた。子供はハジキをくれと言つた。私

はそれをすかせながら又も海に入れた。こんどは海の神に祈る様に私は一生懸命だった。いくら経つてもつれない、子供はバジキをくれと言ふし。魚は一尾もつれないし、私は持つて居たお菓子の子供にやりながら又も水中に投じた。こんどは四五分も経ぬ中に又重くあつた。又もではあるまいかとおそろしく引いたが、こんどこそは大きなほらがつれてゐた。私は嬉しく岸をあちらこちらと魚を持ち人々に見せた。

人の慾にはかぎりなく又もつりたくあつた。しかしこんどはゆるしてくれないから我家へバジキを取りに歸り、そしてつり出した。第一回はしくじつたが二回三回と上手になり、小さいのやら大きいのがつれしまひにはおたがひはりあひする様になつた。終にはあまり慾をして此の海の魚は皆つりたくなつた。私は此の勢をもつて四五尾つた。

日は西にかたむき弓張月はうすく、淡く指月にかすんだ。近くの工場の氣笛も鳴るので、楽しい釣をやめて家に歸つた。そして其實をおいしくいたゞいた。あゝ、何といふたのしい一日だつたらう。又もこんな日が得られようか。

秋の夜

本二菊 武田 トシ

つめたい風がほほや足を、かすめて行きます。青黒い空には白く一かたまりの雲が、勢よく東の方へ走つて行きます。舊十四日のお月様は、向ふの山の松の木の上へ、可愛いまんまるい顔をのぞけて、お庭の池の向ふの草かげや、つつじの木の下でチンチロ／＼と鳴く虫の音楽に、耳をすましてゐらつしやるやうです。晝は強い太陽の光をあびて、首をうゑだれたやうな草木も、夜は露の玉に身をかがざり、晝と變つておだやかな月の光を受けて生々としてゐます。私はあの美しい草、あのやさしい虫の聲にうつとりしてゐます。遠くの方から恐しい「ビヤウ／＼」「ワン／＼」と喧嘩か何かするやうな、犬の吠聲が聞えてきました。下の方からは子供の泣聲や、静かな歌聲も聞えてきました。私もどうやら「お月様の歌」でも、歌ひたくなりましたあゝ。何といふしつとりした夜なのでせう。

秋の夜

本二菊 山本 節子

青白くかすんだ空には、二三十ばかりの、星が出て居た。私は悄然として机にもたれてゐた。何處ともな

く、糸柳を垂す様な銀笛がなるを聞く。

私は夢から覺めた様に氣付くと共に、ふと、心に浮んだのは虫の音……まあ鈴虫の音がしない、松虫もこほろぎも、ほんごうにどうしたのだらう？、土の中かしら？、いつの夜だつたらうか、かうした虫が一緒に鳴いては居るが、我先きとも、我一人聲を高めようともしないで、平和に徐に鳴いて居るのが實に面白いあたりはしんとして物音一つもしない、唯時計の單調の音が、先の虫の音に和して、幽にひびいて來るのを耳にした等の記憶を呼起した。

千草の上には重すぎる程露が宿して居るのが、仄暗の中に透して光つて居る。さつと吹く風に、はら／＼と地に落ちたのは、梧桐の葉であつた。何となく哀にはかなさき、秋の無情さを直接に感じ、葉とそうして鈴虫松虫の事を思ひやつた。急に寒さを感じたので身を縮め、急いで障子を閉めた。

別れし友

本二菊 山本 直子

「嗚呼」と私は思はず泣きました。果なさに。私は淋しい。友がなつかしい。萩に着いた

時、私は泣きました。別れし友はもういませず。私は遠い／＼萩に來てゐたのでした。私を慰めて下さる方はなし。私に眞を語つて下さる方はなし。私は疊にふせて泣きました。聲を立て、泣きました。私は其の時病氣でした。だから天井と睨めつこをして唯幾時間かの沈黙を守り續けてゐました。そして狂はけに、友の事、親しきM様の事を思つてたへきれず熱湯の泪を落しました。もう私は萩の地を離れる事は出來ないでせう。此の乙女時代に於てなつかしき友……、いや戀しきM様に再び會ふ事は出來ないでせう等と思ひつゝ、泪に暮れてゐました。思ふぞん分……、泉のつきる迄泣きました。然しまだ友の事M様の事が諦められせん。私は悩みの日が続けてゐます。其の悩み、苦しみ。私は友に知らせM様と共に泣きたい。然し私はM様に知らせる事の出來ない弱い子なのです。

唯語らずに獨りで悩まなければならぬ。哀れな子です。そして唯一つの希望なく失望の淵に沈んで泣き狂ふばかりです。知りもしない縁もあにもない萩に來た。南の國の子……、弱い直子は悩めるハートをしつかとおさへて泣きくづれました。人知れず。幾日かを

私はある悩みのある一日思はず口走つた言葉。

「M様……M様では……永久に永久にね……」。私
はこんな事を口走りました。其の時自分がわからない
程熱に浮されてゐたのでした。私は唯此の言葉のみお
ぼわてゐました。ほんまに古い友がなつかしい。M様
が、あの可愛い・スタイル。美しい容姿に増して麗し
いみ心。私はM様に心を惹かれずにはをられませんで
した。又、優しいお聲で「山本さん」に呼ばれた時、私
のハートの冷やかな水の流れは急に熱湯を流されたが
如く。嵐に吹き消された心の灯はともつたが如く、温
和な笑を濡らして、「はい」のお返事せずには居られま
せんでした。

其の善良なる可愛い、M様にお別れして、悩むのも
無理からん事です。私はなやみ悩みました。遠き憧れ
の君の爲に……。然しかうして悩み、かうして門司
を戀しがつたのも二三箇月の間でした。萩の地に慣れ
るにつれて仲善しのお友達が出来。したしみあふ事が
出来ましたの。

病氣も段々なほつて、今迄の悩みも幾らか薄らいで
来ましたの。そしてハッピーな時は日一日と増して来

ました。私は自分の健康になり、快活になり得た事を
自分ながらごんなにうれしかつたかわかりませんでし
た。

然し別れし友のM様の事は永遠に忘れる事は出来な
いでせう。それにひかへて親しき友を得た喜びは、永
久に此の乙女のハートのおく底で薫るであります。

初春の山

本二菊 藤井ヲツギ

後の山に登る。春の雲は白々として、四方の山々は
霞がたなびいてゐるので、争はれない春とあつた。

海は波ひこつた、す静である。この中をはるか向の
方から、一艘の漁船が静々を歸つて来る。船はかもめ
鳥よりも小さく見ゆる。山の木々は冬枯の儘であるけ
れども、霞は低く土地をはひ、春の気分は四方に満々
てゐる。やがて花が咲き、色々の小鳥が鳴き出し、樂
しい楽しい時が来る。

鷹が一羽悠々として、山のすそで舞うてゐる。

秋 二 題

本二菊 金子 萩野

秋のある夜

く感じさせる、何物をも海にしくものはない、さう思
ひながら濱邊に座つた、そして強いノ執着を感じな
がら立ち上ると、傍でリン／＼の虫の音がする。
思はず吸いつけられた如く聞き入る。細い微かな聲、
聲の最後ともいふべき聲の外は、何物をも耳に入らな
い、聲はゆらいだ。又じつ／＼続いた、忽ち高い調子に
あつたかと思ふに、再び沈んで切に頼み入るやうに、
懇願するやうに、又何物かを、請ふように聞けた。す
ると又調子は變つて、すつかり締めたやうに、屈つし
てしまつたやうに、拒絶されたと思つたやうになつた

秋の夜窓より

本二菊 中原 静子

緑色の大波小波が、サワ／＼と涼しく寄せて来る。
遠くの草村ではリン／＼と鈴虫が鳴いて居る。丁度玉
をころばす様に。可愛い野菊の花が、露をふんで月の
光を受けて淋しさうに光つて居る。鎮守の森は物すご
い程底暗くしん／＼と茂つて居る。

其森を通してほのかに社の燈火が二ツ三ツ風にゆら
れて、チラ／＼と消えたかと思ふとぼつと明くなり、
明るくなつたかと思ふと、又消れたかと思ふ様に息を

虫の聲

綺麗びやかな海は、果なき愛を示すやうに、陸をな
めてゐる。實に綺麗だ!!、何者かを與へるやうに、強

今まで小さい曇君の如く輝いていた月は、少し西山

にかたむいた。何處かで虫の音がする。私は今堤の上
に仰むいている數千の星が我おとらじと輝いている。火
星には生きた人間のゐるといふこと、或は天の川は遊
星の集りであると言つた事なごを、ほんやり考えて見
入つてゐる、一種の壓迫を感じながら。電信柱と家々
と山ばかりが唯だ黒く見ゆる。その山麓には家々の燈
が遠く近くまたたいてゐる。それは恰度ベイトウベン
の月光の曲の夜の如く、白く淡くおほるか夢かの如く
ほんやり光る。四邊はただ静だ。ぼつと光る。ぼつと氣
が跳る。……松の木の間から澄み切つた月光がもれ
て来る。すく／＼やさしく……これと相對して岸
打つ小波の青く赤く、さすぐろい。又下弦の月を宿し
た松と、あばら屋の燈火の洩れ等を映している。水で
も明月ばかり映し多からうに?尊く正しくなにもかも
明らかに區別なく。私等はなんだ?……自然は大き
い。……

しるがら點つてゐる。私は着物の裾をかがけて、静かに鈴虫の音を便つて歩み寄ると、音ははたきやんで、そよ／＼吹いて来た風に木の葉の露が落ちた。私はもう其鈴虫をおどかさうまはしなかつた。そして次第にはだ寒むを感じたので、家にかへつて自分の室に入つて窓際に来た。すると私の家の庭でも鈴虫が鳴いて居た。それは多分近所の子供が昨日どこかの草村から取つて来てはなしてやつたのでせうか。サツキ聞いた様な勢の音でなく、カスレ／＼にやつと鳴いて居ると云様な聲を聞くに何だか堪まらぬくいたわしい様な気がした。取時羽でもいためたのでせうか。すると今度は私をもたれて居窓の向の杉垣の根の所で、キリギリス鳴出した。私はヂツと此の二つの虫の音を耳を澄まして聞比べて居ると、不意に窓の下でコホロギが鳴出した。これも皆淋しい様な悲しい様な聲でなく。耳をすますと哀れに細い虫の聲の外には只時々木々の梢や千草の露をはらふ風がソ／＼とおどするばかり机の上の時計の音までが、丁度それ等の淋しい音と和して居る様である。嗚呼何と云静かな夜でせう。

静かな夜

本二菊 森重 貞子

だんだん夜は更けて来て、廣い寄宿舎もしんじりて来た。勉強家のH様と二人ぎりにあつて、後の方は最早楽しい夢路をたぎつて居られるでせう。晝私のいたずらで花瓶にさした黄菊も、水がないのかしをれた様にあつて居る。否ねむつて居るのかも知れない。積上げた辞書架掛物もすべてがねむつて居る。外では晝間の雨がやまないで、淋しい淋しい音を立て、シトシトと降つて居る。どこかで蟲がキリギリス、弱々しい聲をして鳴く。ほんまに静だ。何とも云はれぬ程。暫く雨はやんだ。蟲もつかれたのか鳴かない。後にはH様の頁をめくられる音と、私のペンを走らせる音のみより外には何も聞けない。電燈はだるさうに、この静かを一室を照らして居る。たぶんつかしい母のいます故里もこのやうに静かだらう。どこかの室で時計が十一時をうつ。気が附いて側を見るに、もうH様は寝て居られた。蟲はいきをふきかへしたのか、前よりも元氣ある、しかしあはれな聲をして鳴いて居る。のきよりしづくがボタリボタリミ、おちて居るのが聞える、ほんまに静かな夜。

月待つ間

本二梅 井町 梅子

只一人中庭の芝生の上に坐つた。しつとりとひんやりした。

空は淡墨を流した様だ、星は數へる位しか出て居ない。お月様もまだ出て居ない、さつきから待つて居るのに、私は廊下の上つた、少しするに、ころ／＼と虫の聲が聞えて来た、淋しい様な悲しい様な聲をして、聞く者をして明るい所から暗い所へ引込む様を、哀愁を帯びた虫の聲、私は再び芝生へ下りた。

はたと虫の聲が止んだ。私は口惜しい様な恨めしい様な心にあつて、又廊下の上つた。

又鳴く、下りようかしら、否下りないでこゝでじつと聞いて居よう、下りるに又泣かぬいだらうから。

虫は相變らずころ／＼と鳴いて居る。

ほんまに淋しい様な悲しい様な聲だ。

おく露を重いミかこつのか、今にも消え入りさうにあはれな聲だ。

静寂を破つて自習の鐘が鳴つた、私は虫の聲に向愛着の念を抱きつ、すがつて居た柱からつと離れて空を

仰いだ。

星がすうと飛ぶ、お月様はまだ出て来ない。今夜はお月様は出ないのか知ら。

私の好きな蟲

本二梅 河野 松子

或夕暮に私は淋しい露のある路を歩いて居た時、不圖足許で蟲の音のするのを聞いた。りーんりーんといとも優しく鳴いて居る。まあ何と可愛い音だ事、思はず私は魂を投げ出して其處に立ちすくんだ。私は他の蟲のどれよりも、此の鈴蟲の音が一番好きだ。

けに秋は淋しい。そうして數知れない蟲が鳴く。中でも鈴蟲の音程淋しく、又心の底をそゝるものはない蟲の音の外は、物音一つしない、淋しい露のある路の夕暮に、一人立つ時は、流石に秋の涙ぐましさか身にしてみて来る。漸次邊がうす暗くると、尙更家が懐しくなる。

あ、は、その森のあけくれよ。さては亡き弟よと叫ばずには居られなかつた。あの愛らしの弟は、今宵の様な淋しい夜、唯一人草葉の蔭にねむつて居る事であらう。あの荒涼たる墓地に。嗚呼在りし日の可愛い

係。今日までも忘れる日までは一日もなかつた。數多き妹や弟ではあるけれども、亡き弟が何よりも私には氣にいつて居る。今好きな虫の音を聞いて、永久に歸り來ぬねむりに付いた弟が、靜かに私に聲をかけて居るかと思つた。そしてそつと涙ぐんだ。

耳をすませば、まださつきの蟲は鳴いて居る。でもかすかに力なく鳴いて居る。私は一步一步蟲の音に、遠ざかつて行つた。そしてしつとりと、露の宿つた草路をふみ分けて、家に向つて歩を早めた。みあぐる空に、下弦の月が淡くかすんで居た。

なやむ少女

本二梅 坂 恭 子

「文子様どうなさつたの？」と彼女の肩に手をかけたのは、いつもやさしい言葉をかけてあぐさめる菊子でした。「わね！なんでも無いのよ、私の氣質なのよ」、と文子は如何にも悲しげにそつと涙をふいていひました。文子は此の學校に入學した時から淋しさうな風をしてゐたが、近頃は細々とやせていつも涙ぐんでゐるので、學友の皆は不思議に思つてゐた。けれど彼女のかはいいよくほころるしの様に眞黒にうるんだ瞳と

は、全校の生徒を引つけてゐました。

けれど多くの友達も皆表面ばかりの交りをするだけで、眞の友は唯此の菊子だけでした。しかしこの菊子にさへ、自分の苦しい胸を打あけないで、一人でなやみ苦しむ、泣き悲しんでゐました。

彼の女は伯母の家にもゐました。今日も學校から歸つて、一つ年下の照子にいじめられつつ、だまつてお臺所に立ちいで、夕食の仕度をしながら、白いエプロンの端で、涙をぬぐひ、伯母の言ひつけを聞いて働いてゐました。伯母は彼の女のさまに氣がついたのか、いやあしかめ顔をして、だまつてゐました。文子はそれを見て「悪い事をした」と心にさげびました。伯母は彼女が淋しさうにしてゐるのを見るに、いつも眉をひそめました。そして氣にいらぬ事や、そそろをすれば恐ろしい顔をして叱ります。けれど從妹の照子はどんな事をしてもしりません。伯父も伯母も目の中に入れてもいたくない程可愛がり、文子に照子の髪を結はせ、靴をみかかせます。文子は其の度にお父様さへ御病氣でなかつたらと、心の中でみんなに泣いたか知れません。今も御飯のたきやうが悪いと言つてひきく叱ら

れ、堪へきれなくなり、前の川端に駈出して、父母こひしと、遠い故郷の空を眺めて、なぜ自分一人こんな家にをらなければならぬのだらうと、木にたふれるやうにすがつたが、淋しいく、涙はひびりてに彼女の頬をつたひました。ただ月のあいた空には星がきらめいてゐました。文子は流れる涙をふかうともせず、み空の星をながめて「ああ！」、星でさへあんなにたくさん集つて毎夜きらめいてゐるのに、私はなぜこんな淋しい思をしなければならぬのだらう、どんな田舎で學校がなくても、父母の許でお父様のお介抱をする方がどんなにいいかしかない、といつてまたしても袂に顔をうつめて泣入りしましたが、川の流の音にふと我に歸り、こんな所にゐる伯母様の御機嫌を悪くする」とつぶやきながら、元來た道にすごとく、と歸りました。家の中はいやしんとして食器の音ばかり聞えます。文子はおそろしく靜に臺所に行きました。皆もう食卓について食事をしてゐます。彼女がうなだれて食卓につくと皆視線を文子にあびせかけました。文子は「おそくなつて失禮致しました」とかすかにいひました。けれどだれも答へる者はありません。伯母はおそろし

い目をして文子を見つめました。文子はうつむきがちにやつと食事をすまして、皆のすむのを待つて、やせ細つたかよい手で後をかたづけました。

秋の夜

本二梅 坂 恭 子

スヤ／＼ともれて來る寢息と、カチ／＼と時をきざみ行くセコンドの外には何の物音も聞えない。誠に靜かだ。一人かうして机にすがつて過ぎし日の事を思へば、いひしれぬ悲しさ淋しさにしじむ涙を止める事が出来ない。秋其のままの底冷のする風が、雨戸の細いすきまからはいつて來る。外では奇麗な／＼な虫の音のみがしてゐる。私はじつと虫の音に聞き入ると、なんとも言へない淋しさが、ひし／＼とせまつて來て、なつかしい父母の傍が目に表れて來る。

時計は午前一時を打つた。今頃お父様はどうして入られるだらうか？、お母様は私の事を心配して、ため息をもらしていらつしやりはしあいかしら？、お姉様はまたきつと机にすがつて、本を讀でをられるだらう。弟は一日の遊につかれて、楽しい夢路をたぎつてゐるだらう。

ああ！あれほど待たわびてゐた夏休も、いつか過ぎて元此の淋しさに歸つた私は、あの丘の上の家が戀しい。夜はますます静になつて虫の音は、絶えなくあつて来た。

秋の日のある夕 本二梅 原貞子

侘しい秋雨の夕は、なやましげにうつ向いた、美しいコスモスの花にも、優しく咲いた野菊の花にも、しめやかにしめやかに、音づりました。

しみりり、美しい詩に、まだ見ぬ君に、あこがれて居た私は、そつと詩集をふせました。うすほんやりとした中に、秋にちなんだ、ふさはしい、表紙が、夢の様に浮びます。

つと立ちて窓を開けました。ジー細い蟲の音がすゝりなく様に、どこからともなく、聞えて来ました。「あ、秋なのだ、秋なのだ、最も理想とする秋なのだ」今更らしく口の中で、つぶやきました。それと共に、今迄詩に更つて居た私の頭の中に、浮んで来たのは、故里の有様でした。今頃はあのうちの裏の柿の木も、栗の木にも、さつさり實をむすんで、弟達や妹達は、

私の幼かつた頃の様に、それにぶさぶさりついで、さわいで居るだらうに、こ。

次から次へ、走馬燈の様に、慈母います山里の事が、浮んで参りました。物學びするために笈を負ふてはるばる来た身、力んでも、つとめてもやはり、思は故里の、山河に走るのでした。

ふと蟲の音が、やみました。

「まあなんて、なんて、静かな夕でせう」。御部屋には赤い燈が、ポツチリ、點つて、舍の中もひっそりとして居ます。私はひとり、秋雨けぶり行く中を、見つめました。夜の訪れるまで。

手向草

本二梅 山本照

亡き父を題して、私は過去三年間に、幾度筆を取つた事でせう。しかし文として私の手に残つてゐるのは紙の一片だにありません。い、紙は有りません。けれど共紙には亡き父と書いたのみで、一字も記してゐないのです。そして紙上には文字の代りに、幾條かのにじむ涙の跡があるばかりです。

筆を手にすると、思出しておだまきは胸に澤山現れて

それをたぐつてよいのやら……。又その一つをたぐつて見ても筆に現せません。只涙が湧くばかりです。手は如何にあせつても、心は只泣きます。その度にどこかで父の聲がお前は思ひ起して泣けばよい、筆に現せるものでないと申します。

その幻が消れて我に返り、今の幻の影なりとも筆に現さうとしても或物が許しません。さうしてゐるのでせう。

我胸を三十一文字に納むれば

書く手も慄う暗き夕べに

春雨に若葉の表濡る、まで

父思ふ目に涙あふる、

父逝きて三年をこ、に送れ共

尙あり、こしのぶ其日よ

なつかしの父の思出ひもぎけば

つい涙して一夜送りぬ

亡き父をしのぶ窓邊の時鳥

消え行く空をなつかしみ見ぬ

このみまし、青葉の頃は來ぬれ共

御膝にすがるきみは在らず

枕邊に立ちたる父の幻は

あけたる聲に消され行きけり

うそく火も消れし頃佛壇を

父やこもるゝ我のぞきみぬ

うれしさに父のまさばと亡き人を

しのぶ我身の暗きかけかな

父上のかへります日を母人に

問ふ子はあはれ幸うすき身よ(弟)

師の君は父母につけよとのたまへ

我は語らむ人をかきけり

小鳥の死

本三菊 岡田 カツ

「嗚呼姉ちゃん綺麗な小鳥が！」妹が突然叫んだ。私は驚いて上を見た。成程夫れは綺麗な小さな鳥であつた。胸のあたりが緑色で、背が灰色の可愛らしい小鳥であつた。何處から迷ひ込んで来たものか、天井の明り窓の硝子のあたりをあちこちと飛びながら、出口を頻りに捜してゐるらしい。早速弟のてんつきを出してやつと捕へた。蔵から木の箱を出して直ぐに竹をさしたり、木をはつたりしてやつとこのこで鳥籠を作つた

そうして其の中へ放つた。
皆んな此の小鳥を可愛がつてやらうと言つた、そうして冬は暖めてやる等さまさまに彼の小鳥を愛してゐた。但し小鳥は心配らしく上へ下へ頻りに飛び廻つては竹の格子をガリガリはせてゐた。少したつて行つて見ると今少し静まつてゐたのが又飛びまはつてはガリガリあらしてゐた。彼は私等人間のなすこゝを恐れ又心配してゐたのであらう。

嗚呼其の不安が彼にまでやつて來ることが、いね唯今日やつて來ることがわかつてゐたら、私はあんなみじめなこゝはしなかつたものを。

其の夜私は其の鳥籠を縁に出したまゝ、寢てしまつた翌朝早速彼を見舞つた可愛い姿を見たまに争つて行つた。あゝ、其時に彼の小さな体は冷たく、かたくなつてゐた。何物かにかみ殺されたらしい、私はどうして彼女を室内に入れてやらなかつたのであらう。残酷な死の影は彼の小さな弱き者にまでも付きまといつてゐるものであつたか。

可愛さうな小鳥のなきがらは小さな土山の中に埋め

られた。目白が一羽松の木へ飛んで來た。赤い太陽が輝いてゐる。

何時だらう

本三菊 大山アサ子

ふと目が覺めた。雨戸を操つて外に出た。うすら寒い風が、はだにしみ込む。何日の月だらう、大分西の方にかたむいては居るが、白い光に眞晝の様に明るいまばらに見ゆる星は、青い光を微かに投げて居る。時々病葉が地上に落ちる。カサツ、と、いふ音がするかと思ふに、サツ／＼と地上を走る音ばかり。蟲の聲一つしもない。あゝ、何と静かな夜だらう。庭の土には、黒い木蔭が墨繪の様に滲んで居る。思ひ出した様に、時々吹いて來る微風に、ゆれて居る。秋は老けて行く。ふと淋しく、そんな事が思ひ出された。と、何處かで夜を渡り行く鳥の聲が、寒く、きつく、夜の静寂を破つて、胸を貫く様に聞えた。たゞ一聲のみ。後は又元の静かな沈黙の夜であつた。何にも聞えない。自分の吐く息の音が、静かな空氣の中へ流れて行く。仰ぎ見れば、指月の山は、薄黒く眠り、青白い月光はさん／＼と降り注いで居る。「ボーン」静かに静かに、

眠つて居る晩秋の夜の空氣を破つて、寺の鐘がひびいた。もう曉のだらうか？あゝ……今は何時だらう。

小霧降る夕

本三菊 齋藤 春子

自分達の下駄を浮ばせて面白そうに遊んで居た小川の子供等も、いつの間にか一人も居なくなつて、喧しい位に蛙が鳴く。嫌だゝは思ひながらもやつぱり私に其聲に聞きほれて居るのだつた……私は今お門の扉に持たれて暮れ行くあたりの景色に見入つて居る……定規をあてた様に奇麗に生へて居る苗代も知らぬ間に一寸位に伸びきつて、たつた今迄縁に見わたる其の苗代は早薄暗くなつて居る。

幾日も續いて降つた雨も漸く止んで、今日は久し振に晴れた夕の景色を見る事が出来ると思つたのも一寸定まらない空は又つまらなそうに煙霧を降らせ出した心持昂奮した素肌を心持よくひんやりと夜の小霧はあつたつて、雲の様に次第に濃くなつて行く。

氣の附いた時は最早夜の帷は全く下りて私の身邊に來て居た。あゝ、小霧降る夕！なんてい、響のする神祕な時だらう。二葉だらう。

……月は霞む春の夜に……

誰かが向ふの道をつくり奇麗に歌つて通る。なんて今宵にふさわしい歌詞だらう！私は夢の國へ行つた様な好い氣持になつた。私は又目の前の苗代を見た。

前よりか直線濃くつきり薄闇の中に浮んで、やつぱりさつき蛙は騒々しく鳴き續けて居る。小霧は夜の世界へ直もひし／＼と降りしきる。町の灯は遠くのほんほりの様にぎんよりうるんで瞬いて居る。星は見えない。月も見えない。私はいつ迄もこうして暮れ行く町の姿に見入つて居たかつた。私は他の何事も何も忘れてしまつて居た。あゝ、私は嘘へ此儘化石しても神祕な小霧降る中に何時迄も／＼町の灯に――暮れ行くあたりの景色に見入つて居たかつた。

松葉杖の少女

本三菊 飛田 久子

雨上りの午後、一人じつと菊の花壇に立つて、其の薫の高いのにほつと酔うて居た。じつ／＼と温つた路を踏しめる音に、ふと向ふを見やつた。紅葉した木の根方を九ツばかりの色白の少女がコック／＼と松葉杖をついて來るでは有りませんか……

私は餘りの事にしばらくほんやりして居た。他の二人は友達であらう。一緒に此方をさしてやつて来ると思ふ間もなく見なくなつた。私は思はずぎん／＼下に降りて一株の薔薇の小蔭に身をよせて見て居た。大きい花をたがねに置いた衾を丁度よい加減に着て居て短くも長くも無い。白地に燃ゆる様な赤で麻の葉が織出されたメリンスの帯を、そつと蝶形しめて居る。帯にすれ／＼か、兩位の髪を桃色の紐できりつと結んでゐる。髪は餘り黒いといふ方でも無い。でも髪によくあの紐は似合つて居る。やさしい感じを與へる。他の友よりも少し落ち附きが見えて居た。一足二足遅れ勝に急ぐ様である。小さな友も此の哀れなしほらしい少女を、氣の毒に思つてか待ちかげんにゆつくり歩く私はこれをじつと見てゐた。あのいたいけな姿をあの杖にすがらして、ほんどうに、さうか出来無いものだらうか……、氣がいら／＼する。あの無邪氣な少女はさうして松葉杖で歩まなければならぬ様になつたのだらう……、運命さいつてしまへばあまりにむごい運命である。罪も無い彼の女にさうして、あんな運命を與へたのでせうか……、私はなほも薔薇の蔭から息を

こらして彼の女の瞳に注意するのであつた。黒耀石の様な瞳。美しいけれども冷たい感じをおほえる。然し疑ひも知らず、濁も知らず何一つ憂らしい所も見出さなかつた。あくまでも唯々愛くるしかつた。それは何を語るのか……？。彼の女は足の不自由を感じたいのでせうか……？。苦痛の影さへ無いその瞳。いつたい何を考へて居るんでせう。あの瞳で、又何を見つめて居るんだらうか……？。私の居るのさへ氣附かぬらしい。そばをコツ／＼と廣場へ／＼と花壇を横切つた其の時のくりなくも、紅葉の木葉が、ほ／＼とこぼれた。冷たいあの路へ、彼の女の通つた路へ！、落葉と彼の女の或もものが、ひし／＼私の胸の奥底に、ぞつと込み込んだ。木葉は地上に散つて行く事を幸とも不幸とも考へないのだ。唯さそふ風に連れて散つて行くのだ。

彼の女も木葉と同じ考へるのではあるまいか……？。自分の悲しみも知らずに唯目前の喜びそのものに、氣も心もつり込まれて居るのだ。さうして他に餘裕が無いのだ。然し。何日かは、自分の運命を悲しむ時が来やしないであらうか……？。私はそれを考へた時に、「永

久に悲しみの勿れかし。」と、獨ごちせずには居られなかつた。柿の赤葉が又一枚ヒラ／＼風に漂うて私の足本に落ちた、ひよこり自分に氣が附いた。薔薇の葉をめちや／＼にふみにじつて居た。松葉杖の少女は……？と見れば、向ふの廣場へ行つて居た。廣場に二本の柱が中に横たはつて居る。それに少女達は取りついて遊ぼうとして居る。彼の女は靜かに杖を松の太いみきに立てすける。彼の女もその中に入つて遊ぶ。太い松に小さな／＼松葉杖、ほん／＼に涙ぐましい程可憐である自由のきかぬ足を右に左にまはして、他の友と同じ様にキキさしやいでゐる。何日迄も何日迄もあの様にあつてほしい。もうあれ以上は苦しめないでせう。彼の女よ！、永久に悲しみを知らず。あたたかくはぐくまれてくれ。さ何物にかに私は祈つた。つるべ落しの秋の空ももう淋しく物靜かに暮れてゐた。

或 夜

本三菊 平田 之子

風呂場から出た。つめたい風が袴元からしみこむ。けれども私は、すぐ家の中に入れなかつた。さつき祖母様にいはれた事が氣になつて……。

思へば思ふ程くやくやくと我知らず涙が頬を傳つた。遠い遠い南の國にお母様はいられるのだ。こんな時に母様があられたら……。お母様の許に行きたい、そしてお母様と暮りたい……。

戸袋にすがつていつまでもいつまでも泣いた。

× × ×

八月の或日の眞晝、庭の木葉さへもゆるがぬ、焼けつく様な時、母様は旅立された。「病氣をせぬ様に勉強なさいよ。」一言のこして車上の人となられた。悲しいども、嬉しいども解らなかつた私は、何ともいふ事が出来なかつた。自動車はかき切つた地上を土煙をあけて走りだした。私は白字の番號が消ぬるまでじつと見つめてゐた。やがて角をまがつた。もう何も見ねない、さうさう一人残されたのだと思ふと何だか解らぬい、急にかゝしくなつた。その日の夕方田舎の伯父の家を目あてに、淋しい心を抱きながら、橙畑の間の白い路をさほどほ歩いたのだつた。其の夜は母の事を思ひだし眠られずに、天井ばかりにらんでほゆるむ氣を取りなほしてゐた。或時は由ちやんを脊負うて堤に立つて自動車のわだちの跡を見つけては母います里に、

飛んで行きたかつた。
日の暮れるまでほんやりしてゐては祖母様が迎へに
來られた頃もあつたのだ。

ふどうるんだ鹽を大空にうつした時、月は皎々と輝
いてゐた。柱華山の中腹に夜霧がたむろしてゐる。山
麓の小部落の夜はだんだんと更けて行く。

さこやらで藁打つ音がきこえる。

—(二二、一〇、二五)—作

夕景

本三菊 村上フサコ

雨やまず。カナ／＼。一聲の蝸の聲、雨の中よ
りひゞけば、夏の夕の淋しさ漸くにゆたかあり。三面
青山に包まれ、山いづくまでも續く。西方開けて蒼々
たる海、灰色にかすみて、島かきはるかに模糊たり。
前栽の樹々ゆらぐ度にはら／＼と露こほれて趣あり雨
や、小降とちり終にやみぬ。目の青葉暮色にうるは
し。

小川の濁水瀬まくら打ちて流れ、兩側の若々しき稻
涼風にさわぐ。

夕來りぬ。空明く白雲夕陽に照りて紅に染るあり、
銀をあざむくあり、再び鳴く蝸の聲。山より明けて、
山より暮る。

路

本三梅 阿武 將子

私は路である。今は四間道路で幅を利かしてゐるが
本を正せばやつぱり一人やつと通れる小さな野道だ
つた。私の上を人や馬のまだねて、四方がしんと静ま
り返つた時、過去を思つてつく／＼懐しくある。

お、昔！、今の様に人馬の往來は激しくないけれど
私は樂しかつた。

やつと遠くまで續いた一本道、兩側には唯一の友の
八千草が咲き亂れ、四時私を慰めてくれた。

春は遠く霞む連山の櫻花を眺め、夏は晴れた大空の
下に、青々とした稲や、ついでに飛び交ふ燕と話し、
秋は豊年を喜ぶ農夫の重い穂を脊負ひながら、ほくほ
くもので家路に急ぐのを見た。冬の寒さ、冷たい雪が
ひら／＼舞ひ落ちては私の上に重なり、遂にはあたり
の野も山も、眞白く衣更へした。私の上を通る人々は
美しい道だと褒めて行く。

四方の景色がのんびりしてゐる如く、このあたりの
人々も、眞に純朴なものであつた。何一つ争ひもなく
お互に助けあひ勵ましあつて、村の向上につとめ、他
の悲い空氣には一寸もふれなかつた。

毎朝日課の如く、秣刈る賤の男の子が、健康溢る、
体で、口笛をリユー／＼響かせながら通り、腰の曲つ
たお爺さんが杖に縋りながら、稻田を見廻る顔にも、
この世に生きる幸福さに輝いてゐた。可愛い、少女が
花を摘んで嬉々として戯れ遊ぶ、村に會合があるこ
言へば皆は私の上を通つて集つたものである。

幾年か過ぎてこんな大きな路と更へられた。それと
共にこの美しい村へ悪い空氣が侵入して時々事件が起
る。活氣ある村の山々も、何だかだらしの無い様に見
え、人々の純朴さも失はれ、互に利己的になり、昔と
正反對の趣がある。

交通の便利になつたのはよいけれど、私の爲に村の
よい氣風を汚されるのが悲しい。一方によい事がある
と思へば、他方には悪いことがあるのは、のがれざれ
ぬ現象ではあるが。

あ、！今日も私の上へ夜のほりが下される。

暗に泣く頃

本三梅 大田 温子

私は小さい／＼ハートの持主です、たつた一つの小
さい胸に物思はしい憧の秋が追ひつ、訪れて参りまし
た。あ、何んて詩的を秋でせう。

私は小さい／＼チョッピリとして胸の扉を出来る
だけ大きくたく開きました。そしてあの美しい秋を私
の胸の中に美しく寂しく大切に鍵をして閉ぢ様としま
した。私は從來秋といふものには程憧憬れる様な人間
ではありませんでしたが、此の頃常に私のハートに揺
ぐ佗しける灰色の帳のそれ故に自ら秋の静けさに最大
の慰めを求める様になつたのでせう。嗚呼、哀れな此
の頃の私の胸には暗い暗い寂しい奇しき何かが顔いて
居るその私可愛想に……私は常に同情を寄せて下さ
るべき人を求めつ、絶間無き探索に勞れ憐れさへして
居ます。嗚呼寂しいハートは、夜更くる儘にいたく濃
く色彩られます、此の寂しさの儘に世を終るとしたか
らは丁度あの小さい木の葉が果敢なくも散りて逝くシ
ーズン木枯の晩秋——それにも似てゐると思ひます。
實に荒行く風は物凄しい、私か荒び行けば私のみでなく
人の頬まで將又心迄、冷たき物にしてしまふ、あらず

の様に私が冷や、かにならねばならぬでせうか、思へば……總べての物の柔らかに微笑みし幼き時が、赤い花暖かい心、美しい微笑、温やかな世の風、失はれし者の眠れる心その墓、懐しき寄りそへばいやさうに秋の風は寂しう御座います、何故でせう。あのポツチリと切れたその、がそんちんに深くなり行くとは……私「瀬を早み岩にせかる、瀧川のわれても末にあはんぞ思ふ」、云ふその一句が私にさうゆう深い印象を刻みますでせうか、毎日々々是を口吟んでは泣きくづれます、くずれる體を起しては、あの後にせ、らぐ阿武川の岸邊に骸を運びます、失はれし彼の人のせめて影を伺はんち、水に寫れる姿を眺めつ、唐紅の唇のあせる迄探求に務めます。併し水面には寫りません底の彼方で聊の泡沫となつて洩れるのみ、あら水面にも秋が來てるを、嗚呼私は秋に對して泣きます、いたく悲しみ憂ひます。窓に誘ふあの紅葉の如き遂に散るべき露の命の主なる私、さうして泣かずにおられませう。あ、神様よ私を秋の寂しき散り葉の上を一足二足歩ませて下さるのは厭ひません、併し此の若き蕾の一つを、春にも逢はで直ちに秋に滅び果てよとは、今

少し蕾に楽しき青春の、尙も高なる紅血の胸にたくたく漲りし時が見たう御座居ます私のみゐらで若き乙女子の總ての願ではないでせうか。果敢く散り逝く秋は、私を四方から圍んでます。私はこの儘で永久に滅びるでせうか、それども蕾の綻ぶ春が訪れるでせうか、若し此の儘だつたらさうでせう、私は泣きます、泣きます、さうして……泣かない様に見ても胸に秘めし悲しみの數々は永久に葬られませうか、屹度息を傳つてあの輝きの地上戀しさに、ホロ／＼と溢ふれるでせう、ああ、寂しい、冷たい濕つほい、荒びしこのハート、思へば小學校時代のあの時又しても懐しい、何故でせう、何故でせう、お、寂しい事よ、暗に包まれし私は……總てに皆愛を寄せます、お、可愛さう、暗に啼くこの私は、さうぞ皆様よ早く輝きの國へ、永久に啼くなるこの私、笑みの國は何處でせう、行手に幸あれよかし、あ、皆様よ笑の天地にこの私を運んで下さいませ。

時雨の夕

本三梅 川上フキコ

しめやかにおとづる、秋雨は、すべての物に、かすか

ななさやきをもらしては、次から次へと、あてぎもあくふりそ、いでゐる。

銀絲の様なこまやかな雨足の、ほのかに匂ふ、コスモスの花びらに、かすかか戦慄を傳へながら、ふりそそぐ時、なつかしき日の思ひ出が、私のこの小さい胸に、まほろしの様に、よめがへつて來る。

灰色に曇つた大空の、一秒々々暗黒な天地に化して行く様。

涙ぐんだ様な町の灯の、車のわだちに、ほつちりこ淡くにじんだ様。

すべて人生の寂しさを、象徴してゐる様に、私には思はれて、たまらなくある。

深い暗黒と、沈黙のシーンに包まれんとする、大天地の静けさ。

はてしなく續く廣野の、静けさにも似て……。

低い空からこやみなく、降り續いてゐた雨の足も、夕闇と共にうすれて、唯けぶる様な名残の色の、こまやかさ。

静かな平和な一日も暮て行く、星影も見なぬ、黒天霧絨の様な空の彼方に。

闇を縫うて聞ゆる鐘の音に、哀れさ一入まさつて、雨に亂れし垣根のコスモスの、ほの白き花瓣のみなは夢見る如く淡くふるふ。

日曜の朝

本三梅 神代 照子

日曜だと思つて朝九時頃に起きた。彼女は實際不快だつた。あ、やつぱり常の様に、朝早く起きた方が氣持がいい。と思ひながら寢床を片付け、南の庭に面した障子を明けた。秋の暖い光線はサツと室内深くまで流れ込んで來た。

ア、今日は日曜だ……彼女は必然的にかう思つた、今日は何を仕様かしら、毎日毎日日曜を日曜と待つて居た、日曜は來たけれど……やはり學校に行つた方が楽しい。彼女はかう思ひながら、臺所の方へ出てみた。其處には、彼女ののみが食卓にあるのみで、後はキッチン、片附けてある。彼女は食事をするする、やつぱり早く起きた方が面白かつたに……と考へた。

食事を済まして後、彼女は自分の書齋にされてゐる八疊の間に來た。南向の硝子障子は開かれて、綺麗に室内は掃除がしてあつた。机の上には、昨夜其の儘に

して置いた地理書も、しほれか、つたコスモスを、生けた花瓶が、あつた。

左側にある床には、ダリヤが美しく盛られ、秋の暖い日光がダリヤの、花瓣の一つ一つを、まるで天鵝絨の様に輝かして居る。本箱の上にある置時計は、相變らずコチコチと進んで行く。まるで朝寝坊のみを一人残して置く様に、皆新らしき生へ、あたらしき生へ、進んで行く様に……

ア、自分だけが取残されるのだ……かう考へた彼女は急に地理書を、二三頁バラバラとめくつた。

秋によする

本三梅 齋藤 貞子

聖光の夜の庭のひと夜、それはどんなに美しくい夢を私達に與へるだらうか？、哀愁の虫の歌、さんく、さか、やく月光を浴びてほろほろと散る真紅の萩、若き心を抱くもの、乙女てふ誇りを胸に秘むるもの、こ

うした自然に生くる生命をうたはずにうられようか。あ、！、秋よ！、私はお前をつ、ましい沈黙の神にたごへたい。神經質な、魔法使の、怒りにまかせて荒れ狂ふ様な冬よりも、すべての生物をやき盡さうとす

る夏よりも、何となくぞよめいて、さわがしい春よりも——靜かで愁はしい、そして詩的な——秋淋しいけれど、なつかしい祈りたいやうな秋を私は一そう好ましいと思ふ。

月におくられた美しいひと夜……、草叢に露はうるほひ、草葉のかげにころがる虫のソプラノ、窓にさし入る月の聖光、あ、……、恵まれたうつくしい夜を私はさうして神にむくいよう。

私は靜かに、ペンを置き、おくられた聖光に黙禱する。

海！南洋のうみ

本三梅 椿 シズ子

秋の夜の月さやかに輝きて、虫の音の老い行く時、生きむとしてひたに撞る、身には、そらにもかくあはれにふるふ様だ。この時身を海上におく人の心は！今も南洋を或は地中海を航する人の幾人あらう。きつい海風の吹きすさむ時、すこくく彼等の身は甲板の上に戦慄する。お、其の時！、洋々たる大海原は何處までも響き、一點の影さへ見えない其の時、月が月が……その青黒い空に浮いて、これが全くの邪氣の

行くのである。

田舎の夕

本三梅 村上喜代子

お、……ほんどに淋しい夕べだこゝ、と獨りつぶやいた。

初めて田舎の夕べを眺めた私は、田の側に立つてうつろいとあたりの景色を眺めてゐた、田舎の景色つてこんな淋しい處だらうか、昨夜まであんを騒しい町にゐて、ふいにこんな靜かな、そして淋しい山ばかりの間に來ると、靜かると言ふよりはむしろ私の様な臆病者は怖しいと言ひたい位だつた。

山の彼方も次第くく夕もやもて包まれ、あたりの山の木々も、山間の家々もやうやく幻の如く見ゆる様になつた。その頃山のかなたより鳴きいづる二三羽の鳥はこなたへと自分の宿をさして歸つて行く、白い手拭を頬がぶりし、脊には柴を脊負ふ若い女達は一日の仕事を終へて、さつさと山の方から田徑の方へ、いそぐと歸る、いつか小學校で習つた、田舎の四季、さ云ふ課で女たちが手に鍬を持ちて一日の仕事を終へていそぐと、我家へ、かへる道々後みかへれば、と

世を離れた美しい樂園とも言へよう。其の時詩は自ら出でて無限に……其の感情は其の人達を惱ますであらう。夜耽けて人皆の寝し時、凄き甲板の上に立つて、寄せ來る波のしぶきを聞く時、恰も海底に引づられる如く凡ての慾望も捨て、所謂無我の状態になるその時、人間其の者の美點を發揚するのであらう。

夜ほのくくと明けて遙かあまたの海面を何處から來たとも知れない白鳥の飛び行く様に、何となく人あつかしく感じ、輝き希望との内にその日は過ぎ、太陽の水平線上に没する時、彼等は胸に一種の勃動を覺え、故郷をなつかしむ情がひたぶるにこみ上げて來るであらう。そして不安が又も其の人達の胸に投込まれるであらう。

要するに海は彼等最大の慰安者であり、又最大の空想を呼び起すものであらねばならぬ。こうした變遷の内に彼等の心は様々に支配されて生きて行き、長い航海をつゞけるのだ。

尊ぶべき彼等の生活！……海上生活に憧れて居る私にはさうしてもこの味を只無意味に捨てる事が出來ぬ。あやしい憧憬に執へられ、はてしない幻に迷ひ

云ふ句が思ひ出された。
ほんとうにこんな景色は私共の地から到底見ることは出来ぬ。田舎であればこそ都會では得難い景色である。

母様の様な、ここに都そだちで山の中にはゐられた事のない者をこんな處に連れてきたら、さぞおそろかされる事だらうと獨り景色を感じしてゐた。折しも晴い鏡の如き満月は周りの暗さに一層明るく下界を照しそめた。あゝ……！ほんとうに、お月夜だこと。

「叫んだ。さぞ此の月は我が故郷の地もてらしてゐることであらう。母様も姉様も、あんな明い月もんだもの、鏡の様に映りさうなものだ、もしあの月を鏡としたら、母様も姉様も映るのだらうものを、我が故郷の地も、と思ふとつい故里があつくつて涙が浮んでしまつた。いつの間にかそんな意氣地のない心が出てしまつた。

時の移るのも忘れて、そんな思に耽つてゐると側から田舎の婆さんが、こんろ淋しい田舎でさぞお淋しい事だせう。言葉をかけて、夢からさめた如くほつと氣附けば、さつきの月は相變らず我を照らしてゐる。

た。あたりを見廻すれば誰もゐなく、たゞ我と我が影のみで人の聲さへなく一層静けさは増して來た。

畏しき者 本三梅 山本 房江

それは形容する事の出来ない私の空想中に描かれた幻影で御座います。それは男でもなく、女でも御座いません。全能全智の神様では、あほさら御座いません。不可思議な謎を暗示して居る運命と云ふ名前の持主で御座います。此の人間社會が展開してゆく限り、はてしもなくともなつて行く運命といふもので御座います。そんなに人間が強いといつても、あの鋭利な刀でも、運命と云ふ偉大な力の持主に勝つものは、恐くないと存じます。私共が憧憬れてゐた、あの帝都を一朝にして灰燼に化せしめ、幾萬の同胞を悲哀のどんぞこに沈め、幾萬の同胞を恐怖におそはして知らぬ顔してゐるでは御座いませんか。お、おそろしい、なんと云ふ惨めな事で御座いませう。

又虚榮の權化の様に華奢な支度に身を装ひ、高樓で誇りやかにすまきつてゐたものが、一陣の突風にふきまくられて、赤裸々な姿になるなき如何に運命のい

たづらごは申しながら、苦笑すべき悲劇では御座いませんか。私共もあの恐しい運命にしか抱かれて居て離れる事は出来ません、そうして私共の行く路の影になつてゐるので御座います。悲しみも苦しみも皆あの運命から織出されて、離れようとしても、離れる事は出来ないであります。

乙女のあはれ空想も、願ひも、望みもすけあつく奪はれて、涙もつ悲しい乙女になつた私が、淋しい心を抱いて、永久にくちない乙女の誇を讚美する後にも、そんな運命の魔の手が擴つてゐるか、それは私共の目で見る事は不可能で御座います。運命、恐らく私共の肉体が地上にある限り、否、土に化しようとも懐い運命の焰は依然として毒草を咲かしてゐる事で御座いませう。

或る夕べ 本四 伊藤壽美子

入日の雲に映わた其の光は、暮れゆく町のすべてのものに麗しい光を與へた。まばゆいこの光を背にあびて、獨り散歩に出かけた。」
山麓の静る丘に佇んでじつと町中を見渡した時、家

からはき出される夕の烟は淡黒色の空に消ね行き、薄いとぼりて覆はれた山脈は朦朧とした姿で町をとりまいてゐる。町の燈火も弱い光を放つてゐた。車輪のガタ／＼とびび／＼とさわがしい町の夕べに比して、静かでのんびりした山下の夕べ。……あゝ、何ともいへない。唯深い／＼山谷につれ込まれる様だつた。稲田の秋風はきいろい小波を作つてゐる。夕べの静けさは刻々と深み、静かさいふよりも、むしろ淋しいといひたくなるまでにあつた。

其の内に足元の叢から愛らしい虫の音が聞え出した。私は杉の木にもたれて、無意識に自然を見ながら虫の音に心をうばはれてゐた。もの思ひのする夕べとは今の様な時をいふのだらう。少し心がしづまるこ、もうすぐさま思ひに沈むやうにあつた。近頃の私はもうこれをとめる力も弱くなつて、涙ぐむ方がかりが優つてゐる。その爲めか、此の夕べも何だか悲しくなつて來た。今鳴いてゐるあの虫も少したてば冷たいむくろになつてしまふのだ。そして干草に亂れるあの聲も、程なく絶えてしまふのだ。ひとり虫のみでは無い、人間にもかうした末期があるのだ。……

西の山端にか、つてゐた薄赤い雲も、今は全く失せて、野路を歩く人も、ほんやりとすく様になつた。私は時のうつり行くのも知らず、夜の幕が山も川も家も田も一面に包んでしまふまで秋の夕べを味つた。

病める友に

本 四 大田 貞子

かよわき美沙様、其の後いかが？

あなたはとうとう御病氣になつたのね。きんち私に私がそれを心配してゐたか御存じですか。私は何時もいつてゐたぢやないの、「此頃あなたはだん／＼お疲せになる。勉強も大事だけぢや身体には代へられぬいから無理をしたらいけない。あなたは餘りあつた御自身に無關心ぢやないの、いけぬい事だわ。」と。あなたはきつと忘れてしまつたでせう。

美沙様、今度の病氣で、貴女はきんち身体つてものが大事だか、多分お分りなすつたらうと思ひますあなたの將來の爲にそれは大變い、事ですわ。

美沙様が休んでゐる内に、悪魔に對抗する方法が自然と分つて來ますでせう。そうなつたら直ぐ快くなりますわ。あなたは若いのですもの。

あなたは希望を捨て、はいけません。きんちに苦しい時でも次に來る幸を考へていらつしやい。そしてら苦しくなくなりませう。そして強くあらうとして下さい。美沙様、重ねて申します。必ず強くなり得るを信じて下さいではさうなら。あなたの強からん日を見詰めて。

彼の女

本 四 香川 トヨ

幼にして両親を失つた彼女は、きんち親の愛が暖いものか、それさへはつきり知られなかつた。嚴格一方の叔母によつて教育された彼女が死んだ両親を慕ふ事。目も當てられない位。物心付き初めた時、華かな友の身に引きくらべて、如何に自分の境遇が味氣ないものか、何かにつけ悲しんで、涙の日は多かつた。

きんちすれば、辛く當る叔母でも、彼女に取つては唯一の柱と頼まれた。何事も命運だに只行くまゝ、の目を送つて見た。あはれな彼女、それに神はまだ悪戯を止めようともせず、遂に苦しみは頂上にまで達した。たつた一人の叔母さへふさした風がもて、秋風吹く日床にうめいて全快すら疑はしくあつた。これが爲、彼女は切角の學校も斷念しなくてはゐらない程、苦しい

破目に立つて居た。あゝ、その心苦しきは。――

近頃めつきり沈んでしまつた彼女、それは何よりも人の親密な友にすら語つては居なかつた。さう思つても口がしまつて打明されぬのだ。彼女はもうすべて物の物に反逆しなければならなくなつた。そしてもう今迄の様な感では到底駄目だつた。學校を退學すると、すぐ彼女には家事上一切を背負つて行かなくてはならなかつた。か弱い少女の身を以て、もうあらゆる世間の苦を味はなくてはならない身と變つてしまつた。形ばかりの夕食をすませて、彼女はぐつたり疲れた身体を、又再び叔母の看護のために捧げた。やがては死んで行かなくてはゐらない命をも知らず、草叢にすたく虫までが羨しくなつて、はふり落つる涙を止める術さへも知らなかつた。叔母の寢息をうかゞつて、こつそり彼女は親友への筆を待つた。僅か書いては又引き破り、そして又書く。そして握りつぶす。血と涙がいりまじつて。さうあつても明したくない。その度、あの岡で契つた友の言葉がむら／＼と湧いて、幾度思ひかへしても眞實は書き得ない。もう彼女には取るべきい

づれの道すら許されなかつた。打ち寄する波は歸るこいふけれども、彼女にはもう再び昔の學生時代は歸つてくれない。熱い／＼涙がその紙上にたまつて、その中にあり／＼友の顔が描かれた。「運動場の片隅にはきまつて二人の姿が竝んだのに、それさへ近頃は許されないので、たゞ秋風のみが通つてゐる。」さなけいてよこした友のいぢらしさ。その友にすべての事情を打明す事がさうして出來ようか。狂氣したかの如く顔面は血走つて、しきりに何か叫んでゐた。

噫！彼女には所有する生命も、冷たい星のまた、くひまに盡きさせてしまひたかつた事だらう。彼女にはその身体の滅びる日の來る事はあり／＼分つてゐたのに、その心の滅びる日は到底知り得なかつた事だらう。

渡場の夕

本 四 河村 信子

狭い路次をやつと通り過ぎた私共は、今まで心持早めに歩いて來たせいか、幾分昂奮の色が浮んでゐた。道を折れて左手に見出したのは、仄暗い電燈の光を障子越しに寫した軒の低い一軒の家であつた。

大川の邊り近く建てられてゐる、渡守の家だつた。

「ごめんどさい。渡して下さるでせうか。」

「もう今日は仕事をおきまして……今少し早いと、よかつたんですが。」

まあ、さうしよう、あの様に急いで来たのに、此處で渡れないと、より遠い道を廻つて歸らねばならぬもの、私共の顔には一齊に不安の色が浮んだ。

「お氣毒ですが、も一度ご苦勞していただけないでせうか。」

祖母の願で、やがて裏口から夕飯をすましたらしく口を動かしながら、六十恰好の老爺が出て来た。

「何處へ。」

「竹本の端まで。」

舟の纜はとかれた。

「さうぞお乗り下さい。」

粗雑に造られた棧橋から一行は乗りうつた。小さい動揺が瞬時に起つて、川の面に照らされた入陽を碎いた。

棹さす小舟はゆるやかに水面を滑りだした、と同時に、漁村の夕をつげる入相の鐘の音は、高い聲より起

つて靜かに靜かに全村を包んだ。

「わしらはあの響を合圖に一日の働きを止めるのでさ——。」

船頭は舵をとりながら話してゐる。

平和なる村からは淡い煙が立ちのほつてゐた。

田舎の夜道

本 四 藤井チエ子

まるで死の世界にでも行く様な道、私はかう思ひながら淋しい田舎道を一人で我家へミ足を運ばせた。あたりは暗い。私のはいて居るゴウ草履がバタ／＼と氣味の悪い程、あたりの静けさを破る時、何物かが後からついて来る様な氣がして、ひそりてに足の歩みが早くなつて来る。無理に心をおちつけようとしてもおちつかない。森の前まで来ると、今森から月が出ようとして、そのあたりがぼう／＼と明るなつた。ふと山奥に狸が住んで居るといふ話を思ひ出した。そしてつぎから／＼と狸に化された人の色々の話が頭に浮んで来た。自分も若しやと思ふと、全身に冷水をかけられた様になつた。急に足の歩みが小走になつて来た。森から淋しさをそるふくろふの聲がぼう／＼と聞える。私はた

まらなく恐しくあつて、遂に一目散にかけ出した。

白花咲けば

本 四 藤井 藤江

某日——

ひね／＼とした白い風が立ち初めたと思ふと、裏庭のこすもすが呼び醒まされた様に咲き出した。

今日咲いたのは冷い銀色にゆら／＼白ばかり。

「お姉様、まだこすもすは咲かないんですか。」いつとも蒼白い顔をしてゐる黎子がこの時ばかりは輝かせていつた。

今日黎子の病はいつにたく大變よかつた。けつそりと落ちた頬にも珍しく薄い紅が上つてゐた。

「黎子さん、今日ね、こすもすの花が咲きましたよ。貴女の好きを白ばかり。」私は手折つたこすもすを妹の隣近く寄せて囁いた。「さう、お姉様、私嬉しいわ。」弱々しい笑みを片頬に浮べて嬉しげに黎子は呟いた。喜びのためか、その黒玉の瞳にはうつすら涙さへ沁んでゐた。私はすぐに緑色の花瓶に入れて、妹の枕邊に置いた。

純白のこすもす、それは美しい花ではあつたけれど

病む子の枕邊にはあまりに淋しい花だつた。

「こすもす、白のこすもすね。」黎子は幾度もつぶやきつ、淋しい白花をしげ／＼と貪る様に見入つてゐた。

「お姉様」ふと靜かな聲で呼んだ。

「あゝ黎子さん。」と微笑む私に、妹の聲は矢繼ぎ早やにひびいた。

「お姉様、この花お好き？」不意の問ひにたぢろいた私は、それでもすぐに答へた。

「こすもす、大好きな花よ。中でも白花は殊に好きでもかうして見ると、あまりに淋しい花ね。じつと眺めてゐると涙が出さうよ。」

「ほんとうに！お姉様、でも私はその淋しさが好きですの、白のこすもすは私の命よ。何だか、じつと耳を澄ますと、泣きの哀音でもひびいて来る様な氣がします。いぢらしいこの花は何だか私自身の様を氣がします。弱い妹はもうさ、泣いてゐた。慰めの言葉も見出し得なかつた私は、たまらなく淋しい心になつた。

暖い十月の陽は障子に映つて、白い花は疊に淋しい

影を刻んでゐた。

お晝にあまり話したせいか、夜に入つて黎子は又熱が出て来た。考へて見ると、何だか私が妹を泣かせてもした様を氣がして、自分の不注意さが深く恥ぢられてならぬ。母と二人で暗い心になり勝ちなのを押へてみよりする。日暮方來られたお醫者の殘された言葉はあまりに頼り少ないものであつた。

今夜も妹の枕邊を離れなかつた。

いたゞしく衰へ果てたいぢうしい妹の顔に、私は幾度か涙を拭うた。

次の日――

薄ら寒い底冷むのする風が吹く。

野分の風が過ぎて行く毎に、かさこそと怪しい落葉の音がする。昨日と變つて氣のめいる様な日だ。

學校へ行く事は行つたもの、黎子の顔が目先にちらつて勉強も上の空であつた。授業の終るのを待ちかねて走つて歸る。けれども今日は玄關に「お姉様、お歸りなさい。」といふやさしい聲を聞く事は出来なかつた。

黎子の枕邊には、お母様が心配さうに座つてをられ

た。

「たゞ今、黎子さんはどうですか?」と訊くと、お母様の肩はひそんだ。「さうもね、あまりよくないらしいよ。」御聲は曇つて力みかつた。

黎子はすや／＼と眠つてゐた。昨日よりは一入衰へが目立つ。折ふしほつかりと開く瞳は、力なく白いこすもすにそ、がれる。こすもすはまだ美しく咲いてゐた。黎子は瞬きもせず白い花を凝視してゐた。その瞳に露の様な涙の浮んでゐたのを私は、ほの暗い夕闇の中に見落さなかつた。

秋の陽は既に西に没して、しのびやかに夜は來た。夜もすがら、外にはさびしい秋雨の音。

その次の日――

色づいた木の葉に濺ぐ雨は見るからに怪しいものだし／＼と弱い音を立て、雨は一日中降り續ける。裏に出て見ると、早くも地に歸つたこすもすの花びらが目にうつる。

黎子の病勢は著しく募つて來た。萬一をきづかつて親類の伯父様、伯母様が來られた。

今日學校へ行くまいかと思つたけれど、西洋史の試

験のある日なので心を後に残しながらも午前だけ出る事にする。忍ぶ様にして黎子の居間の襖を開ける。

「お姉様、早く歸つてね。」と、眠つてゐるとばかり思つた妹の聲が後にひびいた。私は胸が迫る様な氣がした。

歴史の試験は二時間目だつた。案外容易に出來たのでほつと息をついた時だつた。

「狭山さん、狭山さん。」あわたゞしく小使の聲がドアの處にひびいた。はつと思はず立上ると、「お宅からお使で御座いますよ、早くお歸りなさいまし。」

私は何も彼も夢中だつた。ころぶ様にして家にかけて込んだ時、奥から眼を泣きはらして出ていらした伯母様とばつたり合逢つた。

「まあ、夜詩子さん。」伯母様の聲は涙にぬれてゐた。「黎子さんがいけないんですよ。さつきから貴女の歸りを待ちあぐんで、さ、早くいらつしやい。」

伯母様は私を抱へる様にして、座敷に入れて下さつた。

座敷にはお母様も居られた、叔母様も居られた、その他數人の親類の方も、そしてお醫者様も來てをられ

た。ごなたのお眼も涙に潤んでゐた。私は妹のベッドに馳せ寄つた。

「黎子さん、黎子さん。」見下す私の瞳から涙は雨とあふる、のだつた。死んだ様に眠つてゐた黎子の瞳が夢見る様にふと開いた。

「お姉様――」私を見つめた妹の瞳もうるんだ。「お姉様、こすもすを――こすもすを見せて――」そつと私が戦ぐ手を花瓶に伸べた時、白い花片の一つがハラリと脆くも疊に崩れた。ハット胸をつかれたけれど、もう遅かつた。何ともいはれぬ心許ない感じが瞬間胸を襲つた。

花片の減つたこすもすは幽かに／＼ゆらいでゐた。じつとそれを眺めてゐた妹の瞳から、ほろりと玉の様な涙がすべつた。

「お姉様、そのお花を、その散つたそのお花を。よ、と若い叔母が泣きくづれた。大伯父までも拳に流る、涙を拂つた。お母様の膝に泣き伏してゐた私は堪へられなくあつて、つと外に出た。

中からはかすかなすゝり泣きの聲が洩れた。

x x x x x

日誌はそれまで、絶えてゐた。残されたものは空しい白のページのみだつた。夜詩子は今日も一年前の悲しい追憶に泣いた。

「今年も白いこすもすが咲く。」熱い涙は止め度もなく夜詩子の頬をぬらしに。裏庭には去年と變りなく、涙ぐんだ様な白いこすもすがゆれた。

「それなのに——それなのに。」彼女は再び咽んで。白花咲けば白花咲く頃にもなれば、愁持つ人の子の涙は繁かつた。

秋の夕

本四 渡邊 房江

静かな秋の空に錦をちぎつた縷雲が、ふわり／＼とさまよつてゐた。何時の間にか、夕の秋風に西の方へ流され、太陽はやう／＼西に傾いた。向ふに見える鎮守の森は薄淡く銀杏の木は黄葉を残して突き立つてゐる。時に歸りを急ぐ小鳥はけたましく西より東へ／＼と跡を失つた。農夫は夕日をあびつゝ、田に畑に働いてゐる。

天も地も共に静だ。太陽が西山に近づくに従ひ、眞紅はいよ／＼加り、林も森も山も紫にほひ、鏡

の様な大空には星二つ三つ輝きはじめた。農夫等は村里に急ぎ、家々は闇に包まれて、煙彼方此方より細く立ちのぼる。一面の刈田には切株の他には何物も見えない。私は傍の小川をつたつて、行く手も定めずなほ歩を運ばせた。山寺の入相の鐘はゴーン／＼と夕風を破つて耳に入つた。何とほしに物淋しい、こんな所で讀書でもしたらば……本當にいゝ夕だ。私は思はずかういつた。ふと見上ぐれば月は山の端をはなれて下界のすべてを美化した。玉の様な月は水にうつり銀の小波をたゞよはせた。小川の流ればゆるやかに岸に佇む我が影をうつし、秋風は身にしみて、そぞろに寒さを感じた。そして私は何時もの如く空想にふけつた。小川のさゝやきはさら／＼とゆらめく千草の花と共に何かを私に告げる様な気がする。暫く佇んで秋の夕を眺めた私は、月光と小川のさゝやきに何も彼も忘れてしまつて、本當の自然を味つた。邊の空気が月光を浴びて銀色にきらめく。

鼠の死

實一 伊藤 コト

月は早や中天に昇りて、沈々こふけ渡つた夜をくま

なく照して居る。私はあたりに氣をくばると、突然町の静けさを破つて、キヤキヤキヤと雷ならぬ叫び聲が起つて来た。私は思はず立上つて、おや何だらうと、じつと耳をすまして聞いて居ると、復キヤキヤとじつとりに聞ゆるので、さうも變だと思つて、さにかく行つて見ようと決心し、其の叫び聲をたよりに庭深く行つて見るに、松の下で一匹の猫に鼠が苦しめられて居るのであつた。私は傍にあつた小石を投げると、ちよろりどどこかへ姿を隠してしまつた。鼠は早や氣絶してしまつて居た。私は清水をふきかけてやつたがもう臍を永遠に鎖してしまつた。

大照院へまいる 實一 小田 文子

運動會といふ重荷をおろしての日曜日である。今日はさんよりとした秋の空模様である。しかしかすかな日が時々下界を照して居る。五六人の友達は、午前八時頃思ひ／＼の服装して、私の家を出た。やがて橋本の橋に通るか、つた。氣持よい風は友達の額の毛をさぶる橋を渡り、川邊を傳つてあるいた。清い静かな水の面に、一二艘の舟が浮んで居るのは、一層川の趣を増

して居る。それより一町ばかりして、小さい田圃道へ出た。

田は一面黄色をなし、そよ／＼と小波を立て、居るのも面白く、所々には手拭ひかぶつた農夫が一心にゴーンと、稲をこいで居る。廣々とした田圃を眺めつゝ、大照院をさして、畦道をたぎつた。

いつのまにか大照院の前に来て居る。足下には小さい砂利が敷きつめてある。下駄のまゝではいかゞと心は、かりながら門前に来た。此の寺は維新前、我が藩主毛利公の墓地のある所なので、自由に門内に入る事を許されぬといきいて居た。なるほどさうであらう、行つて見ると本門は閉ぢてあつた。此の門こそ講讀で、學んだ樓門といふのであらふ。しばらく迷ふて居たが、或一つの小さい入口を見つけた。一同は不安を感じつゝ、中に入った。中には人のけはひもなく、しんとして居た。

庭には雑木が小高に茂り、地には天鷲絨の布を敷きつめた様にきれいな苔が光澤を放つて居る。又小さい入口から本堂の正面に出た。本堂は戸がしめてある。そこを通り抜けて左の方へ出た。見ると燈籠が立ちあ

らんで居る。そこに入りたくなつたので又入つた。するとそこには近頃立てた様な立札があつた。あゝ、不安を胸に浮べたが、よく見るに「下足堅く無用」と記してあつたので、やゝ安心して素足になり、上つて行つた。そこからは敷石が一間巾位にしきつめて、素足の方がよい様な気がした。その左右には、燈籠が幾つもなく立つて居る。

だん／＼上るとやゝ、廣い塲へ出た。これこそ毛利家の墳墓のある所、前面に敷石の石塔が立て、ある。そこは全部敷石で、通路の左右には澤山の燈籠が立つて居る。敷石の間には美しい苔が地を飾る。その上にぎんぐりの、ころり／＼／＼ころりがつて居るのも面白い。廣場の周囲は幾百年経つたか、わからない様な大木が其の地を神々しくさして居る。大木の間には、紅葉が色彩つて、しんとした静かさ。唯聞ゆるのは、岸の上のつのは花や躑躅をうつつしてチヨロ／＼と、流れる谷川の音と、大木の上で囀る小鳥ばかりである。一同は此の景色に氣を奪はれて居たが、そこに多くの墓のあるを思ひ、一々拜んであるいた。いつのまにか一同は無言にあつて居た。友達の一部が「こんな所で勉強し

たら、さぞ愉快だらう」と、だしぬけに口を開かれたまことにそういひたい所である。いつまでもこんな所に居たいと思つたが、遅くあつては大變と、心を残して歸途についた。

うたゝねの夢 實一 河崎 イト

お風呂から上つて、私は机の前にむかひました。やがて眠氣がさして、机にもたれて居ますと、かはゆい政子さんが私を二階につれて行かれました。

するにそこには多くの綺麗な愛らしい少年や、少女が、各樂器を持つてゐました。政子さんがピアノを弾かれますと、多くの少年少女が皆合唱します。

私は羨ましくてハモニカを吹き出しました。

あゝ、よい聲だと思つてゐるよと眼がさめてあたりを見れば、やはり机の前に居たのであります。併し隣室から妹の聲が、かすかに聞えます。

あゝ、今のは夢か知らん。と暫くほんやり。

春の楽しい日 實一 佐々木トキ子

私は董や、蒲公英なきの咲満ちた堤の下にねころん

で董の花について色々話し合つてゐます。一間位向ふに、蒲公英がばつちりと開いて居る。

それに見入ると、直ぐ頭の傍に土筆が二三本。それを取つてじつと見る中、友達が土筆についてお話をし下さいました。

はつとしたりやうに、空をむいて見ますと、雲雀が宛然轉玉をころがすやうな聲で囀つて居ます。空の何處何處で囀るのか、ちつとも分らない。

太陽の光で空を眞向きに見る事は出来ません。

私はまぶしい目で聲のする方を見つめて居ますと、青い空に小さな黒いものがあつて、ちつとも動きません。それが聲のものでした。其の聲に柔い春の天が破られるやうな感じがしました。

暫く目を瞑て聞くと、どこへ行つたのか分らなくなりました。もう其の時はお晝近い頃で有りました。いつしか眠つてしまひました。

ふと目を覺ますと、友達は二人でまた色々な話をし居られた。私と隣の人が眠つて居たのです。

雲雀はまだ草臥れもしないで、何處かで囀つて居る本當に春の野遊びは眠氣を催する。

秀坊の寝顔 實一 徳重 イツ

たつた今迄いたづらばかりして遊んで居た秀坊は、晝間のつかれが出たのであらう、お母さんの乳房をくはへたまゝ、正体もあく寝込んでしまつた。間もなくお母さんがそつと乳房をはなして抜足、さし足で立退かれるのも一向知らぬ。

その寝顔をつくづく眺めて居れば、それはほんとに無邪氣な顔をして居る。何の悪い心もなく、神の様に清い心を持つて居るたらうに、やがて智慧づくに随つて、どんなに心が變化して行くだらうなき、秀坊の未來を考へて、いつ迄もあの清い心と無邪氣さを失はぬ様にと祈つた。自分にもこんな時代もあつたらうに、思はず自分の幼時を追憶したりして見た。けれども只想像するばかりで、はつきり分らう筈もない。時々手を握りしめて見たり、足をびくびく動かして見たり又思はず大きな息をしたりして居る。

晝間いたづらした時は、つい手を叩いたりする事もあつたりしたのを思ひ出し、あの無邪氣な寝顔と思ひくらべて見て、ほんとにかはいさうな事をしたといふ

感じが起つて来た。自分は何故あんな小さい者を叩いたりしたのだらう。と自分の心を責めて見た。
ふと寝顔をも一度見た時、さつきの秀坊は何の夢を見て居るのやら、ニツコリ笑つた。そして復すやすやと眠つて居る。
きつと秀坊は平和な夢路を辿つて居るだらう。

日 暮

實一 時山マサ子

ふと耳にびいびいが聞ゆる。あつと、思つて時計を見る。まだ早い方のびいびいであつた。幸によかつた。掃除を始めた。日はもう西へかたむいて間もなく、向ふの山に沈んだ。六時の端の坊の鐘も間遠くゴーンと響いて来る。祖父は近所に招かれて行つて居るから留守である。父もまた用達に行き、母も町に買物に行つて歸つて来ぬ。後は子供ばかり。前の道も一人も通らない。もう薄暗くなつて居る。鳥の鳴聲も夕暮は案外淋しく聞え、ごひさぎのギヤツ／＼と鳴いて通るのも一入物淋しい。

菊の花

實二 有田イシ子

あちら、こちらから貰ひ集めた菊の苗を母と二人で裏の畠に植えて、毎日枯れないやうに水をやつたり、肥料をやつたりして心配して居りました。すると一本の莖に蕾が葉の間から十位も付きましたのに、始めて気が付き、母は眼鏡で、横から出てる蕾のけられました。私は毎日學校から歸るとすぐ畠に飛んで行つて、虫捕りをして居ります。あれ程毎日虫を捕るのに、何處から来るやら澤山の虫が取りついて、さもおいしさうに菊の葉なごにさかさまになつて、すいついて居るのでもにくらしくて仕方が有りません。さうしても捕らずには置かれませんか、そつと行つて、手で「ぎゆつ」とつぶしてやる。めちや／＼にあるので大變氣びが悪う御座いました。そうして今頃では、大きな一輪の花が日に増し、一ひら二ひらと、咲くのが何ともいはれぬ愉快で御座います。隣の國司には、菊の種類は多いですが、皆長くておしりからけになりましたので、何時でも
「有田さんのは鉢植ねによい短かくて葉がよく着いて居るので一つかへて貰はにやならんね」と言つて居られます。今日は父の正月命日なので、初菊を御佛に

上げました。

栗拾ひ

實二 阿武フジ子

目のさめたのは、丁度六時でありました。朝食をすまして、雪子さんと二人で、栗拾ひに出かけました。静かな村里は、朝露にしつとりとこして、秋風は冷めたくありました。二人が元氣よく山路を登つた時、太陽はやうやく山を離れました。中腹より見おろす、彼方に一軒、此方に一棟と散在して居る農家の屋根より太陽の熱の爲、朝露が蒸發して、丁度煙の様であります。新鮮なる空氣を吸ひつ、やうやく栗のある場所に着きました。彼方にも、此方にも、栗が散亂して、拾ふのに目がくるむ様でありました。二人はしばらく一心不亂に、競争を始めました。やがて目をあけて、雪子さんを見る。最早ふくろにこぼれるばかりで、その顔も、嬉しさがこぼれる様であります。や、しばらく拾つて、二人は一散につづらをりの山路を下りました。歸りて、母に見て戴きますと、母は

「まあほんまに、澤山拾はれたね。」
これだけの言が、私共の胸にはぎんなに、嬉しかつ

た事でせう。今日は、ほんまに愉快でありました。

月の夜

實二 關屋キヨコ

月が出た。暗い夜のすべてが照されて行く。誰一人見ぬない。松の木の先が美しくかゞやいて、倉の屋根がほのじろい。

森の姫も唄はれた

それも昔の夢ぢやもの。

一つ葉の木にもたれて、私は泪じましい氣分を押へようど、小さく唄つた。

情ないぞい呪はれて、

今ぢや水面に咲く花よ。

月は昇つて行く。はかないあこがれを持つた私は、ジツジ月を見けた。淡い悲しみに涙するエメラルドの星の子達は、下界の何物かを尋ねる様に瞳を見はつてゐる。

雲が走るのか、月が走るのか、走る、走る。

ミカサリ、一つ葉の一片が足許に散つた。

私はこれを無言で拾つた。

病床の友へ

實 二 友永ヒサ子

なつかしい秀子様御入院後御病氣は如何で御座いますか、病床の朝夕は随分お淋しい事とお察し申します。試験前の今時學び舎を後にして病床に起臥し給ふ貴女を思へばお氣の毒に堪へません。今まで何のお慰めもせず、唯筆先のみにてお伺ひ申して居りましたが。思ひ出しますれば、先日私が手藝で教はりました女持のおかね入れがありますので、貴女に贈呈致します。店で買ったのに較べるに大變不出來でお氣には召さぬかも知れませんが、少しなりとも病床のお慰めさるりますれば仕合せです。では秀子様今日はこれにて失禮致します御病氣の早く御全快遊ばします様祈り上げます。さらば

返 事

おかね入れは確かに届きました。淋しい病床に臥す私には、こんなに嬉しかつたことではせう。ほんとうによく出來てゐますこと。隣室の皆さんとお賞め申しました。毎日枕邊に置き、又は手に取り、ゑがめてはおき、おきてはながめ、せめてはひさ子様のお姿の代り

にとよろこんで居ります。病氣はお蔭様で少しは快方に趣きました。さうぞ御安心下さいませ。試験のことも氣にはかゝりますが、致し方が御座いません。今は唯夏の休暇に楽しくお話しが出来る様に祈つてゐるばかりです。右御禮申し上げます。さらば。

夕 陽

實 二 林 アキ子

船は越ヶ濱を發して走り出した。此時眞紅の夕陽は西の山上に浮んでゐた。私は船中よりこれを眺め今暫くこのまゝに思つてゐたが、夕陽は次第く没しようとしてゐる。

空は忽ち一面の繪となり、夕陽は海上を照して、金波銀波の模様を織つてゐる。うつりとしてゐる内、夕陽は早や西山に没してしまつた。

暮れ易い秋はだん／＼と黒い幕であたりを包んで、しまふ。船は遂に目的の港へと着いた。

親 切

實 二 波多野フミ

諺にも、「人はなさけの下にすむ」と申します。混雑する汽車や、電車で見ず知らずの人から、席を譲つて

いたゞいた時のことを考へると、私達も他に對して、どこまでも親切をしゑければなりませんと思はれます。ここに老いたる者、弱き者病める者等に對しては、出來得る限り親切をつくし、心の底から之をいたはり慰めるやうにしたなら、必ずその人を満足させる事が出來ませう。親切は人たる者のお互のつこめでございます。

しかし、何事にも眞心がもとでございます。親切な行も、眞心から出るければ、眞の價はありますまい。褒められようといふ考へや、他に見せかける心から出た親切は、決して好ましいものではございません。まごころを本としての親切は通學の途中でも、家庭の日常にも之を積む時は大をいたす事が出來ます。小を積んで大をいたすは、徳に進む道ではございますまいか

姪の死を聞きて

實 二 福住ミチコ

何月何日學びを終へて、我が室に歸つて來た。私を待つてゐる物は引出しの隅のハモニカである。よしこれでもと、それを取出して、去年學びし牛おふ童を吹いた。

室には誰も居ない。するに一枚の端書が投げ入れられた。おや私に來てゐるなど、そつと立つて拾ひ上げて見れば、故郷の兄より可愛い、すみ子が僅か三才を一期として、白露と共に消え行きたり。とはつと驚て宛然夢とのみ疑はれた。嘸姉上は……は早速悔狀でもと思つたが、書く手、書かれる筆まで悲しみを悟つたのか、少しも進まぬ。太陽は方に西の海に枕まんとして、〇〇寺の晚鐘は、私の胸を突くやうに聞ける。暫くして西の空を眺むれば、夕けの煙、其處此處にのぼつて居る。その煙も今すみ子の茶毘一片の煙の様に感ぜられた。

我が行く路は

補習科 秋山 京子

花散り失せては

薪に賣られ、

家貧しければ

人に捨てらる。

誰をか頼みて

何にか頼らん、

唯かみの結ぶ

愛の友あり。

寂しい讚美歌の調べを夕暮の丘に漂はせながら、歌の主の紫都子は、凋落しきつた秋の野をあてもなくさまよつてゐました。「人世は永久に解き得ない謎の一つかしら。」と彼女はつぶやきながら、彼女の思ひは永遠に取り去ることの出来ない壁を置かれた、従姉の身の上に及んで居りました、そして恰も夢遊病者の様にふら／＼と歩いてゐた紫都子の足は、何時しか丘はづれに來てゐました。すると彼女は、はつ／＼気がついたやうに、今まで足もどばかりを、見つめてゐた眼を轉じて、空をきつと見上げました。深い悲しみを湛へたやうなその瞳は、十七才の處女として、あまりに淋しうございました。咲き残つた一輪の野菊にくちづけた彼女は、傍の石に力なく腰を下しました。今し彼女の思ひは、別れた従姉のことで一ばいでもございました。

心は全く變つたのだ。「紫都子は此の春十年振りで會つた従姉との再會の日が思ひ出されました。一通りの挨拶を済した二人の間に、重い沈黙が醸されたことを意識しました。「をかしな人ね、何かお話をなさいよ。あれだけがさんに會ひたい、會ひたいつていつた人が……。」と紫都子の母は申しました。けれど彼女は、「ね、」と答へたのみで、心に思つてゐたことの十分の一すらいひ出せなかつた自分を思ひました。そして一週間も、すが子の家に滞在しながら、十年前の親しさを再び得ることのできなかつた自分を悲しみました。唯わけもなくどりすましてゐるやうなすが子が恨しうございました。「こんな氣まづい思ひをする位なら、無理に願つてまでも來るのでなかつたのに、すがさんはやはり昔のまゝのすがさんとして、萩の里から眺めてゐればよかつたのだ。」と紫都子は深い失望を感じながら、裏切られた自分をどうする事も出来ませんでした。彼女はこゝまで考へて來る。「あゝ、もういやだ。決して昔のことなんぞ、あつかしく思はないで、見果てぬ夢として、永久に葬つてしまいたい。」と思ひながら、一方では昔日の暖き交りにかへるであらう日を望んで

靜に眼を閉じた彼女は、「すがさん。」と小聲で呼びました。嗚呼これこそ紫都子が夢にだに、忘れたことのあい唯一人の従姉の名前でございました。そして一點の汚點も残さなかつた幼き日の繪巻物を繰り開けたのでございます。

「紫都ちゃん、ほんまにお國に歸るの。」紫都子と呼ばれた少女は、赤いゆすらを探つてゐた手を止めて後に振りかへりました。そしてあざけあい大きい眼を尙大きく見はりながら、「ね、ほんまどうよ、すがちゃん」とほんまどうに力を入れて答へました。

「なぜ歸るの。」とすが子はつゞけて尋ねました。

「でもお父さまがお役目をお止めなさつたから。」

と紫都子は、もうこれから二人で遊ばれないのね。」と淋しさうにすが子は、ました。「ね、私お國に歸つたら、お母さんに教つて、お手紙を上げませうね。」きつと頂戴ね。」と二人は奇麗に熟したゆすらの木の下で約束しました。

時を急ぐ鳥の聲に、ありし日の幻影をこはされた紫都子は、我に歸つて眼を開きました。「あゝ、あれから、十年いふ月日がたつたのだわ。その間にすがさんの

ゐる矛盾した心を抑制することができませんでした。

涙に濡れた顔を上げた紫都子は、「修道院へ、修道院へ。」と叫びました。「自分はあの黒衣を纏つた尼僧にあつて、すべてを忘れてしまいたい。そして神にこの身を捧げたい。それが現在の自分としてはとるべき道である。」と思ひました。けれど家に残る母のことを考へるとがつかりました。「あゝ、すがさんへ昔の心でゐて呉れたらば、こんなに自分は苦しまないですむだらう。」時はすべての物の破壊者である。紫都子、お前は大事なつとめを忘れたのか。」と彼女はあり／＼と心の叫びを聞きました。「さうだ。自分にはなすべきつとめがあつたのだ、徒らに昔日の夢を追ふのは愚である自分はもう忘れた筈ではなかつたか、何處までも希望の鍵を持つて突進しやう。」と雄々しく決心した彼女は奮然として立ち上りました。家路を辿る力強い一步一步を地上に印しながら……。

折しも圓かな十五夜の月は彼方の前途を祝福する様に、煌々として輝いてゐるのでございました。

そして彼女が、今まで解き得ない謎であると思つた人生も、今の瞬間に於て、總てを解き得たことでござ

いませう。

孤獨なるが故に

補習科 河内山積子

—轟—轟—

夜の静寂を搔亂す恐ろしい風吹く眞夜中頃、A子は床の中でまだ眼を開けて居た。

彼の女が眠りを求めたのは、烈しい風の吹き出して間もない九時頃だつた。寝ながら其の音をジツと聞いてゐるに、A子は何時の間にかさびしい心にあつて来る自分を見出した。彼の女は曾つてさびしさを懐いた事はあつたが、今夜程痛切にさう感じた事は一度もなかつた。

A子が十六の冬、なつかしい母はもう此の世に居なかつた。彼の女の心は如何だつたらうか、彼の女は毎日泣き續けた。それも去年の事となつた。彼の女は悲しかつた去年を思ひ出した。

A子は母のみか兄を失つた。それ故に彼の女は彼の年父いたる父と、ある濱に近い閑静な土地に住つて居た。彼の女は父と二人で今迄暮して来た。A子は勿論寂しい性であけらねばならぬあつたが、それでも彼の

女は今までかう寂しいと思つた事はなかつた。それはA子に父が唯一の慰安者であり、且慈愛者であつたからだ。父は彼の女を愛した。彼の女は無邪氣に成長してゐた。けれど年月が経つに隨ひ、彼の女が成長するに隨ひ、彼の女の心は段々淋しさに傾いて行つた。彼の父は彼の女を楽しませるに努めた。A子自身もそれは知つて居た。

A子は折々亡き母を思ひ出しては、静かな後の海邊に立つて泣いた事もあつた。處か今夜この烈しい風の吹く夜、その父は急に用事の爲め外出した。さうしても、A子一人が残らなければならぬいやうにあつてしまつた。

父の出て行くまでは、只何でもあつた事に思つて居たが、やがて一時間も経つて、風の音が悲しく耳に入る頃、A子の寝てゐる六疊の部屋も、部屋に一つの電燈も、彼には寂しい様に思はれて来た。

A子は此のさびしさから逃れようとして眠りを求めた。併し彼の女がつかめれば努めるだけ、彼の女の眼は冴ゆるのみだつた。

「さびしい、ほんまに人なつかしい夜だ。」

彼の女は口の中で繰り返した。人生で没交渉になつた淋しさの底に到つた時、A子は始めて彼の女の信じてゐた孤獨の自由も、價値も、權利も、其處には何の用もなさない事を見出した。そして誰か来てくれ、ばよい、親友を得たいと思つた。

「やはり孤獨は寂しい、到底一人でジツとしてゐる事は出来ない。」

A子がかう思ひながら、此のさびしさを慰めて來れるほんまの友を欲しいとしみじみと思つた。

—轟—轟—

夜の静寂を搔亂す恐ろしい強い風はまだ止まない。父はまだ歸らぬ。彼の女は床の中で一人かんがへて居た。

剃刀を持ちて

補習科 田総 ユキ

彼女は凄く光つてゐる剃刀を危なさうに片手に持つて、父の枕元に座つた。初めて剃刀を持つ好奇心と臆病な恐怖とをその瞳に輝かせながら。

「うるさくてしょうがないから。」
と彼女の父は眞蒼な顔のま、で呟いた。

無理はない、彼女の父は四日前から断食してゐるのだ。さうしてこの様なみじめな断食をせよしてゐるか、彼女は知りきつてゐるが、日々に衰へて行く父をみる度に、何故あんな極端な断食療法なんてなさるだらうと悲しく思つた。

「もう五月からでせう、胃が悪いのは。」

と母がいつたのが五六日前だ。

「うん胃の病氣は長くて困る。」

父の顔に不快な色が流れた。

「夏休み中にすつかりおぼして了つたらさうですかいつもお粥ばかりでは體が瘦せてゆけばかりですわ。」

父は新聞から目を離して考へ込んだ。

「おれもさう思つてゐる。やつぱり断食療法がいいかな。」

彼女の父が断食療法を始めたのは、この對話があつて間もない日であつた。父は半病人の様になつてじつと横はつてゐながら、心配する皆んなのものに氣の毒さうに。

「前から衰弱してゐるものだから、三四日の断食が餘程こたへる。」

あど、辯解めいた口吻を洩らすのであつた。彼女はにぎり寄つたが、何だか手が硬ばつて動けさうにもあかつた。

「教へてあげるから、刺つて御覽。何も稽古だよ。なに少々こんな體に傷がついたて關はんよ。」

と逡巡してゐる彼女を促した。彼女は「こんな體」といつた父の言葉が妙に神經にこびりついて考へさせられた。なぜつて彼女の父は最うよほぎ年を重ねてゐる。もこく、虚弱な體質の父は年齢以上に老けて見えた。こんな意味で、父はもう役にもあまり立たない體はさうでもいつた悲しさうを、あさけあさうな言葉を彼女はとでも頼りないものに聞いたと同時に、彼女の稽古の爲には我身をも厭はぬといふ優しい慈父の心に、彼女は瞳の底の熱するのを覺えた。

今彼女の頭の中は剃刀を持つたまゝ、頼りあさど、悲しさど、感謝どがどりとめめあくこんがらがつて渦を巻いてゐた。彼女はとでも苦しさに堪へられさうにあかつた。しかし仰向けになつて、靜に待つてゐる父を思ふと氣が焦つた。やつと勇氣を鼓舞して、剃らうと思ふあたりへ石鹼を塗つた。そして教へられるまゝ、

行く。それに痛ましく出た頬骨と、血色のない蒼白い皮膚！。血液の循環があるのだらうか。

彼女はこみ上げて來る悲しさをさうする事も出來なかつた。それにさつき「こんな體」といつた事を思ふと、心臟が張り裂けさうだつた。

父は靜に上を向いてゐた。――彼女の心の悲しさを知らぬ様に――。父は幾度かしかけて出來ぬ彼女の手から靜に剃刀を取つて、不始末に残つた鬚を剃つた。彼女はその間、いかにも氣持よく剃れる父の手を目には見ながら、じつこして居られぬ様を悲しさに心は色々にくだけるのだつた。

見まいとすればするほぎ、純白のシーツミ、そけた頬どが、チロく、と目前を廻轉しながら疲れた神經に食ひ込んだ。

父は自分の顔を鏡にうつして、にこくしながらいつた。

「さうだ、一通り出来るぢやないか、――御苦労だつてね。」

と頬のあたりを撫でた。

彼女はうつむいて淋しくほ、笑んだ。そして思つた

に、おづ／＼と手を動かした。ザリ／＼と鬚が硬いので、尙のこと氣味の悪い響が手全體に沁みこんだ。

「あ、それでい、のだよ。出来るぢやないか。」と父がいつた。

心痛しながら、焦燥しながら、不恰好な手つきで、苦心に苦心を重ねる間にも、剃刀がつと行きつまつて幾度か「アッ!!」しまつた。「ツ」と思ふ事があつたが、父は唯「關はんく」とばかり何氣なくいつてのけた。彼女はうるさく伸んだ口髭を剃り落して青くあつた口のまはりをみてはつとした。けれど剃つた爲に一層尖つてやせたやうに見ゆるおどがひを見逃す事は出來なかつた。

「序に頬のところが剃つて呉れ。」

と父は満足さうにいつた。

彼女は口髭を剃るにさへ、あれほぎ辛らかつたものを、ましてあの頬ど、ひきくそけた父の頬を考へぬでもなかつたが、つい「はい。」といつてしまつた。

彼女はやつぱし出來なかつた。危あさうで落ちくほんだ頬に剃刀は當てられなかつた。父のいふ通りにすつと張つてみても、またすぐもとのくほみにかへつて

御自分には割合に無頓着で入らしやる。然しまたそれでい、のだ。あ、けれぎ………。と老い衰へてゆく父を考へた。

日記の中より

補習科 羽仁 素子

五月九日

桃色の薔薇多く咲き揃ひぬ。優しき少女の唇の如し愛らしき吊鐘草紅き蕾を破りぬ。思ひ出深き花にて殊の外たのしくうれし。午後に至りて驟雨來る。小山田の蛙頻りに噪ぐ。雨をさまりて四方の連山に薄き霧かりぬ。新鮮なる木葉に雨滴宿りて捨て難き風情あり青き櫻の葉蔭より真紅の櫻房のほ、ゑめたるも亦うれし。二つ三つ美しきを取りて齒に當つる心地言ふばかりなし。

五月十日

汀の喇叭草開く。蓮の若葉に朝露まろびて面白し。橙の花少し見の。蓮華田を刈る人漸く多し。麗しかりし春の毛氈の日毎に色褪するも哀れにこそ。夜に入りて晴空水の如く、月色殊に佳かりき。些なる風もなく夜は靜りて只蛙の聲のみしきりなり。月光蓮田の水面

に碎け、美しき言はん方なし。青葉をもる、月影一入涼しさを増す。心身靜りて暫く何事も忘れて恍惚たり

五月廿日

吊鐘草の眞盛りあり。紅きが中に、白きが際立ちて勝りたり。側にはホワイトリリーも丈伸びて小さき蕾をつけたり。共に我が愛づる花なれば、日毎に榮ゆるその姿こそ殊の外あつかしけれ。櫻草に似たる花の垣根に咲き縮きたるは、目覺むるばかり美しく唐めきたり。麥黄色に熟して夕日明るく映ねぬ。二寸許りに伸びたる稲の苗は緑したるばかりにて天鷲絨の如く、朝露の宿りたるは更なり。

五月二十二日

午後より空模様變り、黒雲空を蔽ひぬ。夕刻雨來りて雨蛙聲をあけてよるこびぬ。暫く立ちて雨は名殘惜しくも去りたり。白き土藏の前の花蔭蒲盛りなり。白黄、絞り等、白き土藏をベツクとして一幅の苗に可なり。わけて懐しき紫は未だ雷をも破らず。雨しきる梅雨の頃、優しき少女のリボンの如きが雨にうたる、は美しき中にも無言の悲しみをぞ語るある。

五月二十三日

の咲くは言ふばかりあぐれしけれ、又花の散るは言ふべからざる哀愁を含めり。

五月二十六日

川上村のあたり朝霧濃かなり。朝風涼しげに吹來りて蓮の葉の玉まろびて面白し。川邊の草を踏行けば朝露素足にこぼれて、心地よきこと言ふべくもあらず。

關東地方の震災について

補習科 椋木百合子

自然は偉大である。即ち私達は其の災害の前には唯ひれ伏すのみである。

大正十二年の九月一日！此日程呪はしい日はない、一瞬時まで何事もなかつた都が、正午頃の不意の激震の襲來に家屋は悉く水平に、又は上下に、激しく揺り初め、火は二十二ヶ所あまりから同時に發し、其上風さへ加りて、バラ／＼瓦の落る音や、隨所に起る凄じい爆發に、市民は極度の恐怖に襲れつ、親の名を叫ぶ子、子供の名を呼ぶ親、聞くがらに物凄く、さしも廣き都大路も家財道具を持出した老幼男女で忽ち身じろきも出來なくなり、しかも火は容赦なく後から／＼

昨日に變る日本晴にて空は青く澄みたり。青葉蔭に目覺めたる蟬の聲も耳新し。去にし年の夏の頃なんぞ追懷せられ、又來ん夏の事きもの思ひしのばれて、蟬の聲のしゆくあれかし。と常になく愛づる心も起りたり。青葉茂りたる林を朝日まばゆく照しぬ。ふも思ひつきて毎の傍に行かば、葉蔭より眞紅の實三つ四つ目に入りて眞にうれし。つと取りて見ればそれはルビーよりも勝りたり。畠に行きて果物の熟するを見るほどのしくうれしきはなかるべし。先日まで花と見ねし梨も丸き實と化したり。盛夏の候をも思ひやれば青き實も愛らし。

五月二十四日

庭の老松に張りたる蜘蛛の巢の朝日に光るも面白し花は豌豆に似、葉はコスモスに似たる草へ今花花盛りなり。紫、青、桃色、白等、色もとり／＼に優しく涼しげに夏めきたり。小川の水減じて、魚の影も見えず川岸の草は短く刈られたり。花園に蒔きたるコスモス日々草、百日草、千日草も勢よく、株分けしたるダリアは花をつけたるもあり。か弱き風の訪づるれば、吊鐘草の花一つ二つ淋しき音立て、ぞ散りにける。花

追かけて來るのであるから、此場合避難するといふ事は容易な業ではあかつたであらうと思はれる。老人病者は倒壊られ、若しくは悶死し、慘状目もあてらす。又は倒壊物の爲に、火焰の爲に、海嘯の爲に、生命を奪はれた人達、幸に生きながらへても身に迫れる飢餓と痛苦に堪へかね、川に、火に、身を投じて自殺した人々なき實に死屍累々たる様である。そが中に家を失ひ肉親の者を放れて、唯泣き叫ぶ幾多の罹災者、思ひ遣るさへ憐れである。

しかも此度の大地震は、長い年月を経てつくり上げた首都も、又國家として、社會として樞要な總ての機關も殆ど悉く破壊してしまつた。斯の如き大惨害も、偏に天慮とし、天は如何にしてかくまで惨酷なのであらう？と今更恨んでみたところでは仕方がない。それより私達の急務は、飢と寒さに泣く多くの罹災者の衣食の供給に努力することではあるまいか。しかし未だ通信も完全には行はれず、私達の此の焦慮と慰問を知らず術もなく、たゞ其の筋の人々によつて、いくらか罹災者に吾等の心を通じ得るのみである。

尙、此の大惨害が起るや、各新聞は其の全紙面をうづめて我が震災を報じてゐる。しかして近代稀れなる此大震災は如何程世界の耳目を聳動させたであらうか。既に英國の皇帝及び亞米利加の大統領からは、我が皇室に對せられ、鄭重な慰問の長電が寄せられた。又米國の如きは東洋艦隊の急派及赤十字社救護團の派遣など罹災民救濟の命を下し、支那も頻りに救濟事業につくしてくれてゐる。かゝる美德の世界的に行はれたることを深く感謝するのである。斯く未知の外國人できへ此の度の震災には多大の同情を寄せてゐるではないか。まして同じ君主をいたゞき、同じ領土に住む、我等同胞は、此の際あらん限りの救助をなし、舉國一致我が帝都の復舊に全力を注がなくてはならぬ。

關東地方の震災について

補習科 村橋 元子

過ぐる九月一日正午、突如として關東地方に未曾有の大震災が起つた。

かつては日本文化の源泉として、將又政治經濟の中心として、絢爛たる光彩を放ちつゝ、あつた帝都を始め

とし、我が國對外貿易の代表港として、飛躍的發展を持續しつゝ、あつた横濱、さては横須賀軍港、其の他小都に至るまで、今や宛然たる荒野と化し、昔日の面影だに止めぬ。

其の後櫛の齒を挽くが如くに達しつゝ、ある情報は、之れ悉く血と涙の記録であらざるは無く、慘狀暗澹魂氣の身に迫るものがある。併しながら、此の大震災が晴天白日の晝に起り、遭難者の數を少くした事は一に感謝せねばならない。若し夜半、暴風中に起つたならば、その結果は更に／＼凄じいものであつたらう。大火の影響は、今多くいふに及びぬ。幾百萬の市民が大火を背影として、東に西に、或は南に北に逃げ行く慘憺たる有様は、一見して流涕さすであらう。此の凄壯の光景には、如何を誇張の筆も及ばないであらう。

斯る大惨事に際して、此等罹災民に對し、大和民族特有の情操、義氣は、立所に光彩を放ち、金錢、物資の義捐せられるもの引きも切らず、罹災地の食料は、既に充分であるとの聲をきいて居る。

畏くも聖上陛下におかせられては、御内帑金一千万圓を御下賜下され、又直ちに緊急勅令を御發布にあり

攝政殿下には焦土の東京を御巡視遊され、御涙を注がせ給ひて

「一日も早く此の窮狀を救へ」宣はれたる承はる。眞に下人民たる我々は、感激に堪へぬ次第である。

更に又、各皇族方妃殿下には、破損した宮居に住ませられ、御食事も減ぜられて、一意専心、罹災者の冬着をお裁縫あされらるる事は誠に畏れ多く、恐懼措く所を知らぬ。

思ふに、斯様な大不幸大災禍は、我が歴史上にては嘗て見ぬ處で、我々は何の辭を以て災害地方同胞の悲運を慰めてよいかを知らないと共に、我が帝國首府の禍害は、直ちに又國家の禍害であるから、顧みて我が國民の不幸を深く悲しまなければならぬ。

けれども我等は今徒らに驚心駭目して、災禍の慘のみを語つて周章すべき時でない。須く此の善後策を講ぜねばならぬ。

歐洲戰爭を遠方に眺めながら、何時の間にか腹を膨らせた日本、何か知らず有頂天の輕浮そのものを追つてゐた日本、それが今回の様な災害、古い言葉でいふ、天の大鐵槌が下されたのである。そして兎も角

國民はそれがため、大きな高い犠牲を拂はされたのは固より非常なものである。併しこれが爲め國民の偉大な精神の力が突如として現はれた事は此の上もなく喜びである。此の力こそ私達の心の中に竊かに潜んで居たもので、何かの機會に、どうかして、現したいと願つてゐたのに相違ない。

若しも今度の様な事がなく、あのまゝで進んだならば、日本人の頭中の空間は、更に／＼大きくなり、心中に潜んでゐた偉大な力も影を收めて、終りにはしやうがないものにあつたかも知れない。それが突然にあらたな天災に遭遇して、我々の頭の中を全部曝け出して、働かねばならぬ破目に立ち入り、奮然全力を上げる事になつたのである。勇氣と忍耐を以て勤勉と節約を行ひ、臥薪嘗膽の標語を以て猛進しければならぬ。國民に此の心だにあれば、夫れの復舊事業の様事は必ず成功するであらう。國民は國民の名譽にかけても、之を行はなくてはならぬ。眞に我等は災禍と戦ふの大試練を加へられたのである。

修學旅行の記

本四 藤井 藤江

(11号)

五月八日 火曜日 晴天

「藤江さん！藤江さん！早くお起きなさい。遅くなりますよ！」母上の聲に夢破られて、ふつと眼を開いた瞬間、今日は修學旅行の日だといふ事が稲妻の様に胸裡に閃いて消れた。飛び起きて時計を見れば、正に午前三時！直ちに手水せま欲し、外に出れば、冷かな空の空気が水の様に流れて、遠くまた、く青い星は今日の晴天を豫告するやうだ。心はおどる、おどる、まだ見ぬ彼方の山へ、里へ……。こはいへ、母一人、子一人の身、数日の別れにもいひ知れぬ淋しい何物か、あつた。私はつとめて快活に、と努力しつ、仕度をした。丁度着物を着てゐる時、母上と御一緒の藤江さん、富田さんが誘ひに來られたので、仕度も

そこへ、家を出た。「では、行つて参ります。さやうなら。」

どいつてふり返つた時、私の瞳には門の前にたゞ一人佇んで私を見送つてをられる母上の姿がうつつた。私は何となく胸の迫るのを覺わした。それは後で氣がついた事だつたが昨夜から幾度となく忘れぬ様に注意して下すつた梅茶を飲む事を忘れてゐた。母上の折角の御親切に對してほんごうに濟まぬ事をしたと心密かに詫言ひした。校門をくぐる時、玄關の明るい電燈の輝く下には、皆さんの初旅の喜びに満ちた御顔が浮んでゐた。その頃、淡い悲しみの心はいつかしら煙の様に消えて、私は楽しい友と語り合つてゐた。寄宿舎を覗いて見ると、皆さんは御目覺めになつてゐたので、暫くの別れをMさんに告げた。時は間もなく玄關前に整列した。時は

丁度午前四時。東天遙かに見ね出した曉の雲は彌が上にも心を嘯る中野先生からの御懇切な御訓話を胸に刻んで、いそぐと校門を出發したのは四時五十分。夜の色の刻一刻と薄れ行く東の空には、光淡い曉の月が旅立つ私達を見送るかの如く浮んでゐた。唯々、残念であらなかつたのはお父様もお慕ひする校長先生に御別れを告げる事の出来なかつたのミ、池上先生に憎らしい病魔が見舞つて、折角の旅行に御供する事の出来なかつたとの二つであつた。私は只管に池上先生の御快癒の寸時も早からん事をお祈りした。引率された先生方は、關田、伊藤、安富、世良の四先生であつた。お見送り下すつた森脇、野田兩先生に椿西小學校の前でお別れして更に前へ、と歩を運ばす。萩の朝に五日間の別れを告げてふり返る涙松のあたり、朝霧はま

すく深くふつて、微風の戦々毎に松の梢からはらりと零る、餘滴、幾度かひやりと冷たく襟元に泌みる。足には些かの疲れも覺えず、口のみは絶間なく動かして歩んだ。暗く無氣味な隧道を通つた時、思はずぬかるみの中に踏み込んで袴に大分、手を散らした。舊道路とか言ふ急な坂路を越ねると眼界は早くも開けて、山里を廻る緑の色は一段々々々鮮かになつて行く。

かねてから困難だと聞いてゐる一升谷へいよいよさしかゝる前、美しい黄色の躑躅一株、小高い丘に咲き誇つてゐたのが目に入る。坂は、はじめや、緩かであつたけれど、登つて行く一足毎に險惡の度を加へて行つた。深い、海底の様な濃い朝霧の中を辿る事、何とも形容出來ないその壓しつけられる様な暑さ、苦しさ！生ぬるい汗は拭いても拭いても流れ

出て、いましがたまでしやべりながら歩んでゐた元氣は何處へやら山間を流る、溪流、展開されて行く美しい風景、如何なる歎賞の言葉も惜しまれなかつたであらうけれど、私達にはそれ等すべては物の數でもあかつた。たゞ、一歩も早くこの坂が越ねたいばかり。足元ばかりを凝視して黙々として歩んだ。

ふと、眼と眼がかち合ふ。「私、ほんごうに苦しい！あなたは何？」

一方の眼が答へる。「私も！！ほんごうに死にさう。」
又一方の眼がいつ。「でも、もう少し。しつかりしませうね。」
「え、！」一方が淋しくほ、笑んで肯く。後は沈黙！
漸くの思ひで坂を越し、やつと平坦な道に出ると、思はず長吐息をした。坂下の名もなつかしい

櫻の茶屋で暫く休む。茶屋は折悪しく閉ぢてゐたけれど、縁に腰を掛けて輝かしい前山の緑の姿に見入りつゝ、憩つた。向ふの谷間からは樂しげな小鳥の聲がしめやかに濺ぐ雨の音の様に、絶間なしにこつかしい調べを繰り返してゐた。やがて、安富先生の御後について出掛けた。あれだけ深かつた朝霧はいつかすつかり影をひそめて空は青く、果しなく廣がつてゐた。私は再び和やかな氣分になつて縁に輝く初夏の道をゴム鞆の様に弾ねて歩いた。左手に開ゆる快い清水のせ、らぎ！私はその音を聞きながら、徳富先生の「思ひ出の記」の初めの處——故郷九州の或る場所の景色が忍ばれてならなかつた。私は何故かあの「思ひ出の記」のはじめを忘れる事が出來ない。「潺湲たる音を發して流る、小川……。」それから後はさうして思ひ出せぬいけれど。

平らかな道が暫く続いた。果しなく澄み切つた皁月の空！若葉より洩る、緑の光！谷間にせ、らぐ溪流の小唄！紫雲が舞ひ下つたのではないかと疑はれるまでに揺らいで咲く紫のゆかりの藤の花！それ等の一つ／＼が己に詩であり、歌であつた。安富先生の絶間なくベンを走らせてお出で遊ばすのを見るに、つく／＼自分の鈍あのが悲しかつた。あまりゆつくりしてゐたので、おしまひにお出での關田先生と御一緒にあつた。行つても山、行つても山、そろ／＼山に退屈し出した頃、道邊に標してある里数はだん／＼減じて漸く佐々並に着いた。尋常小學校で晝飯を食し、すつかり軽くなつた荷物に疲れた元氣を恢復しつゝ、再び山口へ三歩み出した。森の蔭からは初夏らしい蟬の聲が焼けつく様に聞えた。やつと一の坂の麓に辿り着いた頃いつしか私は遅れ

られた最後の友数人の中に交つてゐた。麓には一軒の小さな茅屋があつた。そしてその家の前には二人の小さい可愛い少女が二人——さう、姉の方は六才、妹の方は四才位でもあつたらうか——仲よく小石を積んだり、崩したりしちがら遊んでゐた。しばらくの間木蔭の切株に腰をかけて、ぢつと眺めてゐた私の瞳には、それがこよなく可憐らしいものに寫つた。その中、一番おしまひの伊藤先生安富先生方がお出たので、私達数人は又先生と御一緒に行き始めた。腕々たる羊腸の山徑を辿る事里餘登れば登る程、石ころの多い險阻な坂になつて体はいよいよ、疲れ珠す汗は流るゝに任せ、一向は上へ上へと登つて行つた。山中には冷い水の湧き出る所で潤いた喉を濕す。幾度も／＼休んで、やつと山頂に達し得た時の喜び、それから下り坂になつて山口町を瞰下

した時の喜び、それは實にいふべき言葉を知らない。私達は狂喜して疲労も全く忘れた様に、さしもの急坂をも一氣に驅り下りた。山口の緑は萩の緑よりすつと柔かで、のび／＼とした感じを與へた。萩の山の縁は、固苦しい様を氣がしたが、山口の山の縁は何かしら心がふんわりする伸びやかさを持つてゐる様を氣がした。或はそれは私の思ひなしかも知れないが、長い間憧憬れてゐた吉敷の里！なつかしんでゐた吉敷の里へ、いよいよ来たのかと思つた時、私はいひ知れぬときめきを感じた。伊藤先生の「五重塔を見て行きませう」と仰せらるゝのに従つて瑠璃光寺に立寄る。名のみ聞いてゆかしく思つてゐた瑠璃光寺、それは今眼前にあるのかと思ふと何だか夢の様な氣がして、涙が薄く臉に沁むのだつた。五重の塔は落日の光にけ高く輝

いてゐた。

あはれ、美しくも壯嚴なる憧憬の地の夕映よ！私はしばし恍惚として見入つた。

私達が旅館に着いた時、先着の皆さんは己にお湯から上つて居られた。正に午後四時頃。初めて御湯屋に行き、食事を済ます。疲れを癒して後、I先生、Y先生、祖母様、母上、Mさん、お友達などにお便りを書く。

夕方六時頃に旅館の前に整列、先づ八坂神社に詣でて、赤十字社、山口支部病院、香山園、五重塔、野田神社、豊榮神社などを見學し或は参拜した。いづれも新緑滴るばかり。私は何かしら偉大な或る物に抱かれた様を氣がした。後日先生が「山口はい、でせう、山口は偉人の住むべき地ですもの」と仰せられたのもまこと、思つた。後河原の美しかつた事。柔かな柳の緑、せ、らぐ清水、それにもら

／＼と映る電燈の光、兩側に並んだ明るい店、それ等の間を泳ぐ様に行き交ふ人々の群、ほんとうに夜の河原はすが／＼しい感を與へて呉れた。

珍らしさに騒いでをられた皆さんの聲も次第に静かになつて、間もなくあたりにはすや／＼と微かな寢息すら聞えて來た。

騒がしく往來してゐた學生の足音もやがて絶え、ひつそりとして死の様な沈黙が襲つた時、その静寂を破らぬ位のしめやかな三絃の音が幽かに漂うて來た。じつと耳を傾ける私の頬に故知らぬ一筋の涙が傳つた。

いつかしら私も深い夢路に誘はれてゐた。

五月九日 水曜日 晴天
朝疾く目醒む。洗面を終つておほしまに寄れば、外はまだほの暗く遠い、空には星が明滅してゐた旅の朝の第二日、朝まだき、藤田

さんと二人八坂神社の境内を散歩する。露しどきに濡れた芝草を歩み行く心の爽かさ。すが／＼しい空氣の中で社頭に額づく。拍手は冴れた響を立てた。げに壯嚴なる社頭の曉。午前六時三十分旅館出發。縣廳に向ふ、右手に新緑の雫を湛めた濠を望んで進む。中野先生と御約束の榛の木をよく注意して見る。

縣廳は小高い丘の上にあつた。丘の芝生にきらめく朝露の美しさ。崗岩で作られた露臺より入り、知事室、事務室、議事堂等を見學した。議事堂は帝國議會場の模倣で、かで、スチームの設備などすべてよく備つてゐた。

縣廳は明治四十五年新築に着手せられ、大正五年十一月落成式を舉げられた由。當時、工費四十一萬餘圓、時價に換算すれば約二百萬圓に上るさか。縣廳を出た一行は痛い足を引す

りながら、烈日の下を山口教育博
物館に急ぐ。館内の見學を終つた
私は、バラソルをかしけて芝生に
憩ひつゝ、じつと脚下を凝視した
もう一步も運ばれさうにはなかつ
た。私は萩を思つた故郷の母上を
思ひ、師の君を思つた。ふつと冷
いものが眼に泌みかけたのを慌て
、こすつた。まあ、何といふ弱い
お前の心なのか。強くあれ、強く
！と自らを鞭打つたけさ……
その時、何故か私の心は一寸で
も突けば倒れもし兼ねまい程脆く
なつてゐた。關田先生が呼び遊
したので御傍に行く。先生は昨日
私の遅れたのを大變御心配遊した
由、慈愛に溢るゝ先生の御言葉に
私は深く感謝した。けれど一言で
も口を開くといつたら涙が溢れ
さうるので、たゞ黙したま、心の
底で御心配をかけたお詫びを申し
上げた。

龜山公園は希望者だけといふの

であつたけれど、折角来たものを
と思つて行く方に加はる。公園に
登れば、毛利忠正公、忠愛公をは
じめ、元藩公、元周公、元純公、
吉川經幹公の六巨像が山口の町を
護るが如く立つてゐた。こゝでは
山口町全景一瞬の中に收められる
名からしてゆかしい小京都の感深
い大殿大路、堅小路の井然と
した道路も見られた。静かな山口
！なつかしい山口！「やつぱり山
口は偉人の住むべき地だ。私は二
度心に繰り返した。學校の多いの
がしきりに目につく。公園のすぐ
下には諸學校の共同運動場があつ
た。折から業間と見えて遊んでゐた
中學生の姿が小さい人形の様に見
えて可笑しかった。

此處を去つて停車場に急ぐ。そ
の頃から私は苦しみが強くなつて
来た。一二等の待合室で暫く憩ふ
やがて汽車は軋りつゝ、靜かにブラ
ットホームに入つた。汽車に對し
てあまりに想像の偉大だつた私は
裏切られた様を淋しさを感じた。
マツチ箱を大きくした様なものだ
——生意氣だか知らないけれどそ
んな事すら考へてゐた。
いよいよ私達の乗る汽車が来た
心を躍らせながら飛び見る。初め
て乗つた珍らしさに私はじつと眼
を見張る。山も木も家も人も、巨
人か何かにか攔んで後に投げらるゝ
様にぎんぐ見ねなくあつてしま
ふ。その中苦しさがいよいよ加つ
たので世良先生にお藥を戴く。
汽車の窓から湯田の刑務所を見
る。安富先生のお宅も教はつた。
本線に乗り替へた時は午後零時
五十三分。氣分の勝れぬため御辨
當も食せず、うつらうつらと眠つ
てゐたまゝ、わづかに伊藤先生
に教つた鹽田と澤山を隧道のあつ
たのを幽かに感じたばかりであつ
た。驛に來る毎に多くの人が降り
又乗る。前に腰かけた人、私達に

問ひを發した。
「あなた方はどちらの學校です
か。」
「萩です。」と答へると「ほうで
は山口まで歩んだのですね随分あ
るから苦しかつたでせう。」と慰撫
して下さる。私それがほんどうに
嬉しかつた。その人は徳山下下車
された。「では御大事に。」といふ言
葉を残して。
少しどろ／＼として眼を開くと
前には又人の好ささうな爺さんが
乗つてをられる。その人は再び問
はれる。「あなた方はどちらですか
」再び「萩です。」と答へると驚き
の目を圓くされる。萩の事をよく
御存じの方と見えて、「今年は橙は
いかゞでした？毎年澤山落ちます
が。」等と仔細らしく首をかしげて
をられた。苦しくなつたので又う
つらうつらとさする。たん！私の肩
をのする方があるので、眼を開い
て見るとさつきの人とは全く違ふ

若い男の人、
「あなた方は宮島へ行くんでせ
う？」と問はれたので、「え、」と
いふと「ちや向ふに見ゆるのが嚴
島です。赤い鳥居があるでせう。
よく御覽なさい。」と親切にいつて
下さつたけれど私はよく見る氣に
あれなかつた。もう苦しくて／＼
遂に宮島驛に着した。
頭が……足が……ふら／＼
する。胸も少し悪かつたけれど
遅れてはあらぬので大急ぎで連
絡船に乗る。波靜かな波上を船は
滑る様に進んだ。もう着いたのか
と思はる、迄に早かつた。丁度午
後三時三十分。疲れ切つた踵に
も嚴島の麗はしきはよく映つた。
龜福旅館でしばらく休憩する。
その時、脚は全く棒そのものだつ
たけれど、無理に勇氣を振り起
して伊都岐島神社に詣つべく宿屋
前に整列する。
初夏の宮島海峡碧藍と、丹塗の

柱と、木々の若葉の相映する伊都
岐島神社の風光を賞しつゝ、參拜す
る。案内者の立板に水を流す様な
流暢な説明に心を躍らせつゝ、歩む
この丹塗の百八廻廊にひた／＼と
潮が満ちて、さながらの龍の宮現
はる、さといふ陰曆幾日かの夜はい
かに？忍ぶだけゆかしい感じがす
る。
昨年、畏くも皇后陛下が行啓あ
そばされた時、鳩を愛でさせ給ひ
つゝ、玉歩を運ばせられたと承る
三笠瀆大燈籠の突角まで出て、落
日を賞し、皇后陛下行啓の當時を
追想する。
紅葉谷に行く途中、燈籠の蔭に
可愛い、小鹿三匹を見た。人をつ
かしげな神鹿の瞳、私は抱き上げ
て頬すりしたい氣がした。
紅葉谷へ行つた頃、島は已に紫
の帳に蔽れて、青葉洩れて遠く近
く明滅する燈火のうつくしさ。ほ
の闊い青葉の蔭と五重塔が嚴かに

聳ねてゐた。蒼い朦朧の漂ふ紅葉谷の溪流は眞に天下の絶勝、日本三景の一と呼ばれる、も宜るかなと思つた。

當夜は大阪の某富豪が總燈明を獻するといふ案内者の話があつたが、遂に行はれぬいで残念だつた輝く龍宮の夜はどんなにか綺麗だつた事だらう？

宿に歸つたのは大分遅かつたので、食事もお湯もそこ／＼にして散歩に出かける。びつたりと兩側に櫛比した宮島の店の美しい事。ときめく心にいろ／＼と御土産を求めて歸つたのは午後十時過ぎでもあつたらう。

おほしまに寄つた私は、芳水先生の宮島の詩を幾度も低く吟んだ。

あ、少女子よ燈籠に
赤き灯かけを入れよかし
心の鉦を打ちならし
うたひ明さん旅の身は――

今夜も亦、さうしても眠られなかつた。思へば今日の苦しみの数々皆さんの安らかなる寢息の洩れる頃私はY先生と母上に静かにペンを走らせた。その中堪へられぬ迄の眠りが襲つて來たのでペンを置いて寝む。

五月十日 木曜日 晴天

や、まどろんだかと思へばもう朝、今朝は何故かしら眠くて眠くてならぬかつた。先生にせき立てられて洗顔を終へると、欄干に寄る。神祕の黎明の空には、ただ一つ星の瞬きのみ淋しく、美しい夢の都の燈影は涙に潤んだ様に輝いて居た。宿を出るとすぐ昨夜の葉書を投函する。電燈の光の淡れ行くにつれて、私達のいよ／＼宮島の地に別れる時も迫つて來た。爽やかな風、心地よい海邊に連絡船の出を待つ數分、向ふの線路を下りの列車が二臺、白煙を吐きつゝ、朝霧の中に勇ましく消えて行

くのが見えた。

連絡船が嚴島を發したのは、午前五時二十五分。連絡船で學校に通ふらしい多くの中學生、女學生と乗り出した。船は次第々々に宮島を遠ざかつて行く。細り行く宮島の地をふり返る時、さすがに名残惜しかつた。

宮島驛より再び汽車で廣島に着し下車して吳行きに乗り變へた。今日も少し気分が悪かつたけれど、軽い眠りを催したのでよかつた。煤煙の地、吳驛に着した時は、何となく汚い感に捕はれた。埃っぽい道を歩んで、先づ海軍集會所に行き荷物を置く。それから病院に着いたのは午前九時頃だつた。此處で教舎、酒保、理髮室、藥品倉庫、兵舎、浴室、賄所、食糧倉庫、洗濯所、肺結核病舎、標本室、最新の十二病舎、内科及び各科を見學した。更に階上の貴賓室を見學した。一昨年伏見宮殿下が御成り

遊ばしたといふ。こゝより軍港を一瞥し、練兵場を望んだ。この時大變親切に私達を案内し、導いて下さつた一人の海軍中尉があつた後に承つた事であるが、この方は萩出身で、しかも學校の向隣の小谷さんであつた。何から何まで丁寧によく説明して下さつた。

私達は又、丹頂の鶴や、愛嬌者の猿や、はる／＼北海道から來た熊や、その他名を知らぬ多くの小鳥を見せて戴く。聞けば、それ等は皆淋しい病兵の心を慰める爲に飼養してあるとか。この病院の中に、こんな優しい暖い心が流れてゐるかと思へば、何だか涙ぐましい様な嬉しさを感ずのたつた。ちら／＼と眩しい陽ざしをバラソルに受けつゝ、海兵團に行く。練兵場からは、喇叭、號令の聲がしきりに響いて、十人一組の幾組もの白服の水兵さん達が教練中だつた。大きい葉櫻の蔭で暫く憩つ

た後、其處で某士官の御話を承るときはきした口調でその人は次の様な事を語つた。

「古來から日本の女性は大いに海軍に關係がある。ましてこれから第二の國民を作らねばならない皆さんはいつまでも從來の深窓の少女であつてはならない。大いに目覺めたる婦人となる様に。」

吳港には多數の船舶が入港してゐた。廢艦の運命にある攝津、伊吹も交つてゐた。その他多摩もあつた。親切な一人の水兵さんに案内せられて、伊勢艦を見學した。折から通りか、れた士官の或る方はいはれた。

「もし今、戦が開かれたらしましても、この伊勢艦等は少しも準備もいらず、直ちに出動する事が出来るのです。兵器も磨いてあり秩序も整然とたつて居ります。戦開き平時に於て、準備に於ては些かの變りもありません」と。蓋し

それは普通の事ではあらう。けれども私はそれを聞いて深く感ずる所があつた。歸りに海兵團に寄る。時間の遅かつたため、朝のお約束の軍樂隊の合奏を聞く事の出來なかつたのは残念であつた。恰も正午に近かつたので、下士卒集會所で晝飯を食した。

吳を出發して午後二時三十分頃廣島驛に着した。山口に比して賑やかではあつたが、私は直觀的によい感じを持ち得なかつた。狭く、狭い丸一旅宿で暫く休み足を引きずりながら先づ大本營へ向つた。廣場を左手に見て進む。此處には一寸白藤の様な、また卵の花の様な花をつけた大きい緑の葉の茂つた木が澤山あつた。かつかしい木。

大本營の周圍には濠が掘り廻らされてあつた。拜觀が許さるゝ、前々先づ某將校より、畏くも、先帝の本營を定められし頃の概要、又今

後我等の行くべき道について御訓示を承つた。後その室々を拜見するに、畏れ多くもいと御質素、軍議室等も甚だ狭く、こんな處でお暮し遊ばされたかと思はれて感涙に咽んだ。

日清戦争當時の戦利品を見て後第五師團の歩兵の炊事室、兵舎などを見學した。一兵舎の人数は二十人許りで、左右の戸棚には各人の衣服、本箱等が並べられ、柵の下には靴、靴下などが下けてあつた。その整然たるさま、私はひそかに我が家の書齋を思ひ出して、赤面せざるを得なかつた。

後、大砲の實射を見學する。酒保にも行つた。休憩室で暫く休む中、ほつり／＼と降つてゐた雨の勢が次第に猛烈になつて來たので電車に乗る。あまり車内の人数が多かったので、私は車掌臺に立つてゐた。降りしきる雨は着物を絞るまでしど／＼に濡らした。

雨に洗れた廣島の町は大變すが／＼しかつた。しめやかに滂々雨の中を、傘をさして御湯に行くなど、捨てがたい趣があつた。春なればこそ、旅なればこそ。ポツン！ポツン！絶間なくひびく雨だれののかしい音！

夜になつて、今日病院で御世話になつた小谷さんが瀟洒たる春廣服で來られ、種々有益な面白い御話をして歸られた。

今夜は雨のため市中へは出ず、室内で友と「知慧袋」等して興じた。

しめやかに降りつゞく春雨の子守歌は、いつしか私の魂を楽しい夢の國に運んだ。

五月十一日 金曜日 晴天
朝まだき、ブラットホームから吐き出されて來る夥しい學生の數に驚く。

午前八時頃、驛前から電車で御幸橋まで行く。のろい電車で幾度

も停電した。御幸橋で下りて、東の方被服廠へ行く。其處で暫く休んで後、内部を見學する事になつた。目まぐるしく廻轉する機械の音の騒々しさ！その中で多くの婦人達は忙しく立働いてゐた。軍服を裁つ人、縫ふ人、鍔をかける人、帽子を拵へる人、私達の陣には活動、そのみが展開して行くのだった。其處には怠慢の影だにみかつた。只あるものは活動の世界だけだつた。婦人達數百名の本々々の指先も、瞬時の静止なく動いてゐた。私は此處で、つくづく物理化學萬能の偉大さを感じた。被服廠を出て物産陳列場に行く。此處で不足の御土産を買ひ足した。少し時間かかつたので、急ぎ足に淺野泉邸を訪ふ。

泉邸の少し手前で、五十崎先生に御目にかゝる。お逢ひしたいし、たいと思つてゐた先生！先生はやつぱりお若くお優しいお顔には元

氣が溢れて、ちつとも以前とお變りになつてはをられなかつた。

「先生！」一言いふと聲が潤んだ。堪へよう／＼と齒をかむ心の下から、ほろ／＼と涙が頬をすべつた。雅致に富む廣い泉邸の園内には躑躅の美しい盛りだつた。緑濃い木の間には二羽の丹頂の鶴が遊んでゐた。人数の多いのに驚いたか、鶴はけた、ましいい聲をあけてしきりに鳴いた。「鶴の一聲」といふけれ私達は澤山聞く事が出來た。

泉邸を出て後、暫く五十崎先生とお話しして行く。やがてお別れする時が來た。復、何時お眼にかゝる時がある事やら……。

午前十一時過ぎ、廣島を發した列車は故郷へと向つた。私はちつとも疲れなかつた。何故かしら無暗と愉快であつた。來る時あんなに疲れたのが何だか不思議な氣がした。
汽車は驛地に西へ西へと走る。

數多の驛を過ぎ、緑の野の中を走り、躑躅咲く山、岩石突兀たる山間をも通過した。私達は瀬戸内海の波靜かに、白帆の點々として浮んでゐるのを左に見、聲を限りに歌ひさめいた。虹が濱を通る頃夕陽は美しく車中を射る。徳山を過ぎる頃から一日の最後を彩る華かな夕の雲の色は次第に薄れた。

されど、夜の景色はまた一人の美しさであつた。さながらパノラマの展開でも見る様氣がして……小郡に着く頃はもう眠くつて眠くつてならあかつたので、遂に車中で夢の國をさまよふ。山口驛に下車した時、私は何故か萩にでも歸つた様な氣がした。大分重くなつた荷物を提げて、無言のまま、で中川旅館に急ぐ。

夜は友達に楽しい明日の日の事を語り合ひつ、床に就いた。

五月十二日 土曜日 晴天
思ひ出多い山口の地といよ／＼

さまみらした。さらば、山口の山よ、川よ！我等永久のなつかしき思ひ出の地。

長門峽驛から下りて絶勝を探つた。首夏の若葉、青葉が、音立て、流る、清水に映つて美しさはいふにいはれない。

進むに随つて、兩側の山は次第に迫り、壁の中を行くの感があつた。山窮まるかと思へば又開き、開くかと思へば又窮まる。一曲は一曲より奇なる勝を呈し、時々頭上を仰いでは今にも落ちか、らうとする奇岩に膽を寒からしめた。

或は瀑布となり、或は早瀬となり、或は深淵となり、鋭く緩く岩のちすま、になる水の愛らしさ。けれども、それ等の絶景もゆる／＼心をどめて見る事は出來なかつた。足下を見つめて行くのがもう一生懸命！
同じ様な景色が幾度も／＼繰り返された。この日長門峽の勝を探

つたのは私達だけではなく、中學校、小學校の団体もあつたので大變賑かだつた。湯の瀬の萬碧樓で暫く休息する。可味しくお辨當を食し、サイダーを飲んだ。岩に激する溪流をじつとながめつゝ、其處を出て再び長門峽の絶壁、奇峰を賞しながら下る。山水を盛め、水石に迫り、奇巖峭壁奔流激湍縦横に紆曲して山形岩容の千變萬化名狀する事が出来なかつた。切籠切窓の峻峯、巨大なる夫婦岩、何れも面白い。深緑と清流を右にして困難な山路を行くと、やがて高瀬に出た。小學校で休みながら佐々連洞探勝の我が校三年生の方々を待つ。あまり歸りが遅いので先に川舟に乗る。その時丁度三年生の方が歸つて來られた。あつかしの情を禁じ得なかつた。そして皆機方とや、遅れてお着き遊した先生方のお顔を拜した時、私の心は喜びに躍つた。あ、先生

！と喉まで出た聲を思はず呑んだ十八艘の舟はいよ／＼阿武川下りをする事にあつた。前になりつ後になりつして舟は下つた。互に聲を合せて歌等吟じた時の快よさ樂さ。兩岸には山躑躅が美しく咲いてゐた。一の瀬を下つた時の壯快であつた事、ほんとうに面白かつた。數人の友と太鼓灣の處より上陸してなつかしい故郷の地を踏んだ。喜び勇んで我が家に歸つて見ると、母上は私を迎へに出られたと見えて、居られるかつたので失望した。藤田さんをお送りして歩いて橋本の方へ行きかけた。無事なといふ事を少しも早く母上にお知らせしたい爲に。少し行くと、母上の急いで歸られるのにはつたり出合つた。母上は無事に歸つた事を非常にお喜びになつた。私は家に歸つて座つて居ても、家が動く様を氣がしてならなかつ

た。電車や汽車や川舟に乗つてゐる様な氣がして。あ、待ちに待つてゐた修學旅行も無事に濟んだ。學生時代の最初の、そして最後の修學旅行、願れば四泊五日間、一同無事であつた事は第一に喜ぶべき事だと思ふ。静かにつく／＼と、歩んだ市、町について考へて見るに、物質的に豊になればなる程精神的——人情の美は反對に次第に薄らいで行くもの、様に感じる。私はそれをこの上なく佗しい事に思ふ。物質的に豊むのは勿論い、事だらう。しかし私達は人間としてこの美しい人情を忘れてはならぬ。私達は第一に優しい心の持主である事を切に望む。旅行中、最も深く感じたのはその事であつた。總じて短日間に多くの智識を收得したのは喜ばしい事であつた。筆を擱くに臨んで御引率遊された諸先生の御配慮を深謝する。

詩

の ぞ か 本一梅 堀上重

廣いたんほのうね／＼こした細道。
青々とした一面の麥畑。
少女の唇の様な燃ゆる如きれんげ草。
そしてその上を飛びまはる蝶。
何と云ふ氣持のよい景色だらう。
ふり上げる度に光る鍬のはさき
何から何までこゝ調和よく配合されて居るのだらう。
私はよくこののどかさにあぐさめられる。
全く自然に感謝する外はない。
あ、美しく且のどけき春の世界よ、
永遠に我心を慰めてくれ。

病める友 本一梅 竹谷 春子
友は病の床にあり

時々刻々と衰へ行く
その姿はあはれなり
寂しさを面にうかべて
私はかなしくて仕方が無い
こいつて涙をこぼされる
友はあ、して床に就いて
をられるけれど仕方が無い
あ、友を如何にして慰めよう
と私は心に問うたけれど
わから無い

秋の夜 本一梅 能美 春子

はや黄昏の影寄せぬ
こゝろつめたき秋風は
我がおくれ毛を掠め行く
しぐれはつちに消れたれど
葉末に残る眞珠玉
墨繪ににたる大空に
高くかゝれる銀の月
平和のちまた隈もなく

光り輝く秋の夜や
夕食後の散歩にて

橋のてすりにより見れば
月影水にながれつつ

小さき波紋のゆらゆらと
浮きて漂ふ美しさ

疎らになりし人のかげ
我も家路に足に向く

折しも夜の暗の中に
ひびく寂しき琴の音の

やがては消ね行く
月の世界に

秋 月

本一梅 末岡 花子

小波ゆらぐ阿武の邊に
立ちて臨めば秋水の
金波銀波にうねりつゝ
紫紺の海に流れゆく。

二

机によりてうち見れば
雲なき空に月清し

日々に形は變れども
光の色ぞ變らざる。

三

ふけゆく夜はしづけて
星の光も此處彼處

敷ふるばかりの大きに
月は限なくさわわたる。

四

立ちて臨めばなる潮に
寂しき心にありゆけば

稻のそよぎも秋聲も
いと心にしみわたる。

風

本二菊 大谷 ハツ

秋更けて
葉衣ぬぎし
掃を逆にした様な木々よ
木々は樂器のやうだ

風が奏でる

自然が奏でる樂器の様だ……
貧しい娘貧しい娘はあこがれる

風の奏でる樂器に……
幻想の樂器に……

あこがれます
貧しい娘は

父母を思ひて

本二梅 坂 恭 子

雨は降る 心は沈む この夜更け、
父母こひしさに 一人涙す、

母の手紙を讀みて
情け深き 母の手紙を しみじみと

讀みては泣きぬ 抱きては泣く
父母と別し我

悲しさを胸にひめてぞ只一人
夕暮の風つめたき道をたぎれば

一人ほつちの我が淋しさ
ひし／＼と胸にせまりて

いつも涙ぐむ川邊の私
星また、きし夕暮の丘に

父母なつかしさに一人さまよふ
我が憂の胸にひびく憂の歌

星の光

夜のまばりは静に垂れた
月は空のかなたに沈んでしまつた。

廣漠たる無限の空に唯光のみが
きら／＼と光つてゐる。

かゝたに赤く光るのは愛の星かしら、
眞上に輝くのは智の星かしら

夜の空に輝やいてゐるのを見れば、
いつしか力みなざる、
力の星よ鋭き星よ！

夕の阿武川

大田 温 子

1 空に瞬く星ほそく
私かに夜の帳より
去年の此頃つく／＼と
面影山をてらす頃
くれ行く阿武の岸にいで
胸に浮べて悲しみぬ

希望幼く美しき
聲清らかに若き名を
我唯一人遠近を
四邊寂しき夕まぐれ

2 大聖院の入相の

なほた、すみて河水を
去年の此頃つくく
彼方に赤き夕づ、を
淋しく仰ぎ見入る時

いと美しくや、近く

川邊に一人立つ我に

3 あはれ夕の阿武の川

瀬の彼方にぞ消逝きて
行方はるかに偲ぶ時
水面静かに下りゆく
夢まほろしの騒ぐま、

4 人來しけはひ誰ぞやとて

口よりもる、喜びの
きらめく星の下にして
はてしも知らず湧きいでぬ

眞紅な慈愛ある姿で
喉をうるほした小雀は
しづかに朝日を拜んだ

今日一日を快くたのしく過される様に
ゆたかなかれの胸毛
柔い朝風にそよいで居る

鐘の音

眞紅な太陽が西の山に沈んだ
古寺のかねの音がひびき渡る
淋しくしづかに
遠い／＼はてまでも
お、何と云ふ淋しい夕暮だらう
お、淋しくかねの音がなる
はてしない夕の空をどこまでも
ひびきゆくかねの音よ

浮べる月

本 四 藤本マサ子

彼方の空にある月が
こつそり覗いて居りました
彼方の御空に照る月も

その廣ごりの大いさにて

時 雨

本科四 三好 榮子

時雨また横ぎりぬ。
軒燈の光を浴びて
水たまり一しきりさゞめき、

彼方

黒木立を通して
教會の屋根は蒼白く
闇に光る。
時雨あわだ、しく去りぬ。

一 題

本科四 吉田 初江

小 雀

小雀は清い小川のほとりに来て
甘露の水を掬ひ
チ、チ、チと啼きながら空を仰いだ
冷やい朝の清水を
一口又一口掬ふ
東の山の端に朝日は昇つた

夜更けて風も眠る時
たつた一人で浮いてます
風が吹くとも吹くがまま

それでも月は浮いてます
波が起れば起るまま

夕 の 風

本科四 齋藤 元子

夕の風が
ほのかに私の想ひを運ぶ
あ、それは
永遠の淋しさへ……………
詩のやうな夕よ
月は青褪めてすゝり泣き
星は悲しい吐息をつく
それにもまして哀しい
地上の秋……………
お、夕の風が
はら／＼と
私の想ひを

淋しい永遠の岸に運ぶ

學びやの窓

實 一 伊藤 コト

學びやの窓は明るい。

そして静寂である。
だから秋の清い愛が
窓一ぱいにあふれて、
たれ一人として
あらそふものはあい。
皆姉妹の様に
純一な温味が見ゆる。
學びやの窓には
美しい美しい
びたりとした愛が見ゆる。
お互に親しむ
影と光りは
清い窓に輝いてゐる。

烟

實二 河村ミドリ

青空に白い烟、
ほそくぐぐ
いづこにきゆる。
そは夕の
青い夢の

去り行く影か。
みつめてゐる我魂も、
青い糸となつて
ふうはりく、いづこに消ゆる

渚さの浪

實二 關屋キヨコ

さらくぐぐ
渚に寄せる
優しい浪
私の小さな
足跡を
つけるそばから
消して行く
綺麗好きの
掃除好きの
可愛い浪
今夜も
あのまんまるい
お月様も
洗ふだらう

童謡

一一 題

本一梅 伊藤 基美

夜は寂しい
あかい葉
風が吹きます
通ひます
さらさらさら
落葉がおどる
小さい音をば
たて、ます
今日の晝見た
落葉だらう

秋は寂しい
かれたこの葉が
可哀さう
あかいきれいな
つたの葉は
明日は今年の
かたみのしをり
大事をノートに
しまひませう
むくむく雲のおいた
向ふのお山の木の上で

白いむくむく雲があそんでゐる
ほんの少しだけ共
木は重たくはないかしら
お山は重たくないかしら
だんだん上の方に昇つてゆく
日がさした日がさした
向ふのお山の谷間がすうと暗くなつた
暗くなつた
あらあらあらまた明るくあつた
あらならだらう
あ、そうそう判つたわかつた
さつきの雪がおいたをしたんだらう
小さい子雲が上の方に遊んでゐたんだもの
お日様の顔を一寸袖で……
あ、きつとそうだそうだ
小雲だものおいたをしてよろこんでゐるだらう
きつと

草 笛

本二菊 大谷 ハツ

麥の穂で

草笛作つて

吹きくく小山に登つたら
こんくお舟が見わた。

煙をのこして

波上をつるくくと
霞の中へ行つたのよ。

吹いてもくく

行つたお舟は
歸つて来るが

吹いた笛の音は歸らぬい。

あごり

ほつくく煙が出た

煙突は煙を見おくつた
煙もうしろを振りむきながら

どつかへ消え去つた

あとで煙突は煙を
悄然と見送つた。

お人形

本四 野北トメ子

私の好きなお人形

目はぼつちりと色白で

髪はか黒々ふさくくと

眉は三ヶ月頬は紅

ほんごに美人のお人形

ほんごに可愛いお人形

私の人形はよい人形

いつもにこくく笑ひ顔

いつも無口でおこなし

ほつておいても泣きません

ほんごに行儀のよい人形

ほんごに可愛いお人形

蛙

本四 森光子

窓にもたれて聞いてたら

蛙がガアガア鳴き出した

あをい蛙が鳴き出した

小さい蛙のいふ事にや

憐な千ちゃん

實二 渡邊フジコ

千里の心は冷たいの

なぜにそんなに冷たいの。

千里の心は淋しいの

なぜにそんなに淋しいの。

千里の心は悲しいの

なぜにそんなに悲しいの。

私は一人でつくくくと

憐な千ちゃんながめては、

何時もしくく泣いてます。

今にお雨が降りますよ
お乾物を入れぬさい
お人形さんも入れぬさい
音楽會を開きませう
小さい蛙のいふたよに
ザアザアザアと降出した
ガアガアガアと鳴き出した

さぶね

本四 藤本マサ子

誰が浮べたものでしよか

小さいくくさ、舟が

たつた一艘流れます

何處から流したものでしよか

沈みもせずに流れます

何處まで流れて行くでせう

廣いく海までも

流れ流れて行くでしよか

途中で暴風にあはぬやう

私は祈つてやりませう



和歌

月見草

本一梅 上石タマコ

月見草花散りそめし夕べより涙の多き子さばなりにき

初夏の森

本二菊 大谷 ハツ

雨上り夕日さしそふうすみどり小鳥の來鳴く初夏の森

雨上りかひきこのきながむれば青葉をゆるす初夏の風

雨上り月は静かに輝けば蓮の葉にも白銀の露の玉

二つ三つひらき 薔薇の花の香を誘ひてゆくや初夏のかげ

降り續く雨に打れし紅薔薇の花はあはれにうちふるふなり

清き水小川に流るその音よあ、其の音はよるこびの音

どうくさ流れ出でたる水の如吾はいづくをさしてぞゆくや

曉のれざれ静けきころにして塘をいづるおや雀かな

あざみ花葉にさげもてご花の色やまじき故か蝶も來るよ

黄昏の淋しく渡る鐘の音は人の心のおはれをそゝる

日は暮れぬ夏も逝くらんかなしげに木の間かくれに洩る燈火

夢やきの烟やうやうをさまりて山よりおこる初夏の風

木の間よりゆくりなく立つうすいろの烟なつかし古里の家

雨晴れて蟬の聲たかき松林なにかさわけける鳥の群かな

怒るまじ

本三梅 齊藤 貞子

ひたぶるに思ふ心のあやしくもそむきくになりしはかなき

君の名をうかべて君にさげんと思ふ心はいやまされども

たそがれにあわき山脈友と共に見入りて共に心阻める

怒るまじ怒りし後はさながらに砂かむおもひ我が胸にみつ

たそがれてやうやく暗き山裾の島に淋しく動く人あり

仰ぎみる唐人山のあたりかもほのぼの出づる十五夜の月

ながそへの山なみ模糊と雨けむる日はひれもすを黙す我かも

しきしき、雨ふる夕べ野の路を荷馬ひく子は歌もうたはず

若うごは芝の笛ふきうなだれて一人さみしく夕野路を行く

さんくさふりそ、ぐ陽に紅ばらのかやきやます雨晴の朝

銀の星紫の星青きはしき、やき合へる夜はうれしも

風吹けば銀紙ひらめく如くにも秋のはじめの空のかややく

妹と作りて流せし笹小舟夕風吹けば浮きつ沈みつ

若きわがゆめはうつくし紅ばらか初秋の日の大空のごと

祭の夜

本四 岩武千壽子

提灯の多くかゝれる祭の夜人々の顔かゝやきて見ゆ

祭の夜通きし弟の横顔に似たるを眺め涙流るゝ

あまりにも彼に似たるよ彼の人の面さしも亦肩のあたりも

つぐく、眺めたるにや彼の人ば此方へ向きて急ぎ去れり

一握の砂と歌ひし遠き日の人なつかしき秋の流邊よ

折にふれて

本三菊 岡本トシエ

春の夜はおぼろがすみてさくら花夢の如くにほの白く見ゆ

長閑なる野邊のかすみの中にして姿も見えず雲雀なくなり

朝夕に待ちしさくらもいつしか昨日の雨に咲き出づる哉

愛でたりし花も昨日の夢にして明行くそらに夏は來にけり

庭に出て何心なく眺むればさんほ飛び交ふなつのゆふぐれ

夏の夜や川べに立ちてながむれば萩吹くかぜに袂ゆらめく

我が庭の垣根にほふ夕顔の花もすゞしきたそがれのころ

しの、めに起出で見ればつゆしげく色もこそそへ垣の朝顔

なつの日の暑さいさはす愈たらず咲き出でにけり書顔の花

文机にひさ枝さし、ばらの花我がなつかしき目々の友かな

山に照る清くやさしき望月は我が乙女らのかゞみなりけり

日曜のやさしき心に庭に出ていもさふたりくつをみかけり

春植みて秋まちわびし白菊もさく咲きそめよ賤がかきれに

野へ行けば千草の露の月影もみだれて袖に吹くあらしかな

野も山もはやこがらしの吹きそめて散りしきにけり紅の床

月見れば千々にこゝろを碎くなり過にし秋の今日この頃に

記憶の中より

本三梅 樽 シヅ子

沖のかたうす煙して行く舟に南の國の思ほゆるかな

あざけなくたわむれ遊ぶひな鳥にもこの世の生のあるよあはれに

波よする江に立ちて涙じぬ海はあまりに廣くはてなし

かの歌を思ひ出しては一握の砂の量をばばかりては見ぬ

ゆきし日のくさんくのごと此の布に包み捨てたし新に生きん

つゆ草の丘べに立てば我が友は好み給ふやま手にさりて言ふ

修學旅行雜詠

本四 藤井 藤江

若葉よりも、光よさみごりに輝く旅よ初夏のみち

おんきみのふる里の名にあくがれてはるる旅に來は來つれども

見はるかす大天地に陽は燃ゆる吉敷のゆふべ君のふるさと

赤々さ沈む陽ながめ涙せし第一日の旅の夕ぐれ

あこがれて來し旅なれど黄昏さなれば涙のひたに流るゝ

おほびこの手もて後に投げらるゝ如く去りにし旅の山野よ

望み來し宮島のうるはしさいざ傾りせん君のみ許に

ものなべて緑の衣につゝまれし宮島の地は夢なりしかな

宮島はうるはしき地に候さ心も軽く便り書く宵

あかさきの狭霧の中をひた走る朝のくるまは心すがしも

うるはしき灯かけ流れぬ夢のごと雨降る夜半の廣島の街

柑子花ほのかに薰る故郷のなつかしき夜なり春の雨降る

桐の花

本四 永野 文子

桐の花匂へる山路を乙女等は笑ひさめめく初旅の朝

つぎ先きに登り行きては又くだる苦き道も嬉しと思ひぬ

繪葉書の敷の足らぬにいらだちて弟を攻めて我涙ぐむ

我が胸の悲しき事をわすれよま空を仰げば星一つ流る

十六の夏もすぎにき秋風の膚に寒う渡りてぞゆく
人絶てて重き寢息のちるゝ夜半片破月の冴えて行くかも
柿の葉の朝風に一つ散りゆきて又一しきりもの静かなり
南園の屋根に戯る雀等の俄の雨にさわぐなかしさ

こすもす 本 四 神崎 清子

こすもすは赤く咲きたりかはゆさに鉢に種は見ぬ秋の夕暮
今日明日と日々に數ます日々草我が文机に風薫る夏

たそがれ 本 四 古川 愛子

照りつくる日の光をば浴びながらラケット振れる少女勇まし
君ありし昔をしのびたゞ一人夕靄の中にたゞすみて居ぬ
我が友の明き心を暗くせし我を悲しむたそがれの空
成す事の山の如くに積りたるそれをなし得て今日も暮れゆく

汽笛 本 四 松浦マサ子

手を組みて君の歸りを祈り居るこの待合室の夜は深しも
夢醒めて庭に下りたち物思ふこの朝つらき茶の咲く
鉛筆かひたにけづれる友の手を眺めて居たり物思ふ時
高らかに出船の汽笛聞ゆれど今宵も見えず君の姿は
人皆に叛き行かれし我なればひれもす叛きて今日も暮れ行く

亡き兄を追想して 實 二 東屋よし子

いひいでん言の葉もなくて別れけり只なつかしき名胸にきざみて
涙せし君が心のかなしさにつれて露そふ旅の夕ぐれ
灯の街をみすて、かへる旅の子はみ空の月に心あかして
うつりゆ、四方のけしきのあやしさに又更めて名をよびてみし哉
ゆられつゝ君と別れて西へ行けど心ばかりは東路にこそ
チロ／＼と鳴く虫の音におもふかなかたみに笑みて別れにし君
いはまじこつゝむ心のくるしさに見入りし罪をゆるしてよ君
沈みゆく暮色も早き茅ヶ崎を只一人みてさめ／＼と泣く
茅ヶ崎を通ればかなしき去にむつみてめでし雲ひさり映ゆ
去にし日に君が後追ひ訪づれしその遺をみてさめ／＼と泣く
しめとめせ旅の心のさびしさは虫にも波にもいはれざりけり
立すくみ泣いてながめし雲の色になつかしき君いますこそおもふ
淋しさに虫の鳴く音もきゝわびぬ君が影追ふ旅の夕ぐれ
ちらほらさふもこの家のみゆる火にうかべて笑みし旅の夕ぐれ
淋しさを誰れにか告げん夕まぐれはる／＼來ぬる旅ぞかなしき
なびきゆく野邊のすゝきのやさしさに唯わけもなう涙ぐまれつ
くれ早くやまきた(山北)と呼ぶ箱根路に遠し東の空をながめつ
夏衣うすきが常の世なれ共うけてうれしき袖の下露

袋の中より 一 聲

雨の音をきゝつゝみ入る我胸にむかし人の姿ながれき
朝な夕な只いのるなり人の道ふみなたがへそ花の教へ子
手弱女の業はさま／＼ありさいへぞ只まこころの調ありせば
ボチ／＼と傘の上にする雨の音きゝつゝ歩む古城跡の町
さひきませ我故郷は谷川の青葉の影を底にやさせば
いぢらしやはゝその森を戀ひわびてせめて夢にまたのむ少女よ

赤さんば飛びかふ見れば亡き兄もかへりくるかき涙ぐまるゝ
ある時は吾を打ちたりと見なれどその怒さん今は忘れ

姪 實 二 河村ミドリ

姉君は小さき姪の手をひきて酒屋の前を今きます見ゆ

海 棠 補習科 田総 ユキ

別れ行く友は語らでもだしたるそのさま見れば我は悲しも
病多くおはする君をみ体を愛し給へと我は祈りき
涙みせずみつめし友のそのひさみむせび止まずも我は別れし
海棠の一つ／＼がおもふせてゆらくがいさし雨晴の庭
雨晴れし庭に開ける海棠を父に示せり病みませる日に
何さなくいら立たしくて事もなう腹立ちてみぬ親しき友に

折りにふれて 補習科 溝部キク江

麥笛を吹きつゝ童謡道を夕日をあびて家にかへるも
さり入れの農家の庭に一本の鶏頭あかし秋の午後の日
初夏の木の間を行けばみどり葉の若き香りは胸に満ちつゝ
入日赤く白壁に映は静かにもくられてゆくらと秋の一日は
我が胸に反きて去りし友なれど戀しくなりぬ秋の夕べは

夏の旅のつれ／＼に 一 聲

友と別れて

はげみませ父なき子よさいはれんはかなしきとの極分なりせば
せめて又父なき子等のつとめには我が世のかざり母人にこそ
いさしさをかへらぬ影は去りながらさらぬ思ひの父おもふ子よ
母まさぬ病の床の淋しさになつかしきみぬ旅の夜の月
やみである身にもうれしき音づれに只ほそりゆく手をばながめつ
をちてゆく日は夕やみにうすれども今一さきさ夕映のする
夕闇を迷ひて出で、なく出の聲にも似たる我おもひかな
我宿にかへりてみればあなかなし母なき旅の秋の夕ぐれ
まさぬしてながめし月もひさり居の淋しさをへぬ虫のなく夜に

春より秋へ 安富敦子

汽車のゆくかたへの路を紋附の廻ゆるなり菜の花の路
相模野や小松が丘の側にゆるく傾く桃林かな
右ひだりせまりて谷を閉す尾根にあらはる春のひかり流るゝ
われゆけばあまりにひくゝがしらさぐる萩の少女は悲しかりけり
白桃のひさもさみせて海のはざり柑子畑に埋るゝ街
海海海 その名を戀ひて参つゝわれみかへる路は白かりしかな
われこゝに來て七日経つ眞日よりひなげしの花咲きいでにけり
ひなげしは少女心かかたはらによればわな／＼と紅色をして
われもまた旅人なれば山口を彼方にこゆる君を忘れず
雨の晴間君が小紋のうす藤の美しかりし色をわすれし
はるかなり母より來つる消息のうれしき日なり雲わく日なり
あさひかり庭よりさせば箔さびし襖も夏に青めくものか

みわたせばわれらけうしも越ゆぬべき行手の山にあさがすみする

(以下旅行の歌)

れんげ田の春に現せゆく紫の色なつかしき旅にいつる朝
やわらかにあさのかすみのはふ谷にあさみの花は紅にさく
なだらかに眞青の海にしづみゆく岬はかなしあきらめのごと
瀬戸の海白帆のかげのや、すこしわな、く程の漣のす
おほごかに汽笛は海になりわたり夜をはなれゆく我しきしま

さもによりりターをよむ少年の後にながき朝の水尾かな
都草れんげの花のあてやかに野砲車をめぐりつ、吹く
砲口は今もだして初夏の眞青の草に埋るるなり
夏わかば砲車にゆぐたかひのおほき血潮のしたたるやなほ
うすくらきこの階よ先つ帝いく度あがり下り給しや

水底に何か藻草のゆらぐみゆ磯にまちかくわが汽車ゆけけ
山のみどりまごにせまると思ふまにツトわが汽車はトンネルに入
くれゆけばいさり火ひさつまたたきて沖邊に遠き名も知らぬ島
少年の睡の如くやわらかにものを思へに朝雲の山

わが心こころの園をかけゆきてふも悲しき城壁にたはれぬ
わが心こころの園をかけゆきてふも悲しき城壁にたはれぬ
わが心こころの園をかけゆきてふも悲しき城壁にたはれぬ
わが心こころの園をかけゆきてふも悲しき城壁にたはれぬ

わが心こころの園をかけゆきてふも悲しき城壁にたはれぬ
わが心こころの園をかけゆきてふも悲しき城壁にたはれぬ
わが心こころの園をかけゆきてふも悲しき城壁にたはれぬ
わが心こころの園をかけゆきてふも悲しき城壁にたはれぬ

由縁の園

和歌

子 校外會員 永井光子

いつ知らずのび行きしかな買ひて來し吾子の靴のいさも小さし
二寸五分の縫ひ上下げぬ今更にのびし吾子をば見入る朝かな
おさなしく母のささすを聞きわけて捕へし蜻蛉逃しゆる吾子
ゆあみすればかはやに行けば泣ながら母を尋ねて追ひまはる吾子
家居せる母に分けんと貰ひたる菓子包持て走り歸る子
これもあれもに子ほしけれと賞ししが悲し銀座の赤き灯のとも
まんまるき月見せなむと椀端に三つならぶ背の母をゆらぶ子
いさし子のいれし間にさて髪さけば心せかれて折りぬあらくし
ホケットに取れしはたんを入れて來ぬ仕末よるしと褒めてやる哉
賞しきも我が憫をも知らず子は汗にじむ背にうまいせしかな
小さき棺火と母とに護られて朝まだき行く火葬場のみち
乳たらひうまいせし子をそと寝せつ花の夕べを母に文する

そしり言耳に入る日や露の野を左右に亂して馬驅る心地
うつくしきわがき日のゆめごころく永久に眠る墓が大ぞら
晝の月ふごころもしてわれもまたかの大ぞらの墓を堀らまし
何さなくこころをひかれ萩蕨のほそりまでゆき木魚をききぬ
ひさの世のみにくさなごにか、はらで大天地に秋は來れり
あはれけふ少女の胸をわかせたる日の大腸の沈みゆく時
落つる日やめでたかりし日榮ある日指月のそらなうす赤うして
大ぞらも澄みてくれゆくおはれ今日思ひ足らひて消ゆるごころに
わがこころひそかに何かたくらみて今日ひさ日もわれに黙せる

葉月

初秋のまひるの地ならで都地は燒野の原さなりけるかも
さなりやの病院焼けて我が庭も半時ならてやげ失せにけり
都地は焦土さなりぬ君にして居まさぬこころを安しと思へる
草も木もみなうなだれてくれゆくか心かなひ秋の野に立つ
沖の方一つ小島を見てあれば我が身の如くかなしかりけり
静かなる夜の街よりかへり來てしみ／＼遠き人と思ひぬ
原稿の一枚二枚静やけき夜なりふい／＼人と思ふ
小さき命我れを見まもる秋の夜は星の數さへ見ぬみ見ぬすみ
君にかく文なりさきく吾あるさいふより外に言の葉もなき
若き日を知らてこしゆくこのころはひさりの教師歌もうたはず
蒔かれたる種はすなほに芽を出しぬ我れもすなほに働きに行く
教室に居並ぶ子らの心うこく我れをわひし誰か思はむ
よく聞けと叱りし後のさびしさにいふ言もなく教壇に立つ
人がすの足りて元氣におやすみと寝に行ける子らの聲はのこりて
やす／＼と眠りし子らを見ありきてかへればひさり蟋蟀のこゑ

一時二時つぐるを知らず吾子のため明日の花見の晴着縫ふかな
夢の穂に見えかくれつし歸る子の白き帽子に強きまひる日
乳足らで吾子ば眠らすすさまじき戸のもの嵐戸を打らやます
痛める母打つたる吾子もすく／＼のびて今日しも學舎に入る
故知らで涙ぐまれぬ袴つけ靴下けたる吾子の姿に
母さいふ幸を思ひぬ髪ゆひてリボンつけてごまつはれる子に
母君よ我もも吾子は緋のたすきかけて井の邊に走り來りぬ
朝毎に子らよるこべり我庭の西洋いちごうれそめにけり
泣きたがらぬれし我子に心からわびてつゞくる針仕事かな
紐さけばいてふ葉あまたこぼれ散る葉師の寺に遊びし吾子
子故われうさしも母さいさかひぬ心悲しく夕月を仰ぐ
夕つぐる葉師寺の鐘なり渡るあはれ子たちよ待ちわびぬらむ
もらひ來し子猫の首輪作らむとおぼつかなくも針運ぶ吾子
(大正二二、六、二七)

おのき 校外會員 永井ミツ子
恐ろしき一夜を明す野のこさねまごうみあへすきくは虫の音
悲しみを知らぬ如くに秋の虫しこれめぐりてよちすがらなく
都亡ぶるほのほがして東の空ま赤きま、曉なる
恐ろしき死なまのかれしこころを語りつ、あり淡き灯のかけ
命あるその幸を思ふ時自らなる涙わき來る
一度は我も上りし淺草の十二階今しくづればてのき

故わかぬながらに吾子ら眠きてしはしはなれず母の袂を
死出の旅せめてさもに炊すもははやに入るも吾が子背なり
東の御空ま赤したれぞこれ都をあはれ焼きつくす火か
いく万の友ははてにき吾のみの命つきざるふかしき思ふ
バラツクの友はもいかにすさまじき戸のもの嵐吹きやまぬかな

東宮殿下臺灣行啓にあたりて

校外會員 野田喜代

四月十六日東宮殿下を臺灣に

御迎へ奉りて

かしこしや日つぎのみ子をはるばる高砂島にむかへまつりて
赤誠をこめて迎ふる島人の心や如何に波ぞうつらん
百鳥も日つぎのみ子の出でましを如何に歌ひて迎へなるかな

愛らしき幼子の奉迎歌を歌ひ
て喜ぶ様を見て

いとけなき稚子の口より奉迎歌もるもゆかし今日のよき日よ
數回玉顔を拜して

舉手をなし給ふ御英姿仰ぐたびかたじけなきに涙浮びぬ

臺北驛を御出發南部に向はれし時

沿道に群がる民を後にして御召の列車木々の彼方に

各地にて記念樹を御手植な

されしと承りて

み手づから植給ひける常磐木の千歳の後も繁みゆくらん

恙なく全島の行啓を終へさせ

給ひければ

人もなきみ山の奥の草も木も御旗の風になびきけるかな
萬代に御足跡の残りてぞ榮む行くらん高砂の島

愈々御出發の日となりて御名

残り惜しく感じ

道のへの草木もいさゞ悲まん東の國に立たせ給へば

秋ふかみ行く

校外會員 椿 ます子

さ緑の野邊にいつしか女郎花萩など咲きて秋近み行く
夕やみし山路は寂し人の子の影たにあらす煙たつ見ゆ
草むらに蟲鳴き出で、夕さればかそけくも聞ゆ入相の鐘
ひんがしの空明るみて山の上に今登るらし十六夜の月

校外通信

朝鮮だより

福間 さと

(前略)

諸先生を始め、會員の皆々様御健かに渡らせられ候
や、御伺ひ申上げ候。

梅雨の候とは申しながら御地は近年稀なる大雨にて
阿武川の増水甚たしく候由、皆様にも嘸かし御心配遊
ばされ候御事と存じ候。

さて私事渡鮮以來早六年の星霜を経申し候。當時は
見る物聞く物皆異様に感じ申候。第一鮮人の風俗習慣
等にて、男女共洋服とも和服とも思はれぬ鮮人唯一の
衣服まこひ居り申候。言語も朝鮮語とて餘程發音のむ
つかしきものを用ひ居り申し、男子の多くは外出の際
三尺餘のバイブを食へて歩き、女子は風呂敷包の如き
ものを頭にのせて歩き申候。而して鮮人は住居もオン
ドル生活をいとあみ申候。(オンドルと申しまして皆
様にはおわかりにはなりません)床下に火を焚きて

室内を暖める仕掛になつて居ります。

内地と違ひ氣候悪しく夏は百度以上にもなり、冬は
それに反し當京城にても、零下十七八度に降る事あり
北に行く程寒さ厳しく相成り申候。(中略)

韓國時代の南大東大兩門は今尙苦むして、高く聳わ
音を忍ばせ候。

毎年のおあつかしき會報御送附下され有難く、嬉し
く拜見いたし候。異郷に暮す私には皆様に御目に掛り
たる心地いたし、唯一の楽しみに相成り申し候。承り
候へば御校も縣立に相成り皆様も定めし、御悦びの御
事とはるかに、御祝ひ致し申し候。(後略)

臺灣より

野田喜代

鯉職の勇ましく初夏の風に翻り、菖蒲のゆかしう馨
る今日此頃、諸先生様始め、在學の皆様には、益々御
健勝の御事と御喜び申上ます。私も御蔭様にて恙なく
暮して居りますから憚り乍ら御放念あし下さいませ。
(中略)

さて今度の會報十周年記念號を拜見致しまして、母
校の破竹の勢を以て進歩發展致して居りますにはいと

驚き、且嬉しう存じました。のみならず卒業致しましてから私は家庭の事情の爲めに、修養の怠り勝であつた際、有益なる記事の満載せる會報を手にし、強い刺戟を與へられました。學生時代の緊張せる氣分を呼び起し、同時に新しい希望胸に滿ちて参ります。

當地に参りましてから非常に、健康となりました。けれども回顧しますれば、在學當時、不健康で御座いました爲めに心の向ふまゝに勉強も出来ませんでした。が、社會に立つて見ますと今少し、あれもこれも學んで置けばよかつたと思ひます。多く御座います。在學の皆様にもおろかながら何卒より以上に寸分の暇も惜しんで有意義に學の林を分け入り給ふ様希望致します。

既に新聞紙上にて御承知の御事と存じますが去月十六日には良くも、東宮殿下當地に行啓遊ばされまして親しく政治、司法、軍事、教育、産業、交通、衛生、民情を始め、あらゆる方面に涉つて詳細に、御視察遊ばされ、十二日間の御滞在を無事に終へさせられ、二十七日當地を御出發に参りました。

今度の行啓に際して内地人は申す迄もなく、臺灣人

田舎から飛び出したまゝの私には、都會のすべてが皆驚きのまなこをばらさないでは居りません。今まで學校生活をしたばかりでございましたので、社會と云ふものが、何やらさつぱりわかりませんでしたので今やつと、先生の御恩やら、父母の恩を心の奥深くに思ふ事が出来ました。社會の多くの人が感情によつて進んで行き、物質によつて生活して行く事がごんごんに私の心に映じた事でせう。すべての事柄を皆自分の物として身に納めたい。今迄あまりに田舎の暢氣さを身に染めて、尊い時間を無意義に過して來た事が今更悔いられてなりません。(中畧)

幸にも姉が文科出で御ざいますので、勉強のひまひまには文學の方面に付いて及ばぬながら務めて居ります。そしてある丈、多くの本を讀んで讀書慾が起したいと思ひます。(中畧)

あの美しい學び屋で机に向つて先生の、充實し切つた御解釋が、も一度、ほんごに一度でい、から聞かしてほしい様な氣が致します。

皆様方は随分御學び遊しませう、かひながら御祈り致します。そして何れの學校よりも秀でた實蹟のあが

生番人、等しく熱誠をこめて、歡迎を申上げ、殿下もいたく御満足に御恩召されし由、承り皆々歡喜致して居ります。當時の模様詳しく申上げ度いとは思ひますがあまり長く参りますからこれにて失禮申上げます。

未筆ながら皆様の御健康と母校のいや榮へ給ふ様、波路はるかに祈つて居ります。(下略)

奈良だより

佐々木 たみ子

はるかに三笠山を望む時、あのなつかしい志都岐の園が思はぬいで居られませうか。日一日と美しい緑の榮へる時も、あのやさしい面影山がしのばれます。御なつかしい先生、何と申して御便りして、かわりませぬ。丁度あの學校の櫻の散る頃、なつかしいわけても寄宿舎生活を後に、校門をくぐり出た時の悲しさ!、は……(中略)

丁度此の四月奈良高師を姉が卒業しまして、附屬の高女に残される事になりましたので、私も未だ勉強不十分でございますので修養かたたく奈良に参りました(中畧)

る事を。之は私のつまらない、本當につまらない、まづしい私の心のさ、やきで御ざいます。(下畧)

東京だより

永井 光子

(前畧) 扱て此の度當地の大震災に付き候ては、私の安否わざと兄の許まで、お尋ね被下候由、數ならぬ身迄及ぶ母校の御情身に泌つて嬉しく、只管感涙にむせび申候、幸にも私共住居致し居候山の手方面はさしたる被害も無之候へば、他事ながら御放念被下候、萬を澤山の同胞の死に對し私共のもれ候事幸とも氣の毒とも存ぜられ、くさくさの思胸裡を亂し申候、まはらぬ筆にては書き盡され申さぬ詳細は、すでに新聞其他にて御承知の御事と存じ候が、まことに其の凄慘、酸鼻の狀はたどへ百萬言の形容詞を用ひ候とも盡し難かるべく候、聞くも語るもたゞ涙の極みにて候、一日の強震後日々の餘震に人心恟々として、平穩を缺ぎ申候、一昨曉及今宵のは、かなり強震にて人々概戸外に走り申候、かゝる様にては私の此れが、故郷への訪れの最後となり候かとの心地も致し申候。(下畧)(東京府下中野町字打越)

旅行だより

木原みどり

お慕はしき師の君様！ 久しく御無沙汰に打過ぎました。今日私事、多くの友達と共にこんな所に参りました。大變に氣持のいい地で御座居ます。

こん／＼として湧き出づる泉水の清さ！多くの鯉や鮒、羽の美しいお鶴さん、ほん／＼に何と云つてよいかわからない程です。廣く場取られた境内、美しい若葉の小山、この草の上に腰おろした時の心地良さ……

又明日は水前寺驛から阿蘇山へ向つて此處を出發致します。今現に噴きつゝある阿蘇山を遠く眺めた時、早く登つて見たくてたまりません。

明日は朽木温泉で一泊、明後日長府の方へ歸るつもりでございます。

さらば今日はこれにて失禮致します 走書をお許し下さいませ。 かしこ

朝鮮だより

松本咲子

當地に参りまして一番困りますのは鮮語で御座います、鮮人相手の事にて何よりも必要な事で御座います

が。一寸やれそらにはなか／＼むつかしう御座います。閉口して居ります。去る六月に一寸歸京致しましたが、毎日の雨降りにて御眼にかゝる事も出来ませんでした。誠に残念に存じました。友達より母校の様子を承りますだけでもお懐しくてあります。會報も何時頃御發行にありませうか、一日千秋の想でお待してゐます。(小畧)(朝鮮忠南論山郡馬九峙)

シンガポールだより 山口屋シナ

前畧、夏休も近く相成り一入御多忙に渡らせらる、御事と存上候、私事、今までもなう御伺ひ致す等の處何かご己の事のみかまけて、失禮のみ致居候。

六月末までとの仰にそむき、御返事をそなはり誠におそれ入り候。

この度は何か當地の變りたる事ども、聞わ上ぐべく心づもりを致し居候處、先月頃より少々健康を害し、今以つてぶら／＼致し居候ま、思ふ様にまじまりもつき申さず、此度は只御返事のみ申上げ候。

時節がら御一同様にはますます御大切に遊ばされ度はるかに祈り上候。かしこ

本校記事

生徒の學級日誌より

自大正十一年十月 至大正十二年十月

大正十一年

十月

六日 終業後生徒總代春日神社に参拜。

九日 終業後校長先生より節約及び服裝につきて御話あり

十三日 午前八時より戌申詔書の奉讀式舉行

十六日 午後三時より一時間半に亘り世界探検旅行 家菅野力夫氏の講演あり。

十九日 帝國大學教授協水博士の長門峽成因につきての講演あり。

二十日 林阿武郡長、末宗郡視學來校新任の御挨拶あり

二十三日 ビアノ到着(獨逸ベシユタイン會社製作價額二千七百圓)

二十六日 齒牙につきて、ライオン齒磨會社講師深川氏の講演あり。

二十九日 十周年記念運動會準備

三十日 午前八時半より、講堂に於て學制頒布五十年記念式舉行。

校長先生のお話の要點は 先づ學制頒布の沿革からお説き起しになり、今日の學問の隆盛に至れる理由を指摘され、更に女子は男子に比して進學率低く、且つ智識の程度も劣れる感あるは遺憾である、機會均等、男女共學の唱へられて居る今日諸嫌は奮勵一層勉強せよとの事でありました

林阿武郡長からは 今日教育の隆盛を來せるは、第一、皇室の御恩、第二、先生の御恩、第三、父兄母姉の御恩、第四、公共團體の御恩であるから、皆さんは此の御恩を忘れる事なく、しつかり勉強せよとの御話がありました。

三十一日 午前八時半より天長節祝日拜賀式舉行。

(本三菊 齋藤春子)

十一月

- 三 日 本校開校十周年記念式、其他種々の催あり
詳細は南園會號十號に掲載
- 四 日 運動會舉行、展覽會開催
- 五 日 展覽會開催
- 十日 本日より一週間本校に於て、愛國婦人會主催の裁縫講習會開催
- 十三日 放課後、東京女子高等師範學校教授大江先生の、家庭教育に關する有益なる御話あり。
- 十八日 午後六時より本校講堂に於て、山口高等學校生徒の音樂會開催
- 二十二日 午後三時より長澄先生の告別式を舉行
校長先生から、長澄先生が本校体育の向上に努力せられた功績の多大ありし事を稱へて、先生の將來の御發展を祈られ、中野先生から、南園會を代表して記念品を贈呈せられたるに對し、
長澄先生から
五年間の本校在職中、諸先生や生徒の厚意を感謝され、自己として最善を盡したるも學乏しく、才足らざるの故をもつて、其の結果の慚愧に堪わざ

る旨謙遜なる御挨拶あり、最後に私共に對し、益々自体の健康に注意する様この御話があり、しめやかに式を閉ぢました。

式後校長先生から
「峠内の論を止めよ」といふ村田清風翁の言葉をかかれて、平素の行動や心の持方に就いて懇々お話をありひたすら我身に省る所がありました。

- 二十三日 四年生の体操遊戯を活動寫眞に撮る。
- 二十七日 五十崎先生の告別式舉行。
校長先生から、五十崎先生來任の経路を御話になり、先生の温雅親切、永く本校に在職を希望したるも、家庭の都合上引き止め兼ねたこと先生の御退職を惜まれ、
五十崎先生から
總ての點に未熟な自分は、當校に参りて何事もなし得ざりし事、短時は、先生生徒の親切同情の大方なりし事を感謝されました。
中野先生から、南園會を代表して、村橋さんから生徒一同を代表して、各御挨拶がありました。
(本三菊 中村豐子)

十二月

- 二 日 南の園のよろづ木も、紅にそめし衣つけて一葉、又一葉親を離れて散つて落ちます。ちぎれた雲の間のコバルトの空が、冬の御色に輝きます
- 二十二日 午前九時より、守田先生の新任式を舉行。
校長先生から、長澄先生の御後任として、守田先生を迎へた事について、非常に御喜びの御言葉があり、守田先生から、出来るだけ皆さんと一所に働かうといふ意味の、堅い決心の御話がありまして、私共はうれしく、非常な心強さを感じました。そして皆さんと我々校体育の向上を祈りました
- 二十三日 午前九時より終業式舉行。
校長先生から
一年の星霜夢の間に過ぎたる感慨無量の御話があり、十周年記念式諸事業が豫期以上の成績を得たるは生徒一同の努力による旨を感謝され、第二期成績の一學期に比して一般に良好なる事、學問のみならず品性の修養につむる事、及び休業中の心得等、懇切の御話がありました。
(本三梅 後藤ミヨ子)

大正十二年

一月

- 八 日 午前九時より始業式舉行
校長先生の御話の要點
近頃自覚といふことが盛に唱へらる、が、其の自覚は主に權利の方の自覚で義務の方の自覚でない權利のみを主張するから不平不満が多くなる。我等は自ら顧みて先づ義務に自覚しなければならぬといふお話がありました。
- 全 日 新任式、告別式舉行。
校長先生から、家事上の都合で、中村先生と、荒川先生が御退職になつたについて、兩先生の御功績を稱へられ、後任として、赤川先生と、久芳先生を御迎へたこといふ御話があり、各先生の御挨拶がありました。
私共はあのやさしい親切な荒川先生と、あの熱心な中村先生とを御送りする悲みの中に、學識の非常に多い經驗に富んで居られる兩先生を迎へ得た喜びを交へて、悲喜交々至るの感がありました。赤川先生は、九州帝國大學の御出身、久芳先

生は三ヶ年餘も米國に留學して居らつしやいましてこの事。私共は自分のつぎめに一層の熱をもちませう。

赤川先生と久芳先生から簡単な遜讓な御挨拶がありました。

二十九日 午後〇時五十分より、山本校醫就任式舉行せらる。

(本三梅 大田温子)

二 月

一 日 午前九時より山縣公一周年記念祭舉行。校長先生から、山縣公爵の一生は悉くこれ至誠純忠であるといふ實例をあけて、長いお話がありました。その偉大な人を萩から出したかと思ふに今に始めぬ事ながら涙がこぼれます。

中野先生からも、山縣公の偉大であつた事の御話があり、私共の平素の行について、御親切な御注意がありました。

十一日 午前九時より紀元節の拜賀式舉行。校長先生の御話は、我國体の精華を、光輝ある帝國の婦人として恥ぢざる修養の必要、といふ事が主

でありました。

十四日 午前九時より伏見宮殿下國葬遙拜式舉行。校長先生から、宮殿下の御高德について、細い御話があり、其後一同東方に向つて遙拜しました。

二十二日 午前十時三十分より、職員生徒一同講堂に參集、藤山本縣内務部長の御講演あり。(本誌記事參照)

(本四 岩武千壽子)

六 日 本間本縣學務課長が來校され、私共の業を視察されました。

十日 午後一時三十分より講堂にて、陸軍記念日記念講演舉行。

中野先生から

- 1、奉天の會戦が當時有史以來の大會戦であつた事、
- 2、外國専門家の觀察、
- 3、我國民の舉國一致、
- 4、兒玉參謀總長の苦心、より、會戦の結果我國民の覺悟、殊に我國の婦人が、一面に大なる勇氣をもつと共に、一面、温良親切であれといふ御話があつて會を終りました。

二十日 第十一回卒業證書授與式舉行。

證書授與の終れる後校長先生から大要左の意味の御訓話がございました。

外國人の他人に對して、親切である事、身を持つるに儉素である事、規律止しき事の實例をあけられ、婦人の節制、修養を力説され、最後に、世界的發明家マルコニー氏、新進創作家鈴木三重吉氏の夫人が全力を傾けて良人を援助し、遂に其の今日からしめたお話には、婦人の責務の如何に大なるかを、心の底から搾られる様な心持になつて、泣きました。それは私一人ではありません國家のため、社會人類のため、その心持で當れば聊か私共の責務を果たす事が出来ませう。

二十四日 午前九時より終了式舉行。校長先生より、本年の受賞者は昨年より程度の高き事と、學習、修養上について御話がありました。

(本四 香川トヨ)

九 日 午前十時半より始業式舉行。

全 日 齋藤先生新任式舉行。

本校出身の齋藤先生を我校にお迎へした事は、校長先生の御話の通り、私共も歡喜に堪わぬ處であります。本四の岩武さんは御挨拶をなさいました。生徒一同、同様の感をもちました。

十日 午前十一時より、安富、野田兩先生の新任式舉行。

校長先生より

一年の計は元且にある如く、此の年度の計は本日にあれば、一層奮勵努力の決心をしなければならぬ事と、明日の捉へ難き例話を掲げ、一日を等閑にせざる様にどの御注意がありました。

そして郡制廢止に伴ひ、本校が縣に移管されて、縣立とあつた事及び、其の經路について御話がありました。

次で列席林阿武郡長から

郡制の沿革、本校が四月一日より縣立となりたる事、本校の設備が比較的完備せる事、今後益々内容の充實に努められん事を希望する等の御話を以て郡と本校との別れの挨拶とせられました。

校長先生から安富先生は女子高等師範學校の文科御卒業、野田先生は全家事裁縫科の御卒業で、お若い二人の先生を同時にお迎へしたのは本校の幸福であるとの御話がありました。安富野田兩先生からは、それ／＼一所に勉強しようといふ御挨拶がありました。

全

日 午後一時より入學式舉行。

校長先生から、新入生に對して、入學試験の結果、本校の模様、學校の方針、婦徳の涵養等の御話の後左の御注意がありました。

- 1、言葉に注意すること。
 - 2、本校生徒は自ら進んで行ふ事を念ふ事。
 - 3、自分の義務に忠實ある事。
 - 4、事物を正當に判断する習慣を養ふ事、
- 中野先生より授業上の御注意があり、各先生からもそれ／＼の御注意がありました。

十八日 毛利男爵閣下來校せらる。

二十六日 大木鐵道大臣來萩されますについて、一同

金谷天神社前まで御出迎へ致しました。
(本三菊 齋藤春子)

を發表する事にありました。發表者は

實二、關屋きよ子さん本四、藤井 藤江さん
補 井上 光子さんの三人でありました。
(本三菊 中村豊子)

六 月

日 午後二時半より庭球大會舉行。

日 引き続き庭球試合舉行。

日 午後一時より時の記念講演會開催、生徒の感想發表があり、最後に校長先生から、之を記念として、私共の實行すべき事項について、意見を求められ、私共は自ら實行すべき事を申出ました。本日の講演者は

本二菊石田久子さん、本三菊平田元子さん。
實二 池内登美子さん、本四 松浦まさ子さん
私共は今日一日が非常に有意義であつた事を嬉しく思ひました。

十二日 午前十一時より服装検査

十六日 午後一時より、田淵先生の就任式舉行。

校長先生から、田淵先生が、体操科に對して、御研究深く、又實績をあけてゐられる事の實例を

五 月

八 日 午前五時、本科四年生、實科二年生、伊藤

關田、安富、世良、の四先生に引率せられて、吳廣島地方へ旅行の途につかれた。

十二日 本科三年生は佐々連の鐘乳洞へ、實科一年

本科一、二年生は三見地方へ遠足

十六日 言語の改良につきて、生徒同志の間に協議をしました。

二十四日 關田先生告別式舉行。

校長先生は、關田先生が、非常に熱心親切に指導の任に當られ、且つ如何なる仕事にも誠心誠意従事せられた事、本校を去らるゝに對して深く惜別する事等のお話あり、池上先生は、南園會を代表して、先生の御盡力を感謝されたるに對し

關田先生は、身に餘るお言葉にて、在職中大過なきは諸先生の御同情の賜に過ぎないとの御挨拶があり、私共に對しては、將來立派な婦人にある様に祈つて下さいました。

二十五日 午後一時より講堂に於て松陰先生の記念講演會が開催されましたが、今年は生徒自身の研究

御話になり、田淵先生から、自分／＼の体について自覺のない人は稀だから、大に協力してつとめませうとの御挨拶がありました。

其後寄宿舎に傳染病患者發生につき種々の御注意がありました。

二十五日 七時五十分より皇后陛下御誕辰拜賀式舉行

校長先生から、皇后陛下の御徳の高い事について委しいお話があり、式後伊藤龍城氏の華府會議の裏面を題する面白い講演がありました。

(本三梅 後藤みよ子)

七 月

二 日 午後東京殖民學校、大島教授の南米地方の御視察談があり、殊にブラジル、及びアルゼンチンについては面白いお話を承りました。

十一日 朝來豪雨、阿武川増水、王江、雁島、松本の諸橋危険の報ありて、四時間生徒一同退出、諸先生は鞋がけで生徒の歸宅を監視して居られました。

二十日 英語發表會、終業式舉行。

皆さんの發表が終つて、久芳先生から、皆さん

は、前回よりもほんの小々よく出来たが、安心は出来ませんといふことを英語で御注意がありました。
(本三梅 大田温子)

九 月

一 日 午前九時より始業式舉行。
二 日 始業午前七時半、本日より水泳開始。
三 日 午前十一時三十分一同講堂に參集、校長先生から、東京地方に大震災のあつたことのお話があり、長州新聞社の第一回の號外を示されました。皆々其の被害の大なるの餘り、本當だらうか疑ふ程でありました。さうぞ事實であければ祈りました。

七 日 午後十一時三十分講堂に集合

校長先生から、今回の大震災の被害の大なる事天皇陛下の御襟裳を惱ませ給ふ事、國民の義侠的精神の旺なる事及國民將來の覺悟について涙のにじむお話がありました。

十三 日 午前七時半講堂に參集。

校長先生より、乃木大將の御殉死、震災の慘話國民、殊に婦人の覺悟につきまして御話がありました。

十九 日

午後二時講堂に參集。

校長先生は、今回の御詔勅に對し、聖旨を奉體すべき旨を御訓諭になり、御詔勅の内容を平易に御解釋して下さいました。

赤川先生は、四日東京に入られて、親しく震災の慘状を目撃せられたので、その實見談をいたされました。赤川先生は自分にも随分驚きになつたと見えて、これは事實だと度々つけ加へなさいました。
(本四 香川トヨ)

十 月

六 日 河村、世良兩先生告別式

校長先生から、河村、世良兩先生は、本校創立當時より今日迄、十二年の長年月を終始一貫、本校のために御盡力して下さいました其の御熱心に對して、感謝の辭なき事及び、今回家庭の都合上御退職の止むを得ざる事を惜まれ

河村、世良兩先生より
永年の奉職中大過なきを得た事、惜別の情に堪へ

學科受持

修身	校長先生	國語	中野先生
習字、教育	池上先生	理科	伊藤先生
歴史、修身	柳原先生	裁縫	森脇先生
圖畫、理科	上田先生	國語	安富先生
裁縫	野田先生	裁縫、手藝	野田先生
家事	齋藤先生	裁縫、家事	守田先生
裁縫	安野先生	体操	藤田先生
數學、農業	田淵先生	歴史、地理	赤川先生
体操	安永先生	英語	上利先生
音楽、國語	久芳先生	數學、英語	
作法	原田先生	(茶儀生花)	
英語			
(箏曲寄宿舎生)			

生徒數及び級監

補習科	一	上田先生	池上先生
本四	五二	池上先生	上田先生
本三梅	五〇	伊藤先生	野田先生 (ヨシ子)

ない事、先生方及び皆さんの厚意を感謝する等、畧同様の御挨拶がありました。

十三 日 戌申詔書奉讀式舉行。

十六 日 八時半始業。

二十一 日 午前九時半より運動會舉行。

二十三日 午前八時半より講堂にて運動會講評。

校長先生より統括的に、今回の運動會の成績良好なりし事、最後迄よく奮闘せる事、後始末のよく出来たる事の御話あり、守田先生より細部に渡つて尙今後大に勉強すべき旨の御注意がありました。

三十一 日 天長節祝日拜賀式舉行。

學校長の訓諭せられた大要
非常天災時の天長節祝日、陛下の尊き有難き御思召が恐懼に堪へざる事、新舊内閣諸公の勞苦より質素節約奮勵努力の實例を掲げられ國民の一段の緊張努力を要する事を力説せられました。

私共は此の際とても、聖壽の萬歳を祝福し奉るの情は溢れて居ますが、陛下の大御心を拜察し奉つて、更にいふべき言葉がないのでございます。
(本四 岩武千壽子)

本三菊	五一	野田	先生	伊藤	先生
本二梅	四九	森脇	先生	安富	先生
本二菊	四九	安富	先生	森脇	先生
本一梅	四九	柳原	先生	安永	先生
本一菊	五〇	安永	先生	柳原	先生
實二	四四	野田	先生	齋藤	先生
實一	三一	齋藤	先生	野田	先生

震災義捐金

九月一日關東地方大震災につき、罹災者救済のため本縣に於て、義捐金を募集されました際に、本校職員生徒の應募した義捐金額は左の通りであります。

- 一金百拾參圓 職員一同
- 一金九拾參圓 生徒一同
- 計金貳百貳拾參圓

母姉會

十一月三日、本校開校十一周年記念の當日、母姉會が開催されました。午後一時半一同會場に(講堂)入り、校長先生から

大要左の御話がありました後、各級別に級監に導かれて所定の教室に入り、約一時間母姉の方と級監の先生との御懇談が遂げられました。

校長先生のお話

今回の保護者會に母姉を主とした理由として、子供の教育は、學校のみによりて實蹟をあけ難きと特に家庭教育の中心は母ある事につきて、英國のエバージン夫人の言を例證されて、家庭教育の中心たる母姉の方と學校との提携の一層親密なるを要する旨の御話がありました。

次で高等女學校の學科が、生徒を人として高等普通の教育を授くるために選定されてある事、裁縫時間の減少、体育に對する眞の自覺、及び生徒現在の情況について詳細の御説明があり、最後に萩高等女學校の教育方針に言及され、社會の進運に後れざる様努むる旨の御話がありました。

菊花會

同日例年の通り、南園館及び作法室に於て、本校生

徒の菊花會が開催されました。林茂香翁の丹誠になれる鉢植の菊花及び、松楓庵社中の方々の生花は、本會に特に好意を寄せられて同所に陳列され、一段の光彩を添へられました。出品總數百五十餘點、母姉會に出席された方々を始め、多數の觀覽者があり薄暮會を閉ぢました。

篤志者芳名

自大正十一年十月至全十二年十月

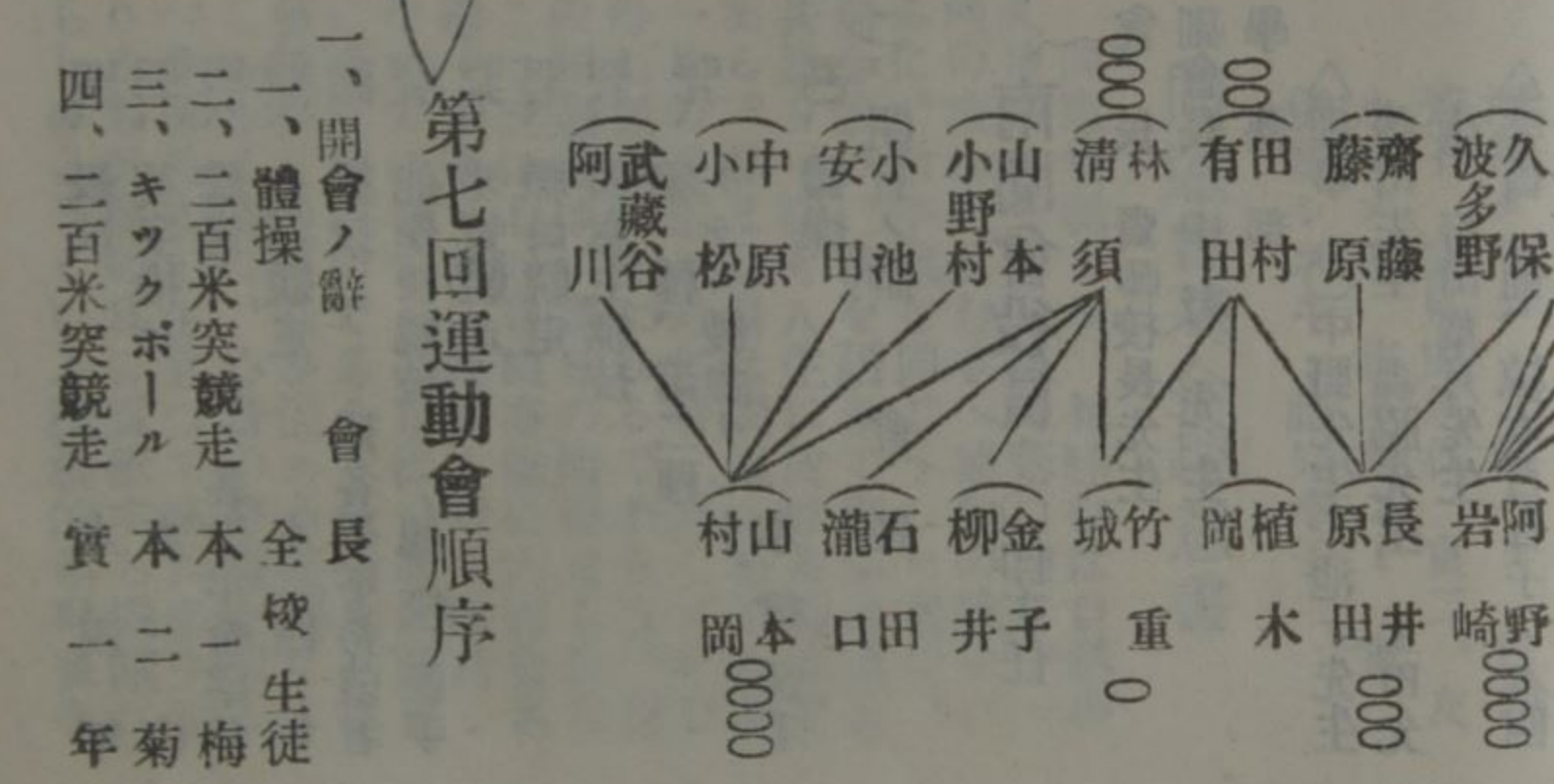
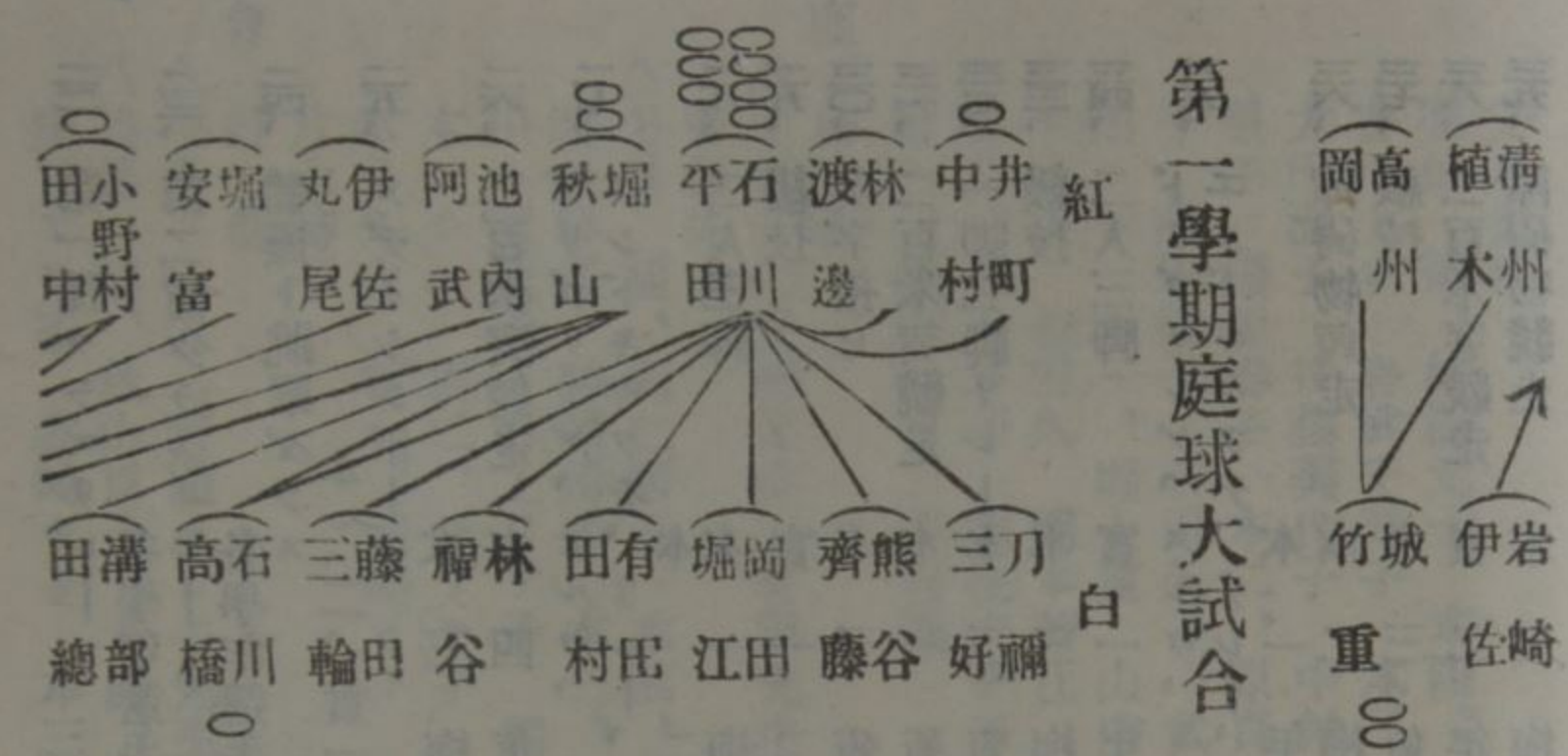
本校への御寄贈

從來も、篤志の方から、本校に對し多數の金圓物品を寄贈して戴いて居りましたが、昨年十月より本年十月までの間に於ても、左の通り澤山の御寄贈を賜りました。本校は適當の方法を講じて教育上に利用し、御芳志を無にせない様にして居ますが、こゝに芳名を掲げて感謝の意を表します。

- 山口縣立萩高等女學校
- 一、雨傘十本 大賀 兼吉氏 熊谷町
- 一、椎茸標本 品川 秋一氏 彌富村
- 一、蝸 標本 長屋 清二氏 堀内
- 一、貝類標本 神原 幸子氏 大首町

- 一、國志の聲前編 有田 音松氏 大阪市
- 一、下關史蹟一覽表 大深 武熊氏 豊浦郡
- 一、同 附圖 大深 武熊氏 豊浦郡
- 一、鐘乳石一個 張 忠一氏 川上村
- 一、石筍一個 張 忠一氏 川上村
- 一、風俗繪葉書 神原 幸子氏 長州新聞社内
- 一、正裝用被服 神原 幸子氏 長州新聞社内
- 一、彈丸入袋 神原 幸子氏 長州新聞社内
- 一、頸飾 神原 幸子氏 長州新聞社内
- 一、鶴割製標本 松原 翠氏 江向
- 一、露國紙幣綴込 西林 鴻介氏 堀内
- 一、露國紙幣綴込 西林 鴻介氏 堀内
- 一、露國紙幣綴込 西林 鴻介氏 堀内
- 一、木ノ葉蝶 丹羽 孝子氏 江向
- 一、水牛ノ角 丹羽 孝子氏 江向
- 一、顯微鏡 菊屋剛十郎氏 吳服町
- 一、ミシン器械 全
- 一、露國飢饉寫眞帳 西林鴻介氏 堀内
- 一、鼈甲櫛 石田 久子氏
- 一、ミシン器械 森田 豊吉氏 福川村
- 一、ダイナモ 全

9



- 一、開會ノ辭 會長
- 二、二百米突競走 本校生徒
- 三、キックボール 本一
- 四、二百米突競走 實一
- 五、ドリブリング、スルウ、
- 六、二人三脚 本一
- 七、キャブテンボール 本三
- 八、級技 本二
- 九、二百米突競走 本二
- 一〇、ドリブリング、スルウ、
- 一一、エンドキャッチ、リレー 補、本四、實一、二
- 一二、級技 本一
- 一三、地球送り 本一
- 一四、體操ト跳躍ダンス 本三、四、實一、補
- 一五、二百米突競走 本二
- 一六、難關クマリ 本一
- 一七、級技 本一
- 一八、潮干狩 實二
- 一九、ハードルリレー 本二
- 二〇、二百米突競走 本三
- 二一、級技 本二
- 二二、ジャンケン戦 本一
- 二三、番外 幼稚園

本會記事

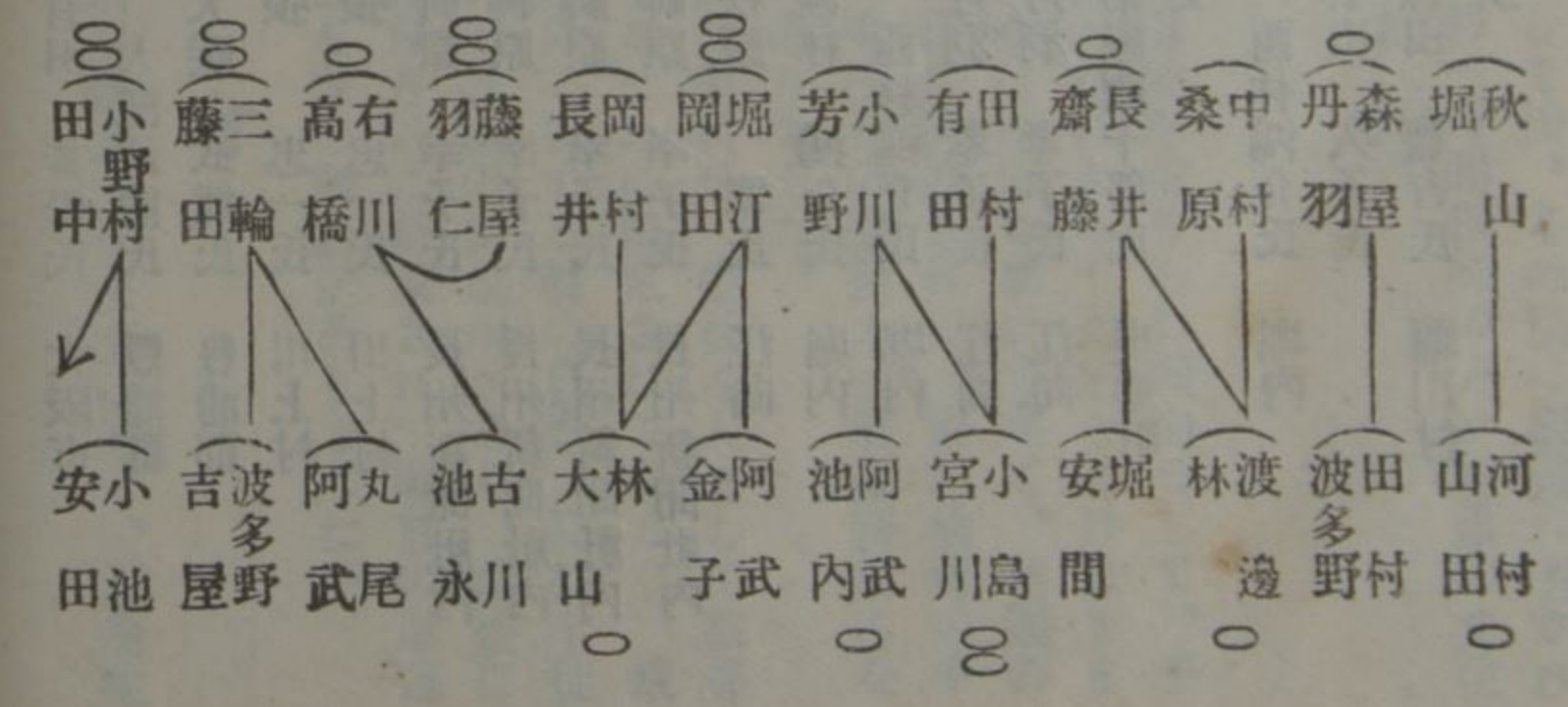
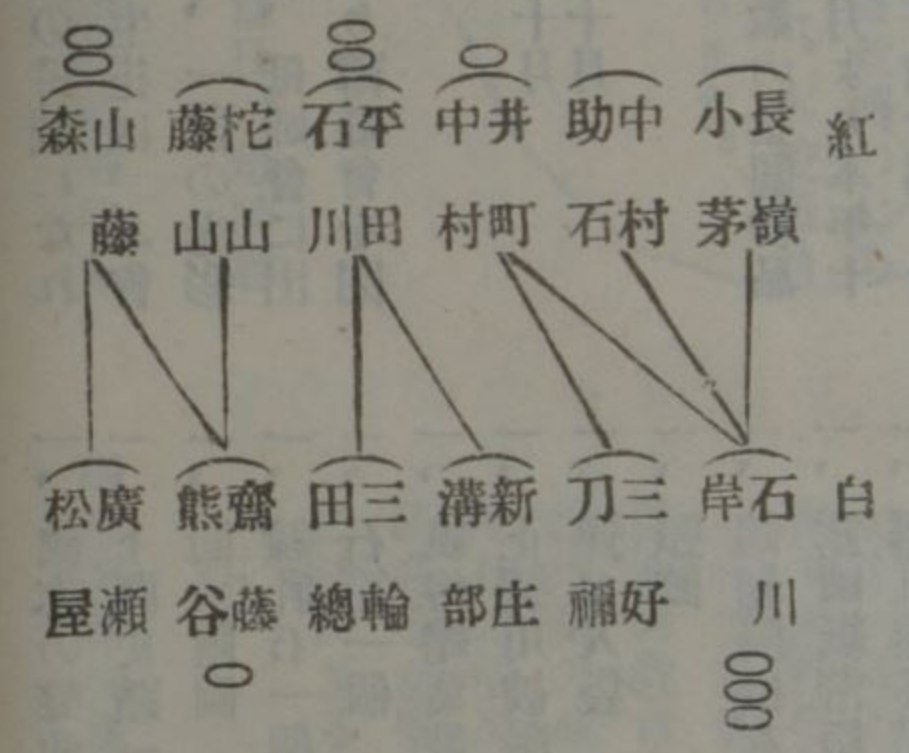
同窓會主催大音樂會

大正十二年八月七、八日九州成
樂團員十八名を聘し、同窓會主催
長州新聞社後援の下に、母校に於
て、管絃樂聲樂大音樂會を開催し
た。かういふ大規模の音樂會は當
地にては、始めてのことにて入場
者多く殊に八日の夜は立錫の餘地
なきまでの盛況を呈した。

第十回同窓會

第十回同窓會は八月八日午前八
時より母校に於て開催した。恰も
同日は九州成樂會の大音樂會あれ
ば、一同午前中は之を聴き、其の
後作法室に會合して、茶菓を喫し
ながら、歡談嬉語在校當時を追憶
し、舊情を温めた。其の後齋藤會
長は、實例によりて時代思潮を批
判せられ、中野副會長は、本會の
活動に關する感想、並に將來の希

學年末庭球大會



- 三、第一種クラスリレー 各學年選手
- 三、第二種クラスリレー 各學年選手
- 二、體操ト跳躍ダンス 本一、二、實一
- 二、メデイシンボール 本三、梅
- 二、二百米突競走 本四、年
- 二、ドリブリング、スルウ、
- 二、エンドキヤツチ、リレー、
- 二、二人三脚 本一、梅
- 二、級技 實一、二
- 二、英字拾ヒ 本三、菊
- 二、二百米突競走 本一、菊
- 二、一脚二脚リレー 本三、菊
- 二、級技 本三、梅
- 二、二人三脚 實一、年
- 二、ドリブリング、スルウ、
- 二、エンドキヤツチ、リレー、
- 二、障礙物競走 本一、梅
- 二、級技 本三、菊
- 二、二百米突競走 本二、年
- 二、障礙物競走 本二、梅

- 四、級技 本四年
- 四、英字拾ヒ 本三、梅
- 四、體操 各學年希望者
- 四、系巻競走 本四年
- 四、級技 補各學年希望者
- 四、他學校競技 他校選手
- 四、來賓競走
- 四、職員競走
- 四、同窓生競技
- 四、第一種、第二種
- 四、クラス優勝リレー 本校選手
- 二、閉會ノ辭 會長

南園會役員 ○印主任

- 會長 齋藤校長先生
- 副會長 中野先生
- 學藝部
- △理事 ○中野先生 池上先生
- 藤田先生 森脇先生 上田先生
- 生 野田葉月先生
- △委員 補、椋木百合子 本四

運動部

- △理事 ○守田先生 伊藤先生
- 田淵先生
- △委員 補、田總ユキ 本四、
- 井町スミ 三好榮子 本三、
- 高橋ミチ子 内田恭子 秋山
- 千代子 石川ナツ子 本二、
- 阿武ヨシ子 丸尾喜美子 藤
- 田敦子 金子萩野 本一、馬
- 來喜美惠 能美青子 安達叔
- 子 山本叔子 實二、阿武フ
- 子 田村キク 實一、堀尾
- 静代 伊藤コト
- 會報部
- 理事 ○柳原先生 安富先生

- 安永先生
- 委員 補、村橋元子 本四、
- 香川トヨ 岩武千壽子 本三
- 大田温子 後藤美代子 中村
- 子 齋藤春子 本二、原貞
- 子 藤田鶴子 石田久子 武
- 田トシ 本一、堀上重 山中
- リヨエ 和田久 岡本芳江
- 實二、有吉榮子 福住ミチ子
- 實一、徳重イソ 吉村操
- 庶務部
- △理事 ○安野先生 有田先生
- 齋藤先生
- △委員 補、羽仁素子 本四、
- 渡邊房江 神崎清子 本三、
- 川上富貴子 村上フサ子 岡
- 本トシエ 實二、林アキ子
- 水島久代 實一、河崎イト
- 片山時子
- 會計部
- △理事 ○欠 野田ヨシ子先生
- △委員 補、秋山京子 本四、
- 長井アヤ子 赤崎キク 本三

同窓會基金趣意書

同窓相親しみ、和睦むは自然の人情である。一樹の蔭に宿り、一河の流れを汲むさへ他生の縁といふに、數年窓を同じうした者が、舊を懐ひ、新を語りて喜ぶは萬人共通で、而も人生に於ける暖味である。たゞひ身は異境にあつても一片の音信を得た時、誰しもいひ得ぬ靈感にうたれるであらう。我々同窓會は、總會の開催せられるに際し、七同會員亦既に六百有名餘。校運と共に此會も年々隆昌となつてのきつ、あるは、眞に慶賀に堪えない所である。今や此會は會員相互の舊情を温める機關たりしめると共に、心身の修養を圖るべき所まで生立つて來た多少なりとも社會の爲に貢献する機關たりしめようといふ積極的の計畫を

立てるべき城まで進んで來た。のみならず日新の世は吾等の油断をゆるさぬ。少しでも怠つて居ると時勢に遅れることを免れない。是を以て總會當日又は夏季休業の際なきに、本會主催の講習會の開催若しくは有益な圖書を巡廻せしめて會員相互の堅實なる修養を圖り日新の知見を廣めると共に、一般の婦人もなるべく之に加はることを得せしめたならば、此會も益々有益意義なるものとなるべきである。加之老いたる人を慰めることや、世のあはれなる人を助けることは婦人のなすべき行の中で、最も尊くて奥床しい事であれば、此會の事業として甚だ適當な事である。年々一回催す總會も會費の爲に出席に影響するやうなことがあつては誠に残念である。以上述べたことに對する經費の外、會員の近況調査や、通信などにも多少の經費を要する。將來同窓會をして益々發展せしむるは、相當の經費を支出することにはやむがたい事情である。此會の進展と

時務は我等の奮起を促して止まぬ。今の時は躊躇逡巡して居るべき時でない。これが本會に基金を蓄積して其活動を大ならしめやうとする唯一の動機である。近時會員中既に此議を提起するものあり依つて本年八月の總會に於て、之を會員に諮りしに、萬場一致を以て可決せられる所となつた。乃ち當日出席せられぬ同窓會員諸姉や江湖の諸彦の同情に訴へて、其賛同を乞ふ所以である。

大正九年八月
山口縣立萩高等女學校同窓會

同窓會基金募集規則

- 一、基金ハ其利子ヲ以テ同窓會ノ事業ヲ助ケ其發展ヲ圖ルモノトス
- 二、基金ハ同窓會員並ニ一般篤志者ノ寄附ニ俟ツモノトス
- 三、基金ノ寄附ハ五拾錢以上トス但幾回ニ分納スルモ妨ゲナシ
- 四、基金ノ寄附ハ直接萩高等女學校ニ申込ムカ又ハ各區支部幹事

ニ申込ムモノトス

但遠隔地ニ在ルハ山口縣立萩高等女學校（振替貯金口座番號 福岡一八一四）ニ拂込ムヲ便トス此場合ニ於テハ裏面通信欄ニ同窓會基金寄附ノ旨記載ヲ要ス

五、基金寄附者ノ氏名並ニ金額ハ南園會報ニ掲載スル外同窓會基金寄附臺帳ニ登錄シ永ク其芳名ヲ留ムルモノトス

六、基金ノ利子ハ同窓會ニ使用スル外毎年利子ノ十分ノ一ヲ元金ニ繰入レ其増殖ヲ圖ルモノトス

七、基金ノ保管ハ同窓會長之ニ當リ之ニ關スル細則ハ別ニ之ヲ定ム

同窓會寄附芳名

金拾圓宛 増山 靜子 小宮 トヲ
金五圓宛 柳井 春枝
金三圓宛 陶村 園子
金二圓宛 井町 スミ子 北川 恒

横山シナ子

金壹圓七拾錢宛 野田ヨシコ
金壹圓宛 神原 幸子 三浦 君子
玉木はつ代 須子美登里
金五十錢宛 谷井きく 田淵よし

同窓會基金現在高

金參百六拾壹圓八拾七錢也

（十月末）

附記 本基金は卒業の際南園會校外會員寄附金壹圓の分とは別途です。

南園會基金現在高

一金貳千壹百貳拾參圓貳拾錢也
（大正十二年十月現在）

△會告▽

一、名簿について

- 1、本號卷末の會員名簿に相異の點がありますならば、御自分のは勿論、ごなたのでも御氣付の方は御一報願ひます。
- 2、今後氏名本籍近況等は異動の際も同様です本名簿外に、御姓の變つた方は、舊姓「何々」ご御附記を願ひます
- 3、校外會員の方で、名簿の上に「○」の符合のない方は、校外會員費金壹圓御送附下さいませ。但し校外會員費ご御附記願ひます。

一、會報代について

1、會報代は次號から、校外會員費完納の方は三十錢、其他の方は三十五錢にて配布する事になりました。年々會員の増加につれ、記事が増し頁數が重むので誠に止むを得ません。本號の如きも、百六十頁に餘り多額の豫算を

赴過して居ます、悪からず御了承の上、次號會誌配布を希望せらる、方は、添付の振替用紙にて御送金下さる様願ひます

振替口座 福岡第一一八一四番

2、送金は如何なる方法でもよろしくあります「第何回卒業生」だけは決して御洩しになぬ様に願ひます。

一、會員の消息について

1、本誌に皆さんの通信や、消息を掲載する事は本誌の非常に歓迎して居る所であります。もし御通信下さる譯には行きませう。校外會員文壇も大に賑やかませう。

一、本誌に對する御感想について

本誌に對する御感想、は御希望等憚りない所を御寄せ下さいますならば、次號編輯上非常に仕合せます。

山口縣立萩高等女學校内

南園會々報部

本校開校十周年
記念南園文庫

大正十二年十一月三日本校開校十周年記念式に際し、本校卒業生諸子の協議に依り記念文庫を設置することとなり、費金募集中であつたが、多数有志者の御好意により寄附金額貳千參拾參圓五拾六錢、寄贈圖書貳拾九冊の多きに達した依て本會に於ては既に文庫設置に取りかかり、事業音々進捗し、現今に於ては、左記の事項を實行して居る。

- 一、設備上の都合と、閲覧者の便利のため、現今では本校舎本館の一室なる圖書室に高さ壹間長さ三間の書籍戸棚を備付けなほ同室に閲覧用の机、腰掛等を排列して、此處を閲覧室として居る。
- 二、購入せる書籍六百二十三冊、此の金額壹千參百六拾圓八拾七錢、尙續々購入の豫定である。
- 三、雜誌令女界、愛國婦人、寫眞通信、ABC等を購入し、學校職

員購入の新聞二三種と共に之を閲覧室に備付けて居る。
四、これまで隨時希望者に閲覧させて居たが、十一月から本校職員、生徒、及び卒業生等に公開することとした。但し當分は卒業生に限つて持出を許します。
(十一月十一日現在)

南園文庫設立寄附芳名

金額	寄附者氏名	金額	寄附者氏名
一、〇〇	神崎 清子	二、〇〇	丹羽 孝子
一、〇〇	今地 ヒデア	二、〇〇	池永 升雄
一、〇〇	今地 ヒデア	二、〇〇	鈴賀 ハル
二、〇〇	山藤 エエ子	一、〇〇	吉村 ナス
一、〇〇	吉賀 ヒナコ	一、〇〇	三隅 久子
一、〇〇	前田 ユキ子	一、〇〇	久保田 千代
二、〇〇	木村 静子	二、〇〇	河村 千代子
一、〇〇	村橋 元子	一、〇〇	助石 あさ子
一、〇〇	小野 フサ	五、〇〇	河村 重信
三、〇〇	大深 基	二、〇〇	阿武 重信
二、〇〇	大田 キク	二、〇〇	福富 良子
二、〇〇	村上 コト	二、〇〇	野上 ヨシコ
二、〇〇	阿野 重子	二、〇〇	吉田 シヅコ
一、〇〇	井町 ウメ	一、〇〇	熊谷 綾子
三、〇〇	若松 キサ	三、〇〇	竹内 恒子
三、〇〇	兒玉 章子	三、〇〇	秋山 住重
三、〇〇	中津江 ミチ子	三、〇〇	岡本 テル子
二、〇〇	河上 フサ子	二、〇〇	長谷 シツ
二、〇〇	松林 カツ子	二、〇〇	笹井 フサ子
二、〇〇	山本 糸子	二、〇〇	進東 秀
二、〇〇	三浦 アヤ	二、〇〇	五峯 シン子
二、〇〇	山中 照子	二、〇〇	河野 雪子
二、〇〇	國重 清子	二、〇〇	渡邊 ハツ子
一、〇〇	宮内 佐吉	一、〇〇	山根 芳子
一、〇〇	桂 竹子	一、〇〇	横山 アサ
一、〇〇	今津 シツ子	一、〇〇	阿武 フツ子
一、〇〇	桑原 小春	一、〇〇	中村 房子
一、〇〇	大和屋 静子	一、〇〇	河崎 一子
一、〇〇	長谷川 源次郎	一、〇〇	宮川 ヨシ子
一、〇〇	長谷川 ヲネ子	一、〇〇	刀瀬 フユ子
一、〇〇	島本 ヨシ子	一、〇〇	大島 ヨシ子
一、〇〇	植村 マサコ	一、〇〇	堀 小ト
一、〇〇	砂 久子	一、〇〇	茂刈 チエ子
一、〇〇	上田 タネコ	一、〇〇	松浦 ヒサ子
一、〇〇	有吉 ノブコ	一、〇〇	藤山 於菟子
一、〇〇	松浦 ミサチ	一、〇〇	原 ユキ子
一、〇〇	國重 タツ子	一、〇〇	長崎 千枝子
一、〇〇	堀 フミ子	一、〇〇	三好 マツ
一、〇〇	中村 照子	一、〇〇	岡村 マス
一、〇〇	松岡 ミツ子	一、〇〇	榎木 サト
一、〇〇	小枝 千代子	一、〇〇	玉木 芳子
一、〇〇	黒瀬 久子	一、〇〇	長崎 芳子
一、〇〇	安 養 寺	一、〇〇	安 養 寺
一、〇〇	土井 幸徳	一、〇〇	久志 アヤコ
一、〇〇	安永 喜平	一、〇〇	山田 美子
一、〇〇	山田 美子	一、〇〇	山本 繁子
一、〇〇	大田 ユク	一、〇〇	岡 絹子
一、〇〇	山田 トヨ	一、〇〇	加藤 静江
一、〇〇	服部 貞子	一、〇〇	久保田 花子
一、〇〇	阿武 菊子	一、〇〇	森田 壽子
一、〇〇	江川 龜介	一、〇〇	福山 トシ
一、〇〇	國重 米子	一、〇〇	田中 文江
一、〇〇	植村 親	一、〇〇	溝部 キクヨ
一、〇〇	柳井 君子	一、〇〇	森重 消作
一、〇〇	村木 カツ子	一、〇〇	村木 カツ子
一、〇〇	村岡 ミドリ	一、〇〇	國弘 トメ
一、〇〇	能美 清子	一、〇〇	河北 由子
一、〇〇	坂本 シツ子	一、〇〇	岡 里子
一、〇〇	平井 豊市	一、〇〇	森尾 虎太郎
一、〇〇	齊藤 貞子	一、〇〇	中村 照子
一、〇〇	黒川 美智子	一、〇〇	安田 芳子
一、〇〇	中村 静子	一、〇〇	松田 巳彌子
一、〇〇	鈴木 房子	一、〇〇	伊藤 市三
一、〇〇	小野 村桑吉	一、〇〇	堀 幹子
一、〇〇	河村 綾江	一、〇〇	田總 ユキ
一、〇〇	藤井 オツギ	一、〇〇	小倉 ミサオ
一、〇〇	藤井 藤江	一、〇〇	藤井 藤江

一、〇〇	島本 千代子	三、〇〇	小原 彌一郎
一、〇〇	齊藤 文吉	三、〇〇	福永 安介
一、〇〇	中村 トキ	二、〇〇	桂 ヒナコ
一、〇〇	吉山 良吉	二、〇〇	三輪 音吉
一、〇〇	竹重 忠吉	一、〇〇	藤屋 春子
一、〇〇	藤井 松工門	一、〇〇	新庄 陽介
一、〇〇	新庄 貞子	二、〇〇	宮川 秀子
一、〇〇	下井 志津子	二、〇〇	松浦 ツギコ
一、〇〇	頓野 富美子	三、〇〇	松浦 松子
一、〇〇	金子 ヨシ子	三、〇〇	信常 壽子
一、〇〇	重岡 キヨ	一、〇〇	山根 キク
一、〇〇	宮本 マスエ	三、〇〇	中谷 スエ
一、〇〇	高村 ミネエ	一、〇〇	田中 ツル
一、〇〇	岸 ミドリ	三、〇〇	小澤 ハツ
一、〇〇	林 フサ子	一、〇〇	岩崎 サエ子
一、〇〇	村田 トメ	一、〇〇	吉武 フツ子
一、〇〇	小河 花枝	三、〇〇	林 静子
一、〇〇	内藤 芳子	一、〇〇	井上 雪枝
一、〇〇	山根 千勢	二、〇〇	河村 スミ子
一、〇〇	藤原 静子	一、〇〇	平田 タキ子
一、〇〇	中村 百合子	三、〇〇	田口 雪枝
一、〇〇	麓地 ナホ	一、〇〇	増山 菊子
一、〇〇	後東 かつ子	二、〇〇	鈴木 久子
一、〇〇	山本 貞太郎	一、〇〇	大津 友太郎
一、〇〇	中村 ツネコ	一、〇〇	横山 ミチコ
一、〇〇	中村 秀子	一、〇〇	岸 愛子

五、〇〇	渡邊 直三	一、〇〇	中村 前子	一、〇〇	阿川 榮子	五、〇〇	岡田 八重子	二、〇〇	藤井 静子
三、〇〇	三浦 テル	一、〇〇	山中トキ子	二、〇〇	伊藤ミドリ	二、〇〇	中村 エイ	二、〇〇	金田 トキ
三、〇〇	南方 京子	三、〇〇	田中 清三	二、〇〇	山田マサ子	五、〇〇	坂口 タカ子	三、〇〇	阿武フミオ
二、〇〇	伊佐 富子	二、〇〇	小川ミヅ子	二、〇〇	田中 静子	二、〇〇	今田 尚子	二、〇〇	中村善次郎
二、〇〇	中原 豊子	一、〇〇	福住ミチ子	二、〇〇	平岡ハルヨ	一、〇〇	中村ツル子	二、〇〇	吉原 ヒナ
一、〇〇	岡 浪子	一、〇〇	伊藤 菊子	二、〇〇	桂 静江	二、〇〇	齊藤 ミチ子	二、〇〇	山崎 貞
三、〇〇	片山 満子	一、〇〇	山本 幸	三、〇〇	小野 君	一、〇〇	伊藤ミチ子	二、〇〇	福永 フサ
三、〇〇	馬庭タメエ	一、〇〇	大崎トシ子	三、〇〇	田中 君	一、〇〇	松永カヅ子	二、〇〇	山口屋シナ
一、〇〇	紫田シツエ	一、〇〇	佐田 初枝	一、〇〇	河邊 齋	三、〇〇	大谷 キク	二、〇〇	尾板喜代子
一、〇〇	淺淵千勢子	三、〇〇	飯田 静江	三、〇〇	河邊 サト	三、〇〇	原 スミコ	二、〇〇	土田百合子
一、〇〇	平野千代子	二、〇〇	服部 貞子	一、〇〇	金子 ハツ	二、〇〇	椋木 アサ	二、〇〇	田坂アヤ子
二、〇〇	藤田イセ子	二、〇〇	伊藤 睦子	一、〇〇	豊田 ヨシ	一、〇〇	河村 操子	二、〇〇	大和 直子
一、〇〇	有田 緒子	二、〇〇	久保田ヨシ	二、〇〇	仁羽 朝子	一、〇〇	水本 チヨ	二、〇〇	中村 スミ
三、〇〇	能美 ヨシ	二、〇〇	河崎 好子	二、〇〇	矢野 ヒサ	一、〇〇	國光フキ子	二、〇〇	柴田 キク
三、〇〇	黒田 愛江	一、〇〇	坂本 タカ	三、〇〇	宮川 末子	一、〇〇	松來美代子	二、〇〇	福谷 繁子
三、〇〇	藤村 峰子	二、〇〇	阿武 竹子	三、〇〇	小池 壽子	一、〇〇	福田 和子	二、〇〇	金國テル子
二、〇〇	米原ハツメ	二、〇〇	橋羽イチ子	三、〇〇	廣 トシコ	一、〇〇	吉澤 文子	二、〇〇	藤原 米
三、〇〇	大本カツノ	一、〇〇	中原 春江	三、〇〇	關田 テル	三、〇〇	長井アヤ子	二、〇〇	通計貳千〇參拾參圓五拾六錢也
三、〇〇	伊藤喜代子	一、〇〇	松尾 蕙	三、〇〇	吉野 愛介	三、〇〇	田村 長子	二、〇〇	向、本寄附金は、これを以つて
三、〇〇	蓮池八重子	一、〇〇	佐方 敏子	三、〇〇	松浦 文子	三、〇〇	椿 マス子	二、〇〇	打切りにしたのではありません。
三、〇〇	佐久間ユキ	一、〇〇	市原 安子	三、〇〇	安井 フユ	三、〇〇	全 人 母	二、〇〇	引き續き受領して居ますから、本
一、〇〇	河上ヨシコ	一、〇〇	兒玉 貞子	三、〇〇	桑木マツ子	三、〇〇	小野 静子	二、〇〇	企に御賛成の方は随時任意の方法
一、〇〇	小池キヨ子	二、〇〇	大田 悌助	三、〇〇	吉田ヨシ子	三、〇〇	小川 十郎	二、〇〇	によりて、御寄附下さる様に願ひま
三、〇〇	小野ヨシ子	二、〇〇	豊田喜代子	三、〇〇	山根 辨作	三、〇〇	山根 敏子	二、〇〇	す。
三、〇〇	佐々木民子	二、〇〇	吉田 千代	三、〇〇	山根 辨作	三、〇〇	桂 壽子	二、〇〇	
一、〇〇	村田 榮子	二、〇〇	河野 新穂	三、〇〇	竹原安次郎	三、〇〇	内田 静子	二、〇〇	

五、〇〇	森脇美禰子	一、〇〇	阿武俊次郎	三、〇〇	井上マツコ	三、〇〇	時山 綾子	三、〇〇	藤田 俊子
一、〇〇	有田 菊植	一、〇〇	小野村次郎吉	三、〇〇	小埜ヒサ子	二、〇〇	上野 ユキコ	二、〇〇	村木 ヤス
二、〇〇	齋藤千代子	一、〇〇	岡 ヲチヨ	三、〇〇	佐伯 清子	一、〇〇	松永 敬子	三、〇〇	有田 ミサ
二、〇〇	原 千世子	一、〇〇	横見タケ子	一、〇〇	原 敏子	一、〇〇	高木フミコ	二、〇〇	七三〇本校職員一同
四、〇〇	〔安原 昌一〕	二、〇〇	北川セツコ	一、〇〇	植村サチコ	二、〇〇	石井キミコ	三、〇〇	秋本 綾子
三、〇〇	谷井 信子	二、〇〇	長屋 清一	二、〇〇	田村 小一	一、〇〇	友永光五郎	三、〇〇	山崎 サチ
三、〇〇	藤田ヨシコ	一、〇〇	山根 清一	二、〇〇	和谷川サダ	二、〇〇	小野トキヨ	三、〇〇	玉木千代子
一、〇〇	伊藤 ヨシ	一、〇〇	梅田カヅ子	二、〇〇	窪田ヨシ子	二、〇〇	笠井 芳江	二、〇〇	玉木ハツ子
二、〇〇	佐伯 政吉	二、〇〇	安富 暢熊	二、〇〇	長谷川サダ	二、〇〇	玉井 映子	二、〇〇	守重 志津
一、〇〇	末岡 周介	二、〇〇	賀田 以武	二、〇〇	松浦 コウ	二、〇〇	川口 信子	二、〇〇	須子 繁一
二、〇〇	橋口シツ子	二、〇〇	吉津 ツギ	二、〇〇	坂上 敏子	二、〇〇	谷川トミ子	二、〇〇	藤井 文子
一、〇〇	田中トシ子	二、〇〇	藤田 トエ	二、〇〇	佐々木ツチ	二、〇〇	河村テル子	二、〇〇	長 隆太郎
一、〇〇	中村ヤエ子	二、〇〇	山内 淑子	二、〇〇	原 テルコ	二、〇〇	村田 磯子	二、〇〇	波多野ナツ
二、〇〇	中村花子	二、〇〇	山縣アサ子	二、〇〇	坪井 多津	二、〇〇	板本 勝子	二、〇〇	鈴木 美徳
二、〇〇	齋藤 花子	二、〇〇	安田 貞子	二、〇〇	藤山 彌一郎	二、〇〇	溝部 勝子	二、〇〇	笹村ヨシ子
二、〇〇	井町ヒサ子	二、〇〇	山中 シゲ	二、〇〇	時山市太郎	二、〇〇	弘 ヒサコ	二、〇〇	竹重 捨熊
二、〇〇	山下 キエ	二、〇〇	木村 貞子	二、〇〇	中村 彌兵	二、〇〇	都野 素行	二、〇〇	大谷 四郎
二、〇〇	藤井 真子	二、〇〇	山藤ヤス子	二、〇〇	松本ヒシコ	二、〇〇	岡馬 千代子	二、〇〇	倉重 フミ
三、〇〇	安田 清子	二、〇〇	森田ミチ子	二、〇〇	村田奈美子	二、〇〇	岡田 リヨ	二、〇〇	木永 繁子
三、〇〇	三源 幸子	二、〇〇	佐々村淑子	二、〇〇	末武 満子	二、〇〇	岡田 カツ	二、〇〇	吉田ミホ子
二、〇〇	末武千代子	二、〇〇	池上 キク	二、〇〇	高橋大次郎	二、〇〇	村谷キク	二、〇〇	齋藤マホ子
二、〇〇	伊藤ヒデ子	二、〇〇	河村 貞子	二、〇〇	伊藤 政治	二、〇〇	小川 喜作	二、〇〇	山川 文子
二、〇〇	吉村 富一	二、〇〇	大草千代子	二、〇〇	村田伊勢松	二、〇〇	清須 勝助	二、〇〇	河野 千世
二、〇〇	白井アキコ	二、〇〇	平野 花子	二、〇〇	世良 菊野	二、〇〇	岡 シゲ子	二、〇〇	波多野清浪
二、〇〇	岡田 滿枝	二、〇〇	種子 綾	二、〇〇	内田 一心	二、〇〇	時山トシコ	二、〇〇	三宅美智子

一、藤行の母刊行
前號所載、昨年當校開校十周年
記念學藝會に於て、滿堂の喝采を
浴び、教育關係新聞雜誌から激稱

された、本校中野先生の創作にか
、はる「藤公の母」は田中寅之助
原田彦四郎兩氏の作曲が出来まし
たから、名古屋市東區前ノ町一三

成樂會より、「唱歌劇藤公の母」定
價五拾錢と題して出版されまし
た。

豫 告

貴重な紙面の餘白をかる事を御許し下さ
い。
私共は今回同志の先生方と共に、女子を
主體とした雑誌を刊行致します。勿論これ
は、女學校及び南園會からではなく全く獨
立して刊行するのであります。
目的等々仰々しいですが、健實な女子の
讀物を提供して、婦徳涵養の一助とするこ
共に、郷土藝術の鼓吹、地方實生活の改善
及び、各自の尊き感想印象を録する事に於
て、現在多くの婦人雜誌や少女雜誌より別
の使命を持たせたいと思ひます。
従つて拙くとも、小さくとも、血の流れ
て居る、少くとも生命のあるものを刊行し

たいと力んで居ます。さうぞ皆さんの御後
援を祈ります。
組織は會員組織とし、創刊號の原稿は、
明年一月十五日に締切ります。種類は何で
も宜しくあります。たゞ眞剣であつて欲し
いと思ひます。御投稿を祈ります。
詳細は第一號で申述べます。配本は廣く
一般の方に致します。御希望の方は葉書に
て締切日迄に御申込み下さい。誌代は發行
後戴きます。一部二十錢、暫く隔月に發行
いたします。御投稿、御照會、又は御申込
は、當分左記にあて、下さい。

萩町平安古
柳原良助

秋の園

學年末庭球大會

卒業生送別の意味で三月二十日
開催された庭球大會は、質からい
つても成績からいつても立派な
ものでした。殊に新進平田石川組
は最も將來ある組として、當日の
花たるを失ひません。
白軍の大將 岸、石川組の奮闘
振り目撃しいものでした。井町
中村組を以て、中村助石組に勝
ち、餘勢を以て遂に、紅軍の大將
長嶺小茅組を組み伏せて、優勝の
桂冠を得ました。敗れたりは、いへ
桂助中村組、長嶺小茅組の手腕は
流石に當校に覇をなして居た。け
の價値は十分にありました。

第一學期庭球大會

此日天晴れて氣暖かく、絶好の
庭球日和でありました。紅軍の新
進、副將平田石川組は白軍六組を

斃して、大將三好、刀禰組と對戦
しました。三好さんの正確な守備は、攻
撃と、中村さんの沈着な守備は、時利
屢々相手を壓迫しました。が、時利
あらず、遂に平田石川組をして、
名をふるめました。平田石川組
は手をゆるめず味方の大將、井町
中村組と對峙しました。熱達し切
つて平田、石川組には聊も疲勞
の色なく、全勝の意味をもつて當
り、平田さんのスマツシング偉功
を奏しました。が、井町さんの球勢
甚だ強く、刀禰さん又味方の危地
を救ふて、遂に平田石川組に最後
の名をなさしめませんでした。勝
つたものも負けました。その堂
々たる戦ひ振りには實に立派なもの
だが出さな一方がよくはなかつ
たでせうか。

卒業生送別會

在校生、主として三年生の御賞
折り、例年の通り、卒業生送別
會が講堂で開かれました。當日の
餘興も頗る精選されたもので、校
長先生の御批評にもあつた通り、生
少しも下品な處がなく、上品に生

々しく行はれ、非常に愉快に感じ
ました。
本一梅の講話談話はあつさりし
て居ました。杉山さんのウイッテ
も、藤田さんのルーズベルトも上
出来でした。
本一菊の少女の機轉は、石田さ
んの獨逸兵が活潑で、命令の如き
徹底して、石田さんにあれだけの
事が出来るか知らんさまで思はれ
て感心しました。
本二梅のエンゼルの歌は、落つ
きがありましたが、聲が小さかつ
た様に思ひました。大田さんの少
女の寝がへりも、後藤さんの先生
もよく表情があらはれて、平田さん
の本二菊の鶯宿梅では、平田さん
の勅使もよかつたし、ダンスも女
神も、内侍もよく出来ましたが、
能美さんの下來はほんどうによく
出来ました。紋付を着て短い袴で
尚更結構でした。これは能美さん
の外には出来ません。伊藤さんの牛
若丸も、三好さんの伊藤さんの牛
身仕度も、三好さんの伊藤さんの
た。三好さんがカサツと飛ばした
を、伊藤さんがピンと飛ばした。

舊特別會員

阿武郡佐々並村(死亡)
厚狹郡役所
廣島市國泰寺町(豐田)
東京市麴町區平河町五ノ一〇(松宮)
大分縣立高田高等女學校
(動靜不明)
岡山縣井原高等女學校
福岡縣中學校在職
阿武郡萩町土原
同 同 河添
同 德佐村
東京府西巢鴨町字池袋三二七(安藤)
名古屋市私立東海中學校
阿武郡萩町平安古
靜岡縣立高等女學校(井上)
神奈川縣小田原高等女學校(沼田)
橫須賀市公郷二三八二(齊藤)
都濃郡福川町
阿武郡萩町河添
山口縣都濃高等女學校
縣立山口高等女學校

松田ハル
三隅要之助
植村秀枝
細居シヲ
高田夏哲
河原直子
坂口五郎
山内清次
中野スエ
藤井二郎
今井チエ子
山田兵吉
飯塚マツヨ
北川恒
大谷タカ
田中タカヨ
田村繁
米原鶴太
本永旭

埼玉縣北埼玉中條村字今井(八木)
下關市武久園(田村)
和歌山縣有田郡元(坪野)
福井市尾上中町(奈良)
門司市
山口縣立萩中學校(平安古)
東京市外高田町雜司ヶ谷金山三三九(藤野)
佐波郡出雲村
山口縣立萩中學校
阿武郡萩町江向(死亡)
同 同 東田町
熊毛郡室積町山口縣女子師範學校
群馬縣相生中學校
阿武郡萩町江向
滋賀縣彦根高等女學校
神戸市千島町三丁目四番地
廣島市上流川町廣島女學校
愛知縣西尾町西尾高等女學校
阿武郡萩町古萩(荒川)
阿武郡萩町新堀
山口縣立岩國高等女學校
阿武郡萩町惠美須町
名古屋市東區白壁町二ノ二(齊藤本邸内)

井桁コサミ
進藤シヅメ
三崎シヅメ
古津禮起子
河村タケロ
田總百合之助
馬淵カネ
重本マサ子
中津江延彦
福島城清
三輪マサ
堀江ウタコ
石橋孟
堀上ヨシ
西村キヨ
長澄市衛
五十崎和
中村ヒエ
伊藤セイ
中村彌兵
關田眞
河村一郎
世真ハル

校外會員

實科第一回

(大正二年三月卒業) (年齡順)

氏名 舊姓 本籍 現住所
松野ユキ 阿、萩土原 在下ノ關(住所不明)
松浦コウ(伊藤)同、同 福岡縣大里町柳區北方
松本早和 同、東田町 土原新橋
梅田カヲ(宮本)同、南片河 朝鮮京城大和町三ノ一
金田トキ 大、瀬戸崎
大草政子(山本)阿、萩平安古(死亡)補
山本幸 同、同濱崎
水木ナヲ(倉田)同、同魚店町、山口町上金古曾
山口エシ(津田)同、東田町 大阪府下天下茶屋交翠園
井原ミツ 竹内)同、惠美須町、京都府加佐郡志樂坂吉坂鐵道官舎
河崎スエ(中島)厚狹郡舟木町字小野
高垣清子 阿、萩古萩
田中冬子 同、椿村 (死亡)
伊藤ミドリ(齊藤)同、大井村 福川村

實科第二回

(大正三年三月卒業) (年齡別)

山下歌子(小澤)同、椿村 臺灣嘉義斗六堡東洋製糖會社斗六製糖所
久保田ミサ子 福岡縣小倉市外中津口一五一
後藤ハル(田邊)阿、惠美須町、朝鮮鎮南浦明峽町
永井ミツ(村田)同、椿東村 東京市外中野町一九二七
佐々木フシコ 同、三見村 朝鮮咸鏡北道明川邑
金子ハツ 同、大井村
福岡サト(藤田)同、福川村 朝鮮京城青葉町二ノ九
長谷川サダ(野上)全、土原 明水小學校在職
倉田静子 同、西田町 東京府荏原郡蒲田町北蒲田七二五
藤井キク 同、德佐村 下關市岬之町大崎保太商店
大崎トシコ(平田)同、熊谷町 萩濱崎町
馬庭マヨ(金子)同、福川村 臺北市錦町郵便局官舎
松井チヨ(河上)同、橋本 大阪府東成郡住吉村字新開一二七七番地
津田桃代(金子)同、椿東村
安澤マサ(大岩)阿、萩新堀 朝鮮大邱府上町三
時藤シナ(松村)同、同江向
岡レシ(大崎)大、三隅村 阿、紫福村

桂 シツエ(國司)阿、椿村 山口町圓政寺
 ○十有 田 ミサ(阿部)同、吉部村 萩町今古萩
 ○十桑 木 マツ(多田)阿、椿東村 壺澤臺北龍口庄三四
 上 田 トミ 同、萩河邊 東京荏原郡池上四七西
 村方
 ○石津 喜與子(中村)同、同東田町、大阪府中河内郡
 ○草 刈 フ 同、萩河添
 ○上 田 信子 同、明木村 山口町伊勢門前堀内
 ○神 代 君子 同、萩河添
 ○玉 木 ナヲ(大賀)同、鹽屋町 岡山縣高梁町柿ノ木町
 ○十三 宅 節 美、大嶺村
 ○十五 木 ハツヨ(難波)阿、米屋町 廣島縣佐伯郡大野浦驛
 ○十吉 田 チヨ(原)同、萩土原 福岡縣喜望峯郡德波村平
 恒中島鐵業株式會社本部
 ○大野 アキ(森重)同、大井村 京城新龍漢江十一ノ三
 ○十木 原 八霜(伊藤)同、萩堀内 吳市寺本町一四七
 ●島 田 壽美 同、椿村 (死亡)
 ●内 藤 千代(堀)同、萩濱崎 補 (死亡)
 ●上 田 正子 同、椿村沖原(住所不明)
 ●高 橋 恭(小野)同、奈古村 (死亡)
 ○十難 家 キシコ(長見)同、鹽屋町 在大阪
 ○十桂 ヌキ(中原)同、椿東村 大阪府下王出町四八〇

○十安 達 ハナ 同、同
 ○岡 藤 ミヨコ(藤本)同、御許町 香川縣丸龜市風袋町中
 村方
 ○十原 キク 同、平安古
 ○田 中 千代(中原)同、同橋本 阿、佐々並村
 村 田 イシ(今地)同、川上村 神戸市湊川町二丁目一
 二〇
 倉 重 マサヨ 同、椿東村
 ○十小 野 キク(松村)同、萩江向 下關市後田三二一
 ○十坂 本 タカ(岡)同、小川村 神戸市大手宮ノ西九番
 地
 ○山 縣 於 松(伊藤)同、大井村
 ○宮 本 タカ 同、西田町
 ○横 地 幸(河野)同、萩江向 東京府下巢鴨宮下一六
 九三横地案之進内
 ●田 邊 カメ(山下)同、椿東村 (死亡)
 ○河 村 タミ子 同、熊谷町
 ○二 宅 美智子 同、萩江向 東京荏原郡六郷村一四
 三〇
 ○澄 田 ハツ 阿、萩堀内 福岡縣田川郡神田村字
 金田東邊橋 阿、椿村織式町
 ○吉 本 ヨシ(神村)阿、萩米屋町
 ○阿 部 スマ 同、同片河 大津郡深川村正明市
 ○岡 部 シゲヨ 同、須佐村 大津郡三隅村
 ○十山 根 英子 同、萩河添 萩町河添萩町河添仲ノ
 町玉置内
 ○河 村 貞子(三好)同、萩西田町

○藤 田 豐子(未成)同、同 平安古姫路市五軒邸八
 ○十三 浦 テイ(大中)熊、淺江村 熊毛郡島田村原

實科第三回

(大正四年三月卒業) (年齡別)

○阿 部 タケヨ 阿、彌宮村
 ○加 藤 雪(粟屋)下關市田中新町一丁目
 ○十藤 田 愛子(箭島)阿、吉部村 大津郡三隅村
 ○島 田 ウメニ(山本)同、萩濱崎 下關市入江町海岸通
 ○佐々並 マワ、藤村)同、川上村 東京府下豊島郡瀬川町
 字田端五四三
 ○松 岡 花子(松野)同、萩土原 東京府大井町出石五一
 六八
 三 浦 チセ 同、濱崎
 ○瀨 戸 由子(河北)同、萩平安古
 ●河 野 ミツ子 同、今古萩 (死亡)
 ○山口屋 シナ(山下)同、山田村 新嘉坡經由藤田組南興
 殖産株式會社山口屋彌
 一方
 大 森 ナヨ 同、濱崎
 ○伊 藤 ミツ(村上)同、萩東田町青森筒井陸軍官舎
 ○十笹 村 嘉子(椿)同、椿東村 朝鮮全北鎮南
 ○十長 崎 ナエ子(三上)同、山田村 東京本郷區本郷五ノ一

○玉 木 ヨシ(西山)同、萩川島 阿武郡金谷
 ○國 弘 トメ 同、同同
 ○林 清子 同、同平安古
 ○尾 坂 喜與子(君谷)同、小川村 小川尋常高等小學校在
 職
 ○野 村 ツルヨ(田中)同、椿東村字後小畑 名古屋市熱田白鳥五五
 ○中 村 操(田村)同、椿村
 ○十吉 田 壽美 同、萩川島
 ○植 村 フミヨ(田中)同、椿東村 門司市大久保海岸埋立
 地脇貞永作一殿方裏
 ○齊 藤 マス 同、大井村 大、日置村神田尋常小
 學校
 ○三 好 アヤコ(萩枝)同、香川津
 ○十厚 東 佐世 同、椿東村
 ○原 フミ(長井)同、川上村 京都伏見深草石峰寺下
 ○十南 方 京 同、椿東村 神戸須磨町西代カラ
 ノ二
 ○植 村 サチコ(山本)同、三見村 山口町今市七七
 ○三 原 幸子(山中)同、萩橋本 吉敷郡小郡町新丁
 ○福 永 フサ(伊藤)同、川上村
 ●倉 増 千代子 同、高俣村 (補) (死亡)
 ○河 田 シズ 同、米川村 大阪北區天滿橋三丁目
 一七
 ○齋 藤 キカ 阿、椿村
 ○阿 武 カメ 同、椿東村 在朝鮮(住所不明)

- ◎赤司 尊子(倉田)同、萩吉田町、福岡市東唐人町五七
- ◎井上 キミヨ(黒瀬)同、萩江向、在朝鮮
- ◎山下 サト 同、山田村、東京市外千駄ヶ谷八七
- ◎吉賀 クリ(三村)同、萩濱崎吉賀幸助方
- ◎小宮 トラ(中原)同、同土原
- ◎長谷 トシ(吉賀)同、同熊谷町
- ◎+藤井 兼代(鹽見)同、椿村、神戸市北野町四丁目六
- ◎津守 フキ(重枝)同、橋本町、豊、神出村牡牛港十五
- ◎中村 スミ(大山)同、椿村、布哇ホノルルホワイト
- ◎松原 ツル 同、萩米屋町(死亡)
- ◎+久保田 ヨシ(大田)同、同土原、下關市西細江町上ノ山
- ◎村木 秀子 同、同堀内、美、於福小學校在職
- ◎+能美 滿壽子 同、同江向
- ◎馬屋原 孝子 同、椿東村、福岡縣若松市堺町四丁
- ◎内藤 ヨシコ 同、萩町江向
- ◎+佐藤 ツツ(金子)同、同平安古、住所不明
- ◎藤井 テル(村田)同、同江向
- ◎+宮原 千世(河野)同、同土原、美福郡赤村
- ◎小笠原 嘉子(三好)同、同米屋町、阿、萩濱崎新町
- ◎能美 ヨシ(片山)同、椿東村、新旅順松村町二二

- ◎+井上 マツヨ 同、福岡村、奈古尋常高等小學校在職
- ◎長嶺 芳子 同、徳佐村
- ◎小河 ハナエ(岩竹)同、萩江向、阿、小川村
- ◎+白井 ハナ(平木)同、椿村、萩明倫小學校在職
- ◎三浦 ヨシ 阿、萩江向(死亡)
- ◎金子 トミ 同、椿東村
- ◎岩崎 サダ(阿座上)同、萩江向
- ◎岡野 千代(長谷)同、同津守町、臺北市上奎府町二ノ
- ◎田原 千代子(石井)同、同田町、兵庫縣須磨大手町下庄
- ◎伊藤 喜代(古橋)同、同川島、東京市本郷區駒込動坂
- ◎野村 フジ 同、同米屋町
- ◎+金子 清 同、宇田郷村
- ◎榎原 マサミ 阿、萩堀内(補)(死亡)
- ◎堀永 フクコ 同、同東田町
- ◎松岡 シヅコ 同、椿東村、下關本町三丁目星野ト
- ◎+淺野 ミサチ 同、萩江向、東京府下上落合四九七
- ◎阿武 クリ(寺田)同、椿東村、阿、萩町橋本
- ◎松崎 ナヨ(阿部)同、萩古萩、朝鮮全羅北道全州八達
- ◎松屋 ナヨ 同、萩東田町、阿、萩町濱崎

- ◎岡村 シゲコ 同、同平安古
- ◎+山本 松江 同、同江向
- ◎+三上 文子(松井)同、同川島、大阪市中心齊橋通り南久
- ◎+藤原 キク(三村)同、椿東村、京城永樂町二ノ三一
- ◎原 ハル(溝部)同、同、(死亡)
- ◎小野 フミコ 同、奈古村、豊浦郡、尋常小學校在職(死亡)
- ◎藤井 政(大賀)同、萩江向
- ◎小林 春(竹重)同、同、神戸市兵庫三石通り一
- ◎黒瀬 ヒサ(宮原)同、山田村、丁目七十七番地小林直
- ◎+安田 ヨシ 同、福川村、川上尋常高等小學校在職
- ◎+米原 ハツメ 能本市外黒髮村、都濃郡徳山町
- ◎+鈴木 壽子 阿、萩西田町
- ◎村岡 ミドリ(堀江)同、同江向、萩町南古萩
- ◎+光田 コト 同、同熊谷町
- ◎+植松 須嘉(村田)同、同江向、朝鮮咸鏡北道境城西門
- ◎林 保子(渡邊)同、同平安古、山口町八幡馬場
- ◎+吉田 トキ(遠藤)同、同古萩、山口町下堅小路原田裏
- ◎+十國 重静子 同、椿東村
- ◎+佐伯 千代子 同、福川村、神奈川縣鶴見三角二一

- ◎松井 豐子(河村)阿、萩橋本、大阪市中心齊橋通り南
- ◎米澤 秀子(和田)佐、防府町、久太郎町四丁目角
- ◎+山川 文子(阿武)阿、福川村、大阪府南區天王寺石尻
- ◎+米澤 秀子(和田)三田尻、一四九一ノ二ヶ辻町五
- ◎+山川 文子(阿武)阿、福川村、萩町大字椿東

實科第四回

(大正五年三月卒業) (年齢別)

- ◎吉武 静 佐、中ノ關村、横濱市外保土ヶ谷町
- ◎富塚 タネ(大田)阿、萩津守町、一〇日本絹織株式會社
- ◎堀永 クリ(増野)同、同濱崎、基隆船頭街一九七ノ
- ◎堀部 ヒサ(原田)同、山田村、福岡縣若松市山手通七
- ◎+兒玉 豐子(山根)同、嘉年村、丁目百五十九番地
- ◎高木 梅代 同、萩濱崎、横濱市西戸部町池阪九
- ◎藤原 久枝 同、椿東村(補)(死亡)
- ◎山根 マタコ(柳井)同、萩平安古(死亡)
- ◎+井本 龜子 同、須佐村
- ◎伊藤 光子(北村)同、萩江向(死亡)
- ◎+前田 トミコ 同、地福村

○江原 キクコ(能美)同、萩唐樋町
 ○佐伯 菊野(世真)同、椿河濁淵
 ○津原 ミヨコ(浮里)同、三見村 豐浦郡玉司村神山
 ○鈴木 木菊枝(猪口)兵庫縣三原郡松帆村、岐阜縣東惠那郡中津高等女學校在職
 ○中限 千代 島根縣濱田 阿武郡白木尋常高等小學校在職
 ○永岡 フサコ(佐々木)阿、生雲村
 白井 アキコ(吉山)同、山田村倉江
 長谷川 トシコ 同、篠生村
 ○横山 ツル 同、萩河添
 ○野村 マツ 同、椿東村(死亡)
 ○井町 スミ 同、三見村 三見尋常高等小學校在職
 ○江山 タキコ 同、椿河雜式町
 ○岡 絹子(中村)同、出雲村 朝鮮慶尙北道迎日郡東海面ミツク浦頂農場
 ○岡本 秀子(田原)同、山田村 萩五間町岡本直介内
 柏村 ヨシ(中村)同、萩川島 支那吉林省城內富寧造紙公司内
 ●秋山 キク(齋藤)同、同御許町(死亡)
 ○澄川 トヲ(桂木)同、小川村
 ○阿武 ミト(河村)同、椿東村 大連石見町六號地
 ○藤本 豐子(岩田)厚狹郡宇部市掘返區

○齋藤 喜美(伊佐)阿、萩橋本 朝鮮黃海道鳳山郡沙里院殖産鐵道二號社宅齋藤正亮方
 ○+原川 壽子 同、同土原 阿、大島尋常高等小學
 ○黒瀬 ヒデ(久保田)同、椿東村 愛知縣丹羽郡犬山町
 ○+長見 マサコ 同、福賀村 東京府下澁橋町柏木一
 ○下間 静子 同、萩吉田町在京部
 ○高橋 ヨシコ 同、山田村玉江浦
 ○+藤井 フジノ(藤原)佐、防府町 三田尻下道
 ○井上 ふみ 阿、萩江向 住所不明
 ○+藤井 文子(竹内)佐、島地村 東京市下谷區谷中上三崎町七一
 ○+野上 壽惠(長谷川)阿、萩土原 住所不明
 ○石光 茂子 同、萩下五間町
 ○堀 綾子 同、同上五間町
 ○吉村 キク 同、椿東村中ノ倉
 ○内山 ノブ(中村)同、萩川島 臺北久壽街二一
 ○瀧田 高子(安田)同、萩河添 下關市阿彌陀寺町
 ○齋藤 ヤス子 同、椿河大谷大阪市北區靈屋町二ノ一四水谷内
 ○末武 満子 同、椿東村越ヶ濱
 ○玉井 芳子 同、萩江向 朝鮮慶尙南道南旨米穀大豆檢査出張所玉井敬助方
 ○伊藤 君代(堀)同、萩河添 東京市外上落合二一五

○+山本 ナヨコ 同、萩平安古
 ○藤山 ユクセ 同、萩福村 京都市木屋町御池
 ○+難波 アキコ 同、萩米屋町
 ○國司 八重 同、椿東村越江
 ○宗樂 シゲ子 同、萩橋本
 ○坂口 タカコ(高橋)同、同江向 安東縣一番通五小橋正一方
 ○領家 マス(村上)同、同東田町、大連山手町滿鐵社宅九ノ五ノ九
 植村 雪子 阿、椿東村 朝鮮京城朝日町二丁目三番地兼近實造方(死亡)
 ●阿武 ミユキ 同、同
 ○+石川 文子 同、同 福岡市柳原町三ノ七五
 ○水津 フミコ(村木)同、同 香川縣高松市西濱五ノ五
 ○+谷井 雪子(楨)同、萩江向 千葉縣銚子町津田善五郎方
 ○+花村 秀子 同、萩堀内 大分縣速見郡日出町日出高等女學校
 ○+岡本 ミチ 同、萩吉田町、八幡上通二七六小武家園治邸内
 ○+原 壽子 阿、萩河添
 ○+山 末 同、同平安古
 ○+山下 マス 同、山田村 阿、三見尋常高等小學校
 ○+柴田 タケヨ(吉岡)同、高俣村 福岡市赤坂七九九

石井 壽高 同、萩土原 東京赤坂新坂町千葉菊一方
 ○白根 光子 同、萩濱崎
 ○+上田 ヲル 同、同御許町(死亡)
 ○+久保 春枝(阿武)同、同濱崎 阿、東田町
 ○+今地 マツ 阿、同上村
 ○+吉田 ヨシコ 同、萩濱崎
 ●吉光野 俊子(中原)同、同橋本(補)(死亡)
 ○小笠原 マス 同、同堀内(住所不明)
 ●藤村 文子(野村)同、同御許町(死亡)
 ○松本 アサ(後藤)同、今古萩 門司市宗利町一丁目
 ○渡邊 八百 同、同江向
 ○山中 照子 同、同橋本
 ●永田 操(植村)同、椿東村(死亡)
 ○河村 千代 同、萩新堀
 ○吉永 トヲ(重枝)阿、萩橋本 島根縣津和野町下市
 ○藤井 眞子 同、同米屋町
 ○+廣瀬 照子(齋藤)同、同濱崎

實科第五回

(大正六年三月卒業) (年齢順)

○宮原 百重 美、赤郷村 豐浦郡長府町古江小路

茂住タミ 阿、萩平安古(住所不明)
○三見コウ 同、三見村
+都築ユキコ 同、生雲村
小林トキ 同、奈古村
○後藤フミ 同、御許町
○中村キク 同、萩唐櫃
○倉富イチ 都、鹿野村
○福根フサ(富士見) 秋、岩國町 都濃郡徳山町字新町
○伊藤雪江 阿、大井村 朝鮮釜山辨天町吉見ふ
○伊藤芳子 同、同 仁内
○伊藤ヨシ 同、椿村 小畑、奥鳥越
○神代政子(村上) 同、萩土原 椿東村松本中ノ倉明光
○萩原千代子(河村) 同、三見村 寺内
○松尾 壽 同、椿東村 島根縣美濃郡吉田村
○片山キク(小河) 阿、小川村 生雲尋常高等小學校在
○+藏貫ツル 同、出雲村 山口町飯田町宮村竹藏
伊藤トミコ 同、椿東村 榑方
○+榑木アサ 大、三隅村
○山崎サチ(河井) 阿、萩川島 大阪府市外天王寺大字
○+伊藤睦子 同、大井村 天王寺丸山山崎秀輔方
厚東英子(福原) 同、椿東村 奉天奉天銀行派出所

○飯田静江(岸) 同、椿村 廣島市上柳町三四ノ二
○長井トシ 同、川上村、萩町土原
○+原田ハルコ(石川) 大、日置村古市
○師井アイ 阿、萩熊谷町
○+岡田八重子(松本) 同、同江向 東京市赤坂區一ツ木町
○厚東ヨシ 同、山田村奥玉江 四八
○田村瓦子(近藤) 同、椿東村 朝鮮新義州守備隊官會
○河崎好子(竹内) 同、古萩 神戶市川西通二三四
+倉増太代 同、高俣村 仁内
○池田京子 同、萩熊谷町(補) (死亡)
○+岸森 京 同、同江向
○大崎芳江(藤本) 同、同御許町豊浦郡長府町南町
○金子喜代子 阿、萩川島 朝鮮咸北鏡城西門外
○武田アヤ 同、山田村奥玉江
○河村信子 同、同江向 門同東本町二丁目海事
○+田上ヨシ子 同、椿東村 兵庫縣明石市鷹匠町堀
○藤井キヨコ(田中) 同、椿村 端西入古川榮吉方
○小柳サヨ子(並川) 同、萩河添 豊浦郡宇賀村市
○+吉田フミ(厚東) 同、椿東村 臺北西門外街一丁目一
○+中島ヨシコ 同、萩土原(死亡) 六四
下關市宮田町四一八

○+大谷チヨコ(武林) 阿、萩平安古、山口町金古會
○+松本静子 阿、萩東田町萩、土原新橋
○松尾キク(中原) 同、椿東村 神戶市野崎通三丁目三
+宮川ツル 同、萩濱崎 九
○西山キクヨ(田中) 同、椿東村 大阪府三島郡水玉地ビ
○+齋藤ミツ 同、萩南古萩、阿、萩高等女學校在 一ル會社住宅ノ三
○藤井三枝 同、同江向 職 東京市小石川區竹早町
○+田中静子 同、椿町 (補) (死亡) 六九大塚方
長屋チヨノ 阿、山田村木間
○+柴田キク 同、萩江向
○+中原則子 同、福川村
○+松本喜久子 同、椿東村
○+渡邊喜子 同、萩古萩
○+久保アヤ子 同、同江向 山田村白水小學校在職
武田静枝(本村) 島根縣邑智郡田所村
○+小島マツ子 同、椿東村 椿東小學校在職
○+増野ユリ(土田) 島根縣益田町、兵庫縣武庫郡芦屋東 濱芦屋
谷 ヲメ(松浦) 阿、萩橋本 廣島市上流川町三九生
田内

○+吉田貞子 同、椿東村
○+齋藤雪枝 同、萩新堀 (住所不明)
○+長田千代子(松浦) 秋、岩國散島吉敷郡小郡町新沖野 部屋
○桂竹子 阿、萩土原 東京市日本橋區本石町
○+神野サキ 同、同江向 宮崎縣登米郡佐沼小金
○+奥幾子(山根) 厚、小野田 町六
○+白井チカ 阿、椿村 大連市越後町二〇號地
○+末岡ハルコ 美、於福村 三井社宅内
○+渡邊ヨシ 阿、椿村瀨瀨 椿村椿西小學校在職
○+吉屋ハル 同、萩油屋町東京府下上邊谷六ノ七 島根縣鹿足郡日原村村
長泉寺内 上一十郎内
○辻野ハナコ(溝部) 同、椿東村 横須賀市不入斗六三三
○藤村峰子(多田) 同、同 神戶市中山手通七丁目
二十ノ六五
○草列政子 同、萩河添
○+小野サキ 同、椿村青海
○+山内ハツエ(乃美)
○+肘付澄江(瀧口)
○+天野ミツ(田坂)
○森脇美智子(黒瀬) 阿、山田村 山口町堅小路

- 藤田 ハツセ 同、椿村 (死亡)
- 秋山 カメコ(増山)同、萩上五間町
- 新庄 貞子 同、同熊谷町川上村立野小學校在職
- 増山 静子(増山)同、同橋本

實科第六回

(大正七年三月卒業) (年齢順)

- ◎三好 シゲ 阿、萩濱崎 岡山縣井原高等女學校在職
- 栗田 鹿子 同、吉部村 (死亡)
- ◎種子 綾(岩武)同、紫福村 高俣村尋常小學校在職
- 岩田 フミエ 同、藤生村
- 山田 マサ子 同、山田村 大阪西區泉尾町二六元岡田
- ◎佐々木 ツチ(竹重)同、吉部村
- ◎小野 静子 同、奈古村
- 堀 永ツタ 同、三見村 (死亡)
- ◎富田 シゲコ 同、萩土原 岡山市門田屋敷九七
- 小河 良子(藤田)同、椿村 萩御弓町
- ◎守重 志都(羽鳥)同、椿東村 廣島市西九軒町
- 平田 スミ 同、椿村
- ◎品川 マツコ 同、福賀村

- ◎堀 清子 同、宇田郷村、東京市芝區高輪町南町五毛利邸内
- ◎+桂 静子(田中)同、椿村 東京府下中野西町三六二
- ◎高洲 美代 同、同
- 金子 静 同、宇田郷村
- 田中 静(桂)阿、萩川島 東京府下中野西町三六一
- ◎伊藤 ツルコ 同、同江向
- 今田 ナチコ 同、萩五間町、大阪四天王寺日本赤十字社大阪支部病院看護婦在職
- 山中 松子 同、同平安古、大阪北區北野大融寺町七三七長井方
- 神田 サトセ(服部)同、三見村 東京府下大井町水神下二一〇四
- 有吉 トミコ 同、萩西田町 大津郡仙崎幸町川中ヨ内
- +關屋 千代 阿、萩瓦町
- 森屋 露子 同、同米屋町
- 大谷 文子 同、同唐樋
- 中村 貞子 同、椿東村 (死亡)
- ◎福田 朝子 同、萩濱崎
- ◎福田 文(林)同、同河添 名古屋市西區臺所町二八
- 藤田 フサコ 同、椿村
- 末成 清子 同、萩平安古(補) (死亡)
- ◎波多野 ナツ 同、同新堀 朝鮮龍山鐵道舍宅津村常吉

- 後藤 通子 阿、椿東村 神奈川縣足柄下郡小田原町十字三丁目六三六坂本方
- 島屋 ツチ(河野)同、奈古村 萩熊谷町島屋方
- ◎中村 エイ(小田)同、福川村
- ◎+早川 照子 同、萩堀内
- 村上 ヲメ 同、同東田町(死亡)
- +堀上 ヲ子 同、同新堀
- 大庭 ヲ子 同、同西田町(死亡)
- 横山 朝子(岡本)同、同 豐橋市札木町八千代製米屋町方 樂株式會社内横山三郎
- ◎陶村 園子 阿、萩平安古、千葉縣千葉市通町一二六
- 松本 ヲコ 同、同新堀 東京市麻布區單笥町二
- ◎秋本 綾子(吉崎)熊、室津村 三
- 西郷 ヲシコ 阿、椿東村
- 松尾 治子 同、萩江向
- ◎藤田 貞子 同、福川村 萩土原
- 池田 トミ 同、椿東村
- ◎竹内 艶(杉山)同、萩惠美須町
- ◎小池 ヒサコ(河村)同、同川島 臺灣臺中林外東屋方
- 仲子 菊江(吉賀)同、同濱崎
- 齋藤 千代 阿、大井村 越々濱小學校在職
- 松村 糸枇(吉村)同、萩五間町

- ◎岡本 シゲ(藤田)同、椿村 小郡町
- 秋山 操 同、同 水戸市外常盤村袴塚
- 秋本 ミツコ 同、同 住所不明
- 田總 イセコ 同、萩平安古(死亡)
- ◎+杉 登志惠 同、同吉田町
- 岡上 ツチコ 同、福川村
- 山内 ヒサ 同、萩土原
- 安井 フユ 同、同川上村
- 村上 スエ 阿、萩
- 香川 マサ 同、同土原
- 杉山 梅尾(大島)同、同濱崎 門司市谷町一丁目
- 杉山 愛子 同、同川島
- 三輪 芳子(小島)同、椿東村沼田ケ原
- 音吉 ノブコ 同、萩濱崎
- ◎町原 シカ(小河)同、小川村
- +末永 梅尾(石川)同、福川村 京都市上京區粟田口鳥居町
- ◎野尻 幸代(渡邊)同、萩江向 朝鮮釜山富民町三ノ三
- 白石 壽子 同、同東田町(死亡)
- ◎笹尾 智世子(屬)阿、萩江向 厚狹郡厚狹町厚狹驛鋸總工事係詰所留尾幸一
- ◎齋藤 文(田坂)同、同 同大津郡深川村河原
- ◎磯村 トミ 同、同河添 朝鮮城津本町

- 藤川 キヨコ 同、同西田町
- 末武 愛子 同、椿東村越ヶ濱
- 伊藤 花子 同、萩江向 (死亡)
- ◎佐方 敏子(阿座上)同、川上村 東京府下千駄ヶ谷五四九 (死亡)
- 中山 壽子 同、萩 (死亡)
- 原 千代 同、同
- 伊藤 ヒデ子(岡)同、同 下關伊崎町利慶寺前伊藤廣太郎方
- ◎長島 藤之(瀬戸)熊、勝間村 下關市豊町一八九五

實科第七回

(大正八年三月卒業) (年齢順)

- 杉戸 ユミ(藏重)美、大田町 (住所不明)
- 山縣 ヤス 阿、萩平安古
- 伊達 ユキヨ 同、椿村
- ◎金子 貞 同、宇田郷村、豊浦郡長府町金子圭介方
- ◎遠崎 シツ子 同、萩濱崎 東京本郷區菊坂六五
- 平田 春江 同、小川村 東京代々木山谷四二五二階富塾
- 山中 繁 同、萩濱崎
- ◎内藤 ミツ 同、同川島
- 井町 ヒサコ 同、同濱崎

- 伊藤 チヨ 同、川上村
- 阿武 フミオ 同、萩川島
- ◎澄川 スミ(池田)同、須佐村 阿武郡萩町江向
- 後藤 テフ 同、萩濱崎
- ◎横山 ヒナ子(三島)同、三見村
- ◎福田 和子(瀧口)都、福川村
- +木村 サダ 阿、惠美須町、双葉幼稚園在職
- 井原 喜勢(金子)同、椿東村 上海寶山大本街七十一號
- 松浦 キミ子 同、萩濱崎 (死亡)
- +中村 ヤエ子 同、同江向
- +笠井 映子 同、椿村 長崎縣崎戸工業所秋山内
- 松井 須磨子 美、赤郷村
- +中村 マツ 阿、惠美須町吳市城山町百十四
- +中村 花子 同、萩平安古 大津郡深川村下郷
- 永田 フジエ(植村)同、椿東村
- 安田 清子 同、萩河添 阿武郡福川村二保谷
- 阿武 ヤエ子(山川)同、椿東村
- 久保 操 同、萩上原 臺灣基隆市瑞芳局區内
- 佐藤 壽子(井上)同、福川村 阿武郡川上村
- +今地 タミ子(三戸)同、萩江向 同、同土原 東京市芝區二本塚西町ノ三
- 加藤 靜江 同、同土原

- 鈴川 綾子 吉、東岐波村、兵庫縣武庫郡本山村 野崎大正橋東詰向方
- 山田 ムク子 阿、山田村
- 來島 イサヨ(原)同、同 臺灣高雄洲屏東街臺灣製糖社宅
- 岡 安子(兼重)同、萩川島
- 神代 雪子 同、山田村
- ◎落合 敏子 同、萩吳服町、朝鮮公州抱町一四二
- ◎植村 文子 同、椿東村 朝鮮黃海道海州南本町一五二岩田隆一方
- 阿武 竹子 同、椿東村 朝鮮釜山水昌洞
- 秋枝 イト(阿座上)同、福賀村
- ◎市原 安子 同、嘉年村 嘉年尋常高等小學校在職
- ◎原 スミ 同、紫福村 紫福尋常小學校在職
- 大賀 ヒテ 同、萩鹽屋町(死亡)
- ◎三好 ヲラ 同、淺江村
- +横山 ヨシ子 阿、川上村 阿、篠目尋常小學校在職
- 木原 ヨシ 同、椿東村 阿、篠目尋常小學校在職
- 杉山 アサ子(久保)同、萩濱崎
- 宮原 千代 同、同土原
- 田中 マサ 美、共和村
- +林 貞子 阿、萩平安古、双葉幼稚園在職
- 内田 文子(堀)同、萩川島 東京市外上落合五一四杉本方

- 澄川 千里 阿、小川村
- 今地 ヒデ 同、川上村
- ◎山崎 貞(和田)大阪府北河内郡住道村和田恭輔方
- ◎阿川 榮子 阿、地福村
- 田中 セキ(兒玉)同、椿東村 東京本郷駒込動坂町一六
- 宮本 信子 同、福賀村 萩平安古(死亡)
- 岡村 由枝 阿武郡福川村、島根縣鹿足郡津和野町 山口町鰐石橋側三八
- 田中 基(植村)阿、椿東村 山口町鰐石橋側三八
- ◎西島 カツ(松水)大、向津具村、豊浦郡長府町宇古江小路 東京市小石川區雜司ヶ谷一六村田内
- ◎吉津 ヲキ 阿、椿東村 東京市小石川區雜司ヶ谷一六村田内
- 竹内 淑子 同、萩平安古、明倫尋常高等小學校在職
- ◎前田 磯子 同、山田村 東京府下大井町字山中四三五四
- +三隅田 クマ 同、萩平安古、神戸菊水町七ノ二三小島方
- 有田 シツ(來島)同、椿村濁淵
- 藤田 トヨ 同、椿村
- +津田 サダ子 同、萩江向
- +山下 キヨ 同、山田村
- +森田 ミチ子 同、福川村

○岡本 照子(大津)同、萩濱崎
 ○+大谷 キク 同、椿村瀧淵、門司市庄司小學校在職
 ○渡邊 初子 同、萩濱崎
 ○加藤 シツコ 同、米屋町
 ○金國 テルコ 同、萩水車筋、東京府下大森不入斗八五一一大村内
 ○河野 ユキコ 同、同濱崎
 ○+金子 ヨシコ 同、同濱崎
 ○+中津江 三知子(片山)同、同濱崎
 ○+横山 ミチコ 同、萩河添
 ○高村 ミネコ 同、椿村
 ○高洲 ナチコ 同、萩土原(死亡)
 ○若松 キサ(田中)同、椿東村 萩東田町
 ○竹内 恒子 同、萩濱崎
 ○高橋 キク 同、同唐樋
 ○田村 マサコ 同、山田村 豊浦郡川中小學校在職
 ○田坂 アヤ子 同、八代村
 ○坪倉 シゲ子 同、萩石屋町
 ○根來 美代子 同、秋吉村
 ○岡江 澄(中原)阿、萩江向 朝鮮釜山府當平町三ノ四五
 ○永田 シツ 同、椿東村
 ○+村田 勝子 同、萩江向
 ○若林 ヲメ(井町)同、同濱崎 沖繩縣那覇市大門前

○+信 常壽子 同、同平安古
 ○神原 幸(野村)同、同同 椿東村雁島
 ○小田 チヨ 同、山田村 東京市麻布區三河臺町三十八番地中御門公爵家内
 ○小澤 ハツ 同、萩平安古(住所不明)
 ○小野 君子 同、田万崎村
 ○小野 静子 同、椿村 在支那
 ○小野 朝子 同、篠生村
 ○+國重 淑子 同、椿東村
 ○山本 イトコ 同、椿東村 越ヶ濱小學校在職
 ○+山田 ミツ 同、奈古村 神戶熊内橋通り五丁目十
 ○村田 照子(山中)同、萩橋本
 ○河上 房子(八木)同、同鹽屋町
 ○松浦 マツ子 同、同橋本
 ○松林 和子 同、椿東村 越ヶ濱小學校在職
 ○松本 恒子 同、萩 在下ノ關(不明)
 ○松浦 クラ 同、奈古村 紫福小學校在職
 ○佐々木 仁子(福島)同、椿東村 福岡市柳井原三ノ七六
 ○四尾 末子(古川)同、田万崎村
 ○兒玉 章子 同、明木村
 ○笹井 フサ子(兒玉)同、萩堀内 萩町土原

○岩武 綾子(藤田)同、紫福村
 ○鳥田 トメ子 同、川上村
 ○河村 清子 同、椿東村
 ○+佐田 初枝 同、大嶺村 萩唐樋村田方
 ○大野 美智子 同、椿東村
 ○倉田 喜久代 大阪府 福岡市東唐人町五七
 ○中村 ハナ 阿、萩土原 吳市城山町中村醫院内
 ○末益 マス 同、奈古村
 ○波多野 芳子 同、三見村
 ○山本 静子 同、萩吳服町、吳稻荷町十五ノ六山本清方
 ○田坂 文子 同、萩江向
 ○+田中 トシ子 同、萩橋本 (死亡)
 ○+井嘉子 同、椿村 川上小學校在職
 ○+大田 春代 同、吉部村 同、萩吉田町、大分市春日町七六〇
 ○伊佐 トミコ 同、萩橋本 下關壇ノ浦中尾舘郎内
 ○德田 英子(前田)同、地福村 佐波郡出雲村
 ○+羽仁 トミ子 同、萩平安古、東京芝區神谷町二五
 ○+伊藤 桃代 同、椿東村
 ○立野 朝壽子 同、田萬崎村、愛媛縣宇和郡日吉村

○内藤 静子(大谷)阿、萩濱崎 大阪城内陸軍兵器支廠内
 ○齋藤 ハナコ 同、同
 ○森 松枝 同、川上村
 ○其他
 ○落合 愛子 東京市小石川區久堅町六九
 ○十五峰 ヨシコ 阿、萩濱崎
 ○石光 波子 同、同同
 ○飯田 テイ 東京本郷駒込追分三〇番地、札幌市南二條西三丁目
 ○林 春枝 阿、萩川島(補)(死亡)
 ○林 静子 同、同平安古
 ○原 敬子 同、地福村
 ○仁尾 玉 高知縣高岡郡(死亡)
 ○堀江 トミコ 阿、萩江向 熊毛郡室積町
 ○村田 ナミ(堀)同、同川島 在東京
 ○堀本 トメ 同、同堀内
 ○豐田 喜代子 同、同河添
 ○領家 文子 同、宇多郷村

實科第八回

(大正九年三月卒業) (イロハ順)

- 後藤 かつよ 同、同御許町
- 小河 ツチ 同、小川村
- 稻田 美智恵(小島)同、萩春若町
- 西村 繁子(小島)同、椿東村 山口町後河原
- 遠藤 千代子 吉、小郡町柳井田、千葉縣千葉郡二宮村栗園窪穴倉壽美三方
- 寺山 豐子 阿、地福村 生雲小學校在職
- +阿武 菊枝 同、川上村 朝鮮平安南道江東郡晶湖面石陵里
- +秋山 佳重 同、萩町
- 阿武 壽子 東京府下荏原郡六郷村八幡塚一四〇八田村内
- 佐竹 昌子 美、岩永村 廣島縣廣島市尾長町七一
- 佐久間 ユキ 阿、嘉年村 東京市本郷區元町二ノ六三明華齒科醫學校
- 杉山 キヨ子(木村)同、萩淨國寺、朝鮮慶南晉州城内西本願寺
- 北野 ツネ子 同、同平安古、大阪市西區九條北通一丁目若林喜一方
- +平嶋 縁(岸)同、椿村 兵庫縣武庫郡本山村野寄高砂別邸内
- 豐田 ヨシ(行本)大阪市西區田中町二九八
- 溝部 元妃 阿、椿東村 生雲小學校在職
- 西岡 爲子(光國)福岡市渡邊通三丁目九水舎宅
- 三浦 アヤ 阿、萩濱崎

- 三戸 キヨ 阿、山田村 福岡縣遠賀郡黒崎町
- 宮本 マスエ 同、萩片河
- +重岡 キヨ 同、同
- 白井 サダ 同、椿村 東京女子大學在學
- 進藤 秀 同、椿東村 椿東小學校在職
- +黒田 愛江(鹽見)大阪府西區九條南通二丁目一六五生藤方
- 未成 ウメヨ(平田)阿、紫福村
- 宗像 俊子(森永)美、眞長田村
- 澄川 孝子 阿、萩 朝鮮忠北清洲城西町安井方
- 須子 美登里 同、小川村 三重縣多氣郡相可町三七〇
- 山根 サト(水津)同、大井村 東京本郷駒込神明町一六〇
- 鈴木 ヒサ 同、山田村

實科第九回

(大正十年三月卒業) (五十音順)

- 赤木 ツチ 阿、萩檜屋町、在下ノ關
- 井本 捷子 同、須佐村本町中ノ町
- 砂久子 同、萩堀内
- +山本 タネ(上田)同、萩熊谷町、山口町中讃井
- +植村 マサ 同、椿東村

- 上野 ユキ子 同、萩平安古
- 江山 タマコ 同、地福村
- 小野 時代 同、奈古村
- 大島 ヨシコ 同、萩濱崎町
- 河村 綾子 同、同橋本
- 河崎 一子 同、同堀内 神戸市再度筋三丁三七三原美男方
- 來島 マチ 同、山田村
- 小峠 ヒサコ 同、山田村木間、木間小學校在職
- 齋藤 キヨミ 同、椿東村
- 島本 ヨシコ 同、萩濱崎
- 水津 ヒデア 同、奈古村 在彦島
- 宗樂 ヨシコ 同、萩橋本町、大牟田市不知火町梅屋
- 田中 俊君 同、同川島 阿、奈古村
- 田中 清子 同、椿村 門司丸山清水谷藤田保忠
- 田中 清子 阿、萩片河 阿、萩川島
- 田坂 クリ 同、椿村河内、同、萩江向
- 高木 フミコ 同、椿東村松本
- 田口 雪枝 同、椿村
- 河上 ヨシ子(田村)同、椿村河内
- 時山 綾子 同、山田村
- 時山 トシ 同、山田村中渡
- 刀瀬 フユ 同、萩東田町

- 富川 ヨシ 同、同熊谷町
- 中村 ツル子 同、福川村
- 中村 フサ子 同、萩濱崎町
- 中村 ヨシ 同、同北古萩、大連市外沙河口五區
- 野田 喜代 同、萩南古萩、臺北鐵道部官舎方ノ七八號
- 波多野 トミコ 同、同西田町(死亡)
- 長谷川 久子 同、同濱崎町
- 弘兼 静子 同、椿東村
- 堀 喜久子 同、山田村王江中渡、阿、椿東村
- 増山 喜久子 同、萩米屋町
- 町田 松子 同、椿村 豐前國長洲町木村方
- 松浦 ヒサ子 同、椿東濱崎町
- 三上 ヨシ子 同、山田村奥玉江(死亡)
- 松尾 薫 同、大井村
- 御手洗 峰子 同、川上柯立野(死亡)
- 茂刈 ナエ 同、宇田郷村、阿、萩南古萩
- 大和屋 静子 同、萩濱崎
- 吉田 ヒサ 同、山田村中渡

實科第十回

(大正十一年三月卒業) (五十音順)

- 富川 ヨシ 同、同熊谷町
- 中村 ツル子 同、福川村
- 中村 フサ子 同、萩濱崎町
- 中村 ヨシ 同、同北古萩、大連市外沙河口五區
- 野田 喜代 同、萩南古萩、臺北鐵道部官舎方ノ七八號
- 波多野 トミコ 同、同西田町(死亡)
- 長谷川 久子 同、同濱崎町
- 弘兼 静子 同、椿東村
- 堀 喜久子 同、山田村王江中渡、阿、椿東村
- 増山 喜久子 同、萩米屋町
- 町田 松子 同、椿村 豐前國長洲町木村方
- 松浦 ヒサ子 同、椿東濱崎町
- 三上 ヨシ子 同、山田村奥玉江(死亡)
- 松尾 薫 同、大井村
- 御手洗 峰子 同、川上柯立野(死亡)
- 茂刈 ナエ 同、宇田郷村、阿、萩南古萩
- 大和屋 静子 同、萩濱崎
- 吉田 ヒサ 同、山田村中渡

○井上 千代子 阿、福川村福井
 ○岩崎 ムメノ 同、山田村
 ○岩崎 サヨ子 同、萩東田町
 ○植村 親 同、椿東村
 ○藤田 イセコ(岡) 同、福川村福井、阿、椿西
 ○+岡 千歳 同、紫福村、阿、萩吉田町
 ○大谷 久代 同、田万崎村
 ○河村 綾江 同、三見村、阿、椿東村
 ○河村 操子 同、椿東村
 ○神田 志都子 同、萩堀内 大阪市西區新池田町廿八ノ廿五
 ○河村 スミ子 同、椿付
 ○桐山 ミツエ 同、萩平安古、朝鮮咸北鏡城
 ○窪田 シズ子 大、菱海河河原
 ○黒瀬 シズ子 阿、萩江向
 ○+國重 米子 同、椿東村
 ○品川 政子 同、萩熊谷町
 ○未成 利子 同、同平安古
 ○杉本 スエ子 同、同同 門司市谷町二丁目
 ○樽屋 菊子 同、同江向
 ○田村 富貴子 下關中之町 都、徳山町二番町藤井
 ○田村 文江 阿、椿東村
 ○中村 シズ子 同、萩橋本町

○中津井 節子 玖、川越村 朝鮮木浦府常盤町二木
 ○中村 百合子 阿、椿村 本方
 ○野村 キク 同、萩濱崎
 ○林 菊香 熊、勝間村呼坂、滿洲鞍山
 ○年光 キヨ(長谷) 阿、萩熊谷町、福岡縣戸畑町鑄物會社社宅
 ○林 房子 同、同平安古
 ○廣 トミ子 同、萩濱崎
 ○平田 キキ子 同、椿村
 ○平野 花子 同、萩平安古
 ○末武 千代子(藤田) 同、椿東村越ヶ濱
 ○+藤田 トシコ 同、椿村
 ○藤原 静子 同、同
 ○堀 幹子 同、椿東村
 ○松本 ヒナ 同、三見村
 ○松浦 八重 同、山田村
 ○+松本 秋子 同、東田町
 ○松永 歌子 大、向津具村
 ○村木 カツ子 阿、萩濱崎町
 ○村木 トメ子 同、同堀内
 ○村田 トメ子 同、同東田町
 ○+安田 貞子 同、同河添
 ○山根 チセ 同、椿村

○吉田 ミホ子 大、三隅村
 ○吉賀 キヨ 阿、萩土原 朝鮮釜山本町一小宮修一方
 ○吉武 フツ 同、同唐樋町
 ○渡邊 カツ 同、同細工町
 ○若葉 静子 同、同東田町

實科第十一回

(大正十二年三月卒業) (五十音順)

○阿武 幹子 阿、椿東村
 ○石光 明子 同、萩五間町
 ○石井 喜美子 同、同東田町
 ○石川 静子 同、椿村
 ○井上 幸江 岡山縣上高梁町下町、阿、萩平安古
 ○井上 芳子 厚、小野村、阿、萩東田町
 ○大石 ツヤ 阿、萩濱崎
 ○岡本 初江 同、同江向
 ○小方 ヨシコ 美、共和村
 ○鹿島 フジコ 同、同川島
 ○増野 フジコ(金子) 阿、萩五間町、阿、萩濱崎
 ○佐山 操子 同、同川島
 ○岸 ステ 同、椿村

○國吉 喜代子 同、萩町
 ○久保 正子 大、菱海村
 ○小島 秀子 阿、椿東村
 ○里川 美智子 同、奈古村
 ○坂本 勝子 同、明木村
 ○下井 志都子 厚、万倉村
 ○杉山 キクエ 阿、萩米屋町
 ○安田 芳子 同、同御許町
 ○田中 壽子 同、同濱崎
 ○田中 フツ 同、椿東村
 ○坪井 多津 同、山田村
 ○都野 美代子 同、萩江向
 ○時山 マサコ 同、山田村
 ○永安 シズエ 同、奈古村
 ○中原 ハナコ 同、福賀村
 ○中谷 ヒサ子 同、萩熊谷町
 ○西田 稔子 同、萩川島
 ○長谷川 菊代 同、萩濱崎
 ○波多野 シツ子 同、同同
 ○林 壽子 同、同
 ○廣瀬 ツル 同、同
 ○藤山 マスコ 同、同川島
 大阪南區天王寺片堀町八木方

○藤本 峰子 同、同米屋町
 ○堀野 富美子 同、須佐村
 ○松浦 ツギコ 同、大井村 阿、萩唐樋町高杉方
 ○松本 登美惠 同、萩米屋町
 ○松屋 ヨシ子 阿、萩濱崎 大阪南區天王寺片堀町八木方
 ○宮川 ヒテ子 同、同橋本町
 ○三浦 ミツ子 同、萩町
 ○森重 ハツ子 同、大井村
 ○森重 ふさ江 大、通村 阿、萩五間町三上方
 ○山田 トヨ 阿、萩町
 ○横山 アサ 同、大井村
 ○和田 ふみよ 同、福賀村
 ○渡邊 豊子 同、萩北古萩

本科第一回

(大正十年三月卒業) (五十音順)

○平岡 ハルヨ(池田)阿、萩土原 京城竹添町三ノ一九〇
 ○石川 久子 同、椿村沖原
 ○板垣 龍子 同、萩東田町
 ○半多田 静子 同、椿東村 阿、三見小學校在職
 ○大山 千代子 同、椿村

○小田 エウ子 同、奈古村
 ○小野村 チロ 同、山田村 阿、吉部小學校在職
 ○岡本 タキ子 同、萩春若町
 ○大深 基 同、奈古村 釜山府草梁三五七小川百助内
 ○大本 カツノ 熊、佐賀村 熊、佐賀小學校在職
 ○齊藤 壽子(桂) 玖、岩園町 岡山三番町二七齋藤敏雄方
 ○賀屋 ヒテ子 阿、萩土原 三見小學校
 ○笠原 キクヨ(河村)同、萩土原 福岡縣若松市仲割
 ○國重 タツ子 同、同東田町
 ○有馬 淑子(國弘)同、同川島 支那上海寶樂安能スー
 ○栗田 シゲヨ 同、嘉年村 朝鮮京城政務總監官舍
 ○倉重 フミコ 同、椿東村 内
 ○小嶋 キヨ子 同、生雲村 (死亡)
 ○小嶋 貞子 同、椿東村 (死亡)
 ○小枝 千代子 同、萩濱崎町
 ○佐伯 清子 同、福川村
 ○坂本 シツコ 同、明木村
 ○佐久間 ユキ 同、嘉年村 東京市本郷區元市二ノ六三明華齒科醫學校
 ○陶山 ミサ子 大、向津具村、阿、萩明倫小學校在職

○瀬川 愛子 阿、生雲村 同、萩明倫小學校在職
 ○谷川 トヲコ 同、三見村 同、三見小學校在職
 ○坪野 ノブコ 同、佐々並村
 ○中村 サカエ 同、萩濱崎 大、三隅村
 ○中村 テルコ 同、萩江向 阿、佐々並小學校在職
 ○能美 ツチコ 同、同八丁 同、明倫小學校在職
 ○能美 ユキコ 同、川上村
 ○原田 光子 同、萩御許町
 ○原田 ユキ子 美、共和村
 ○村岡 ミツ子(藤村)阿、萩熊谷町、下關入江町二村同三九郎方
 ○藤山 於菟子 同、萩川島
 ○守永 フミ子(堀) 同、同同 阿、萩濱崎
 ○松浦 ミサチ 同、山田村 同、白水小學校在職
 ○溝部 勝子 同、萩河添 同、明倫小學校在職
 ○三原 アサチ 島、萩川郡西濱崎、大、三隅村
 ○三好 マツ 阿、椿東村香川津
 ○棕木 里 大、三隅村
 ○守永 節子 阿、生雲村
 ○山本 キク 同、山田村 大阪市北區上福島北三丁目馬場旭晴方
 ○山根 静子 同、大井村 (死亡)
 ○吉村 キヨ子 同、椿村
 ○白井 サダ 同、同 東京女子大學在學

本科第二回

(大正十一年三月卒業) (五十音順)

○阿武 菊子 阿、萩橋本町
 ○阿武 重子 同、小川村
 ○石津 可子 同、萩町
 ○板谷 敏子 同、山田村
 ○宇佐川 都子 同、萩堀内 阿、明木小學校在職
 ○小田 花子 同、同熊谷町
 ○大田 克子 同、吉部村
 ○大田 キク 同、椿東村
 ○大藤 アイ 大、向津具村川尻、阿、萩江向
 ○金子 シズコ 阿、椿東村鶴江
 ○兼重 龜吉 同、萩町十日市筋
 ○河村 千代子 同、同西田町
 ○河村 テルコ 同、明木村
 ○木村 壽子 同、萩北古萩
 ○口羽 龜子 同、篠生村生雲東方
 ○久保田 チヨ 同、椿東村

在校會員

補習科

(五十音順)

秋山京子	阿、萩町南古萩
河内山續子	同、同 堀内
柏木晴子	同、同 東田町
桑原サヨ	同、同 平安古
田総ユキ	同、同
齊藤愛子	同、同 玉江川屋敷
羽仁素子	同、同
渡部キクエ	同、同 椿東目代
椋木百合子	同、同 惠美須町
村橋元子	同、同 唐樋町
山中時子	同、同 惠美須町

本科第四學年

(五十音順)

赤崎キク	阿、萩町 堀内阿萩南古萩
伊東俊子	同、佐々並村 同町川添
伊東壽美子	同、萩町土原
池永ハツ子	同、同 山田
岩武千壽子	同、紫福村 阿、萩南片河

永野文子	同、同 橋本
中村照子	同、同 川島
中村政子	同、吉部村 本校寄宿舎
野北トメ子	同、萩町河添
林菊枝	同、同 椿
弘ヒサコ	同、同 津守町
藤井チエ子	同、三見村
藤井チエ子	同、萩町土原
藤本マサコ	同、同 川島
藤原トモコ	同、同 椿東
古川愛子	同、田万崎村 阿、山田村奥玉江
藤田楠緒子	同、萩町土原
堀テヲ	同、同 東濱崎
松浦マサコ	同、同
三好榮子	同、同 東田町
元山初子	德島市常三島町 阿、萩橋本
森光子	滋賀縣犬上郡青波村 阿、萩江向
森屋春子	阿、萩町米屋町 阿、萩瓦町
山田富子	大、通村 阿、萩東田町
山根千代	阿、大井村 本校寄宿舎
山藤スエ子	同、山田村
吉村コト	同、萩町熊谷町

井町スミ	同、萩町濱崎
惠美須屋ツル	同、同 山田村玉江
桶谷ハツ子	大、三隅村 阿、萩濱崎
大田貞子	同、萩町山田
大田ユキ	同、同 能谷町
岡田満枝	同、同 町平安古
神崎清子	同、川上村 阿、萩川島
香川トヨ	同、萩町濱崎
金田佳子	同、福川村 阿、萩町八丁
河村信子	同、萩町西田町
河村ユキ子	同、同 御許町
國光フキ子	同、同
齋藤元子	同、同 東田町
品川光子	同、同
杉山綾子	同、同 土原
須子紀子	同、小川村 本校寄宿舎
高洲サト子	同、萩町土原
田村ヒサコ	同、須佐村 本校寄宿舎
刀福琴子	同、萩町東田町
富田ハル子	同、同 土原
長井アヤコ	同、川上村 阿、萩町土原
永田綾子	同、萩町土原

本科第三學年

梅組(五十音順)

渡邊房江	同、同 椿鷺谷
吉田初枝	同、同 八丁川島
村上秀子	愛媛縣今治町 阿、萩石屋町
阿武將子	阿、川上村 本校寄宿舎
内田恭子	同、吉部村 本校寄宿舎
岡村與志子	同、萩町濱崎町
小川ナツコ	同、同 椿東
大田温子	同、須佐村 本校寄宿舎
河村タキエ	同、萩町椿
河村登美子	同、同 濱崎町
河邊時子	大、三隅村 本校寄宿舎
川上富貴子	阿、萩町御許町
神代照子	同、同 八丁
河野ウメ子	同、同 橋本
金子露子	同、同 土原
金子ヤハ子	同、同 江向
木原キヨ	同、同 椿東中小畑
木谷美壽子	同、同 堀内
國重節子	同、同 椿東
後藤ミヨ子	同、同 御許町

齊藤 貞子 同、同椿東
 末成 キクヨ 同、吉部村 本校寄宿舎
 高橋 ミチ子 同、萩町唐樋町
 玉野 富美子 玖、新庄村 椿東村鶴江
 椿井 シズ子 阿、萩町椿東
 長井 龜代 同、同
 中村 信子 同、同 新堀
 西山 文子 同、同 山田
 原田 シゲコ 同、同 御許町
 原田 シン子 同、同 土原
 林 露子 同、福川村 本校寄宿舎
 武居 榮子 都、下松 萩町川島
 平井 キミ子 阿、萩町能谷町
 藤屋 ハル子 同、同 東田町
 松浦 シズ子 大、倭山村 萩町平安古
 松林 英子 阿、萩町椿東
 松岡 綾子 同、同 北古萩
 溝部 ミドリ 同、同 椿東
 光井 泰子 同、同 濱崎町
 宮内 鶴子 同、同 熊谷町
 三好 民子 同、同 椿東
 村上 喜代子 同、同 上五間町

本永 繁子 同、同堀内
 森尾 シゲ子 同、同御許町
 山根 キク 同、同吉田町
 山田 文子 同、同平安古
 山田 ヤヘ 同、同土原
 山本 繁子 同、同上村 本校寄宿舎
 山本 繁子 同、萩町御許町
 芳野 和子 同、同平安古
 有吉 芳枝 同、同川島
 大岡 高子 同、須佐村 萩町今古萩
 渡邊 キヨ子 同、同山田

本科第三學年 菊組(五十音順)

秋山 千代 阿、萩町五間町
 阿武 スミ子 同、福川村黒川、本校寄宿舎
 石川 ナツ子 同、萩町椿東
 石津 和子 同、同河添
 井本 ヨシ子 同、須佐村 本校寄宿舎
 江川 利子 同、萩町山田
 岡本 トシエ 同、同椿東
 岡田 カツ 同、同椿東香川津
 小野村 アキ子 同、同椿東

小野 勝子 同、同奈古村 本校寄宿舎
 大山 アサ子 同、萩町椿東
 久志 アヤ子 佐波郡防府町宮市 萩江向
 窪田 智恵子 大、菱海村 本校寄宿舎
 熊野 久子 吉、山口町下宇野令村 江向
 熊谷 愛子 阿、萩町今魚店町
 佐伯 尚子 同、福川村 本校寄宿舎
 齋藤 春子 同、萩町土原
 篠原 光 島根縣美濃郡小野村 本校寄宿舎
 鹽見 由久子 阿、萩町椿東
 鈴木 結美子 同、同椿東松本
 鈴木 百合子 同、同山田
 高橋 タニ子 同、同唐樋町
 竹内 芳子 同、同濱崎町
 竹下 ハナ子 同、同椿東松本
 田中 ハナ子 同、同佐々並村 阿上五間町
 種子 千代子 同、同吉部村 本校寄宿舎
 飛田 久子 同、同田万崎村 同
 内藤 静江 同、同明木村 同
 奈古屋 イト 同、同萩町米屋町
 中村 豊子 同、同椿東松本
 中村 シノ 同、同十原

能美 千子 同、同椿東中津江
 林 吉子 同、同椿東
 原田 直子 同、同江向
 平原 之子 同、同椿町務口
 平田 政子 同、同津守町 西田町
 福谷 ヒサ子 同、同橋本町
 福永 子 同、同椿東
 福山 子 同、同江向
 堀江 貞子 同、同堀内
 堀來 富士枝 同、同堀内
 馬來 富士枝 同、同堀内
 三戸 歌子 同、同山田
 宮内 マツ子 同、同熊谷町
 村上 フサ子 同、同三見村
 村上 フサ子 同、同萩町山田
 柳田 眞子 同、同椿東
 山根 芳子 同、同同
 山本 貞子 同、同濱崎町
 山本 フユ子 同、同同
 山本 フユ子 同、同椿東松本
 横山 ミサ子 同、同川上村 本校寄宿舎
 岡 豊 同、同萩町熊谷町

本科第二學年 梅組(五十音順)

森重貞子 大、三隅村 本校寄宿舍
 柳井君子 阿、萩町椿
 山本節子 同、萩町
 山本ナヲ 長崎縣長崎市 在阿、萩
 山根チヨ 同、萩町椿東
 吉賀芳子 同、同 椿東
 中原諱子 大、通村
 三原貞子 島、筈期川郡西濱村 本校寄宿舍
 有吉八重 阿、萩町川島
 東君子 大、深川村
 後藤フミ子 阿、萩町椿東

本科第一學年 梅組(五十音順)

赤川鉄子 阿、萩町南古萩
 板垣君代 同、同 平安古
 池内巴 同、同 惠美須町
 伊藤智子 同、宇田村 本校寄宿舍
 伊勢島佐津子 同、萩町濱崎
 伊藤基美 美、共和村嘉萬 萩唐樋町
 岩本禮子 阿、萩町土原
 岩田美代子 同、同 堀内
 鬼村露子 同、同 橋本

大田ミサ子 同、同 土原
 岡キヨ子 同、同 後小畑
 大島スエ子 同、同 濱崎
 金山治子 同、同 下五間町
 河野夏子 同、同 橋本
 上石マコ 同、明木村 本校寄宿舍
 河村繁子 同、萩町椿町
 木村壽子 同、同 御弓町
 黒川サツ子 同、同 東田町
 厚東関子 同、同 松本
 清水タミ子 同、同 別院前
 末岡ハナ子 同、同 魚店
 杉山ナツ子 美、共和村嘉萬 本校寄宿舍
 竹谷ハル子 阿、萩町土原
 竹中富子 同、同 松本
 竹内ヤエ子 同、同 渡口
 田總ヨシ 同、同 平安古
 張倫子 同、川上村 本校寄宿舍
 津田智恵子 同、萩町東田町
 中村ヨシ子 同、同 香川津
 仲子キク 同、同 西田町
 能美ハル子 同、同 唐樋町

長谷フミ 同、同 熊谷町
 波多野ヒサ子 同、同 前小畑
 林喜代子 同、同 中渡
 平野キヌ子 同、同 平安古
 福永ウメ 同、同 堀内
 堀上重 同、同 江向
 堀賀代 同、同 八丁川島
 堀賀子 同、同 堀本中ノ倉
 馬來壽美枝 同、同 堀内
 松田年子 同、同 松本無ヶ原
 村上幸子 同、同 江向
 山本壽美枝 同、同 椿町
 山根秋 同、同 吉田町
 山本八十 同、同 椿町
 山本千代 同、同 江向
 山中エ 同、同 惠美須町
 横山藤枝 同、同 椿町
 米山立身 同、同 松本舟津

本科第一學年 菊組(五十音順)

阿武英子 阿、萩町土原
 荒川登喜江 同、同 松本

安達ヨシ子 同、同 樽金谷 江同
 伊藤松枝 同、同 濱崎
 井町シメ 同、同 越ヶ濱
 伊東浪子 同、同 橋本
 石津里子 同、同 椿町
 内山愛子 都、久米村 本校寄宿舍
 植村ヨシ子 大、日置村 濱崎
 上田ヨシノ 阿、萩町山田
 大谷チエ 同、同 中ノ倉
 岡本芳江 同、同 大谷
 岡橋トミ 同、同 川島
 岡千代 同、同 倉江
 岡静子 同、同 鶴江
 小野キミ子 同、同 椿町
 花山通子 同、同 川島
 兼田三子 同、同 前小畑
 鹿島イツコ 美、共和村 本校寄宿舍
 紀野輝子 金澤市 北古萩
 北出いくゑ 奈良市井上町 江向
 口羽美智子 阿、萩町堀内
 佐方キミ 同、同 倉江
 品川芳子 同、同 熊谷町

進藤	美穂子	同、同	松本
下井	美子	美、大田村	御許町
杉山	文子	阿、萩町川島	
山本	禮子	同、同	倉江
津森	松代	同、同	堀内
中尾	ハル子	同、同	濱崎
中村	ナツ子	同、同	堀内
山田	美智子	同、同	八丁
中村	フツ子	美、共和村	本校寄宿舎
原	文子	阿、明木	同
林	光子	同、萩町中ノ倉	
廣	文子	同、同	濱崎
藤田	郁子	同、同	土原
藤井	政子	大、菱海村	本校寄宿舎
堀	ヨシ子	阿、萩町青海	
松村	トミ子	同、同	鹽屋町
宮原	千代子	同、同	上五間町
村上	信子	同、同	東田町
山下	悦子	同、同	倉江
山本	淑子	同、同	土原
山中	雪子	同、同	三見村
山本	貞子	同、同	橋本
行本	貞子	同、同	橋本

横木	房子	同、同	江向
渡邊	美智子	同、同	大谷
和田	久	同、同	江向
若松	鶴子	同、同	東田町

實科第二學年
(五十音順)

阿武	フチ子	阿、水間	平安古
有吉	榮子	同、萩町東田町	
有田	喜代子	同、同	椿村
有田	イシ子	同、同	江向
阿川	イチ子	同、同	濱崎
東屋	ヨシ子	同、同	下五間町
池内	登美子	同、同	堀内
植村	キク子	同、同	三見
岡	公子	同、紫福村	平安古
金子	智恵子	同、宇田郷村	本校寄宿舎
河野	タマ子	同、萩町椿村	
河崎	ユキ子	同、同	堀内
河村	ミドリ	同、同	越ヶ濱
佐伯	フサ子	同、福川村	本校寄宿舎
佐古	美子	同、萩町河添	
島本	チヨ	同、同	濱崎

關屋	キヨ子	同、同	五町
田村	キク子	同、同	椿村
田村	ハナ子	同、同	河添
田村	芳子	美、大田町	本校寄宿舎
田村	フミ子	大、菱海村	阿、萩町越ヶ濱
友永	ヒナ子	美、大田町	本校寄宿舎
内藤	敏子	阿、福川村	阿、萩玉江
中原	シズ子	同、福川村	同、同平安古
中本	初代	同、田万崎村	本校寄宿舎
中村	キサ	同、大井村	阿、萩江向
西山	アキ子	同、萩町川島	
原田	テル	同、同	江向
林	フチ子	同、同	川島
林	アキ子	同、同	下五間町
波多野	フミ	同、同	三見村
福永	ミツ	同、同	堀内
福住	ミチ子	大、菱海村	本校寄宿舎
藤田	ミサ子	阿、萩町土原	
堀本	トキ子	同、同	堀内
松浦	タケ子	同、同	橋本町
松原	ムメ	同、同	奈古村
三輪	和子	同、同	萩町椿東

水島	ヒサ子	大、菱海村	本校寄宿舎
村田	シツ子	阿、萩町濱崎	
武藏谷	梅子	同、同	町
森田	富士枝	同、三見村	本校寄宿舎
吉屋	タケ	同、大井村	西田町
渡邊	フシ子	同、大井村	西田町

實科第一學年
(五十音順)

伊藤	シズ子	阿、萩町前小畑	
伊藤	コト	同、同	濱崎
池田	キミ	同、同	名古村
井上	清子	厚、小野村	井町
井町	フク子	阿、萩町濱崎	
沖野	マス子	大、菱海村	本校寄宿舎
岡田	ヒナ	同、深川村	河添
大草	操	阿、須佐村	東田町
小田	文子	同、名古村	本校寄宿舎
小田	マツ子	同、同	同
片山	政子	同、大井村	熊谷町
河崎	イト	同、萩町雜式丁	
佐藤	ヤス子	同、生雲村	本校寄宿舎
佐々木	トキ子	同、吉部村	江向

末武	同、萩町越濱
田中	同、名古屋村 本校寄宿舎
田中	同、大井村 江向
谷村	大、菱澤村 本校寄宿舎
高州	阿、萩町金谷
時山	同、同、奥玉江
徳重	同、篠生村 中渡
永田	同、大井村 江向
服部	同、紫福村 本校寄宿舎
平田	同、萩町濁淵

深田	宇多代
藤原	サチコ
堀尾	シズエ
松浦	チヨ
町田	ヨシノ
三浦	文子
山崎	ヨシ子
八木	菊子
吉永	久子
吉村	操

大、菱澤村	本校寄宿舎
阿、萩町大谷	
同、同、堀内	
同、大井村	江向
阿、萩町濱崎	
同、同、熊野町	
同、同、西田町	
美、綾木村	濱崎
阿、萩町青海	

亡き會員の靈に

飛鳥の淵瀨定めなき世さはいへ、かつては志を同じうして此の學び舎に學んだ人達が、その若きもつたま、その希望を抱いたま、鳥部の煙と化せられた其の年月を馳つた時、如何に新しい涙をそらされるでせう。

親、はらからの悲しみ、親しき朋友の歎き、永久に愁へて、消ゆるの時はありますまい。悲しめばこそ歎げばこそ、か

へり來給ふ日のなきまゝに、悲しくも心の亂れはますますでせう。今年の物淋しい私の聲をきくにつけ。

こゝに痛ましき會員の方々の名を並べて、靜に、たゞ靜に瞑目してはるかに居ます亡き會員の方々の冥福を祈りませう

南園會々報部

- 實科第一回卒業生 (大正二年三月)
 - 大草 政子(山本)萩
 - 田中 冬子 椿村
- 實科第二回卒業生 (同 三年三月)
 - 嶋田 壽美 椿村 同九年五月
 - 内藤 千代(堀)萩
 - 高橋 恭 小野奈古村
 - 田邊 カメ(山下)椿東村(同十一年)
- 實科第三回卒業生 (同 四年三月)

- 河野ミツコ 萩 高保村
- 倉増千代子 萩
- 松原 ヨシ 萩 (同 九年六月)
- 三浦 ヨシ 萩
- 榎原マサミ 萩
- 藤原ハル(澁部)椿東村 萩 (同 十年六月)
- 政(大賀)萩
- 實科第四回卒業生 (同 五年三月)
 - 藤原 久枝 椿東村(同七年十一月)
 - 山根マタコ(柳井)萩
 - 伊藤 光子(北村)同 椿東村 (同七年十二月)
 - 野村 マツ 椿東村
 - 秋山 キク(齊藤)萩 椿東村 (同 八年八月)
 - 阿武 ムキ 椿東村
 - 上田 ツル 萩
 - 吉光野俊子(中原)同 萩 (同十一年四月)
- 實科第五回卒業生 (同 六年三月)
 - 池田 京子 萩
 - 中島ヨシ子 萩
 - 杉村 静子 椿東村(同 八年八月)
 - 杉村 サチ 山田村(同 七年一月)
 - 藤田ハツセ 椿村(同 九年七月)
- 實科第六回卒業生 (同 七年三月)
 - 堀永 ツタ 三貫村(同 七年七月)
 - 中村 貞子 椿東村(同 八年)
 - 村上 ヲメ 萩 (同 八年四月)
 - 大庭ヨシ子 萩 (同 八年八月)

- 田總イセコ 萩 (同 八年十一月)
- 伊藤ハナコ 萩 (同 八年三月)
- 白石 壽子 萩 (同 八年一月)
- 中山 壽子 萩 (同 七年七月)
- 實科第七回卒業生 (同 八年三月)
 - 松浦キミ子 萩 (同 八年)
 - 大賀 ヒデ 萩 (同十一年九月)
 - 宮木 信子 萩
 - 澁部サメ子 萩 (同 九年)
- 實科第八回卒業生 (同 九年三月)
 - 五峯ヨシ子 萩 (同十二年十月)
 - 林 春枝 萩 (同十二年六月)
 - 河野 雪子 萩 (同十二年十一月)
 - 仁尾 玉 萩 (同十一年六月)
 - 高州ナナコ 萩 (同 十年六月)
- 本科第一回卒業生 (同 十年三月)
 - 小嶋 貞子 椿東村(同十一年一月)
 - 山根 勝子 大井村
- 實科第九回卒業生 (同 十年三月)
 - 波多野トミコ 萩 (同 十年九月)
 - 三上ヨシ子 山田村(同 十年四月)
 - 御手洗峰子 川上村(同十一年五月)
- 實科第十回卒業生 (同 十二年三月)
 - 大石 ツヤ

死亡の月日は、會報部の委員の方が夏休前から手分けして調査致しましたが、以上の上の成績でした。皆さんが御承知の方が御座います。御一報願ひます。

大石さんの死について

大石さんはこの春(大正十二年三月)本校實科を卒業なさつて東京の職業學校に入學し、きつりに研鑽の功を積んで早稲田大學に入学された。五月一日東京地方大震に當り、授業中同校遭難の苦さまさ、悲しい運命を共になさいました。痛ましい限りです。同期卒業生は此の報を得るに同様に深い哀悼の意を表し、心からの香典を贈られたさうです。私達は、大石さんの死になかされ、同期生の信義のおついでに、なにかされたい。左の一文は、其際大石さんの父様から、同期生に宛てられた感謝状であります。

(前略)陳ば、懇娘ツヤ萩母校に在學中は、方ながらの話し話になりまして、此の度東京にて思はず災難に罹り、世の人となりまして、つきよしては、早々御丁々なる御慰状を、厚く御祈り申上げ、此の今日迄も、有難く厚く御祈り申上げ、御座居ましたが、今日迄も、御無禮致し、居ります。御許し下さいませ、先は御禮まで、草々

編輯だより

○ 桐一葉、又桐一葉と、數ふる時も早過ぎて、萩の上葉に戦ぐ風、あはれ身にしみて、霜月の天地の静寂、思索によし、冥想によし、されど先づ會員諸嬢の御健康を祈り候。

○ 研讀一年、更に次號を期して相見申すべかりし次號は、今こゝに漸く其の全部の編輯をへ候。果して如何、研讀の跡ありや、我の期待にだに添ひ得たるか。

○ 木の葉散る黄昏の影にひそめる淡き歎きこそ、今の心の心持にて候ふべし。力足らず財足らず、更に時の足らざるを、そはたゞに會員諸嬢の寛恕に待たむのみに候。

○ されど僅に、たゞ僅に慰むべきは、昨年の紙質劣悪、編輯振りの粗雑、誤字誤植の多かりしに比し、今年は活版所にては吾の不備を補ひくる、なるべしと信じ得べき事に候。

○ 本紙の會員諸嬢の前に致さる、日は、夜長の徒然を埋火にやる年内なるべし、懐しみもて、親しみもて、諸嬢の瞳は如何に輝かんか、其日の早きを待ち侘び候。

○ 蜀を望むの類ならんも、會員諸嬢の本誌に對する、後援、理解、ミ利導の攻究については、今一段の御心盡し願はしく、かくて本誌の存在は益々有意義と存候。

○ 前號にても申上げ候へ共、由縁の園、(校外會員文壇)の如き尙寂寥の感を免れず、會員中にて此の道に趣味ある方も尠からざるに、如何にやと存じ候。

○ 本號は會報部委員より多大の援助をうけ候。紙面の都合により、委員のものせし數々は削除の止むを得ざりし事、氣の毒に不堪委員諸嬢の御了承願置き候。

○ 園生の露は深みて、小菊の香もあせたらん。されど我等の血液は赤く、我等の道程には光明あらん。ほ、笑みて立つ身の幸を、お互に味ひたきものに候。

大正一二、一一、一八

標本室にて

みつば生

大正十二年十二月二十日印刷
大正十二年十二月廿五日發行

山口縣阿武郡萩町大字平安古	發行兼編輯人	柳原良助
山口縣吉敷郡山口町道場門前	印刷人	平佐國介
全上	印刷所	大同印刷舎
山口縣阿武郡萩町	發行所	萩高等女學校南園會

